



第2部 高揚する学生運動の中で(1967年から69年)

No509 重信房子 「1960年代と私」 第二部第1回 2018年11月

「1960年代と私」は、重信房子さんが大学(明治大学)時代を回想した自伝的文章である。この「1960年代と私」は三部構成となっており、第一部は明大入学の1965年から1966・67年の明大学費闘争まで、第二部は1967年から1969年にかけての砂川闘争、10・8羽田闘争、神田カルチャータン闘争など、第三部は「赤軍派時代」として1969年の赤軍派結成から赤軍派崩壊、そして連合赤軍への道が描かれている。「1960年代と私」の第一部は、既に私のブログで公開しており、2017年5月に公開を終えている。

<目次>

第2部 高揚する学生運動の中で(1967年から69年)

第1章社学同参加と現代思想研究会(67年)

1. 私の触れた学生運動の時代
2. 全学連再建と明大「2・2協定」
3. 明大学費闘争から再生へ(大学内の闘い)
4. 社学同加盟と現代思想研究会
5. 67年現思研としての活動
6. 67年春福島県議選のこと
7. 全学連の活動一砂川闘争
8. 67年学園闘争の中で
9. 10・8羽田闘争へ
10. 10・8羽田闘争の衝撃

第2章国際連帯する学生運動

1. 高揚する街頭行動と全学連
2. 三里塚闘争への参加
3. 68年高揚の中の現思研
4. 御茶ノ水・神田カルチャータン闘争へ
5. 三派全学連分裂一反帝全学連へ
6. ブントの国際連帯集会
7. 全国全共闘の波

8. 現思研の仲間遠山美枝子さんのこと

9. 現思研・社会学同とML派の対立

10. 69年東大闘争

11. 教育実習と4・28闘争

第1章 社会学同参加と現代思想研究会(1967年)

1・私の触れた学生運動の時代

60年代の学生運動を語るとすれば、戦後の学生運動の流れから、日本最大の大衆運動となった60年の日米安保条約反対闘争のことを記す必要があるかもしれません。

しかし、私や私たち世代の闘いのエピソードをふり返るにあたっては、やはり体感した60年代中期以降の活動と、その様相から書き始めたいと思います。

日本共産党から分裂して、独自に主体的に60年日米安保反対闘争を闘った共産主義者同盟(ブント)は、安保闘争後、闘いを終えてその使命を終えたかのように行き詰まり、安保闘争の総括をめぐって混迷したまま分解していきました。

同じ頃、日本共産党の学生組織も再建され、また、別個に成長した反スターリン主義・永続革命を唱えるトロツキー主義潮流を含めて、ハンガリー動乱や「中ソ論争」をめぐってソ連の批判や論争が続き、学生運動も革命運動も再編されていく時代にあったといえます。

60年代前半期のそうした味方内部の論争を経て、大学では「大管法」をめぐる闘い、政治的には日韓条約をめぐる闘いが始まります。

日本は60年安保後の高度成長策を軌道にのせて、経済成長が本格化していきます。米国の反共戦略のイニシアチブのもとで、それが日韓条約へと結びつき、日本はアジアとの新しい関係を構築する途上にありました。

反政府運動では、米国のアジア侵略に反対し、また日本政府の米アジア戦略加担と、日韓条約反対闘争の中で、活発に歩み始めました。国会では、社会党、日本共産党(日共)などの野党勢力は、自民党の政策に反対し、その行動は国会外の大衆運動と連動して、日韓条約反対闘争も活発化していました。この大衆運動の中で、共闘しつつも独自の潮流として60年安保を闘ったブントを継承した学生たちの運動も足並みを揃え始めました。

この潮流は、ブントの日共批判を思想的路線的に継承し、日共の「議会主義」「一国主義」「官僚主義」を批判する新しい左翼の流れに位置していました。その中には「反スターリン主義」「永続革命派」が多くを占めていましたが、トロツキストの影響を受けつつも、必ずしもトロツキストのみを意味したわけではありません。

この新しい左翼は、日共の「議会主義」「反米民族民主主義革命」には、「暴力革命」「日帝打倒社会主義革命」を掲げ、「インターナショナリズム」を旗印としていました。そして、これまでのソ連に統合されている国際共産主義運動を「一国革命の総和」と批判し、世界革命を求めます。こうした潮流はニューレフト(「新左翼」と呼ばれ、日本だけの現象ではなく、資本主義国中心に、既存の共産党のあり方を批判する新しい左翼勢力として成長していきます。

日本の新左翼運動は、64年6月に東京都学生連合(都学連)再建準備大会を実現することで、60年ブントの流れを継承する学生運動として、統一の兆しを示されてきました。

関西では、60年安保闘争を闘った勢力は、一部トロッキー主義へと流れつつも、関西ブントとして以降も闘いを継続していました。63年にはトロッキスト潮流の「革命的共産主義者同盟」(革共同)の中から、60年安保ブントを継承した本多、北小路さんらが、暴力的対立の中から、「革共同中核派」として分裂し、新しい革命党として出発しています。

一方で、ブントの流れを組む「東京社学同」が再建されるなど、これらの勢力の動きが下地となって、都学連再建準備大会を進めていました。この都学連勢力は、64年9月には「米・原潜寄港阻止横須賀集会」に2千人が参加し、組織的再建と共に、街頭闘争も活性化していきます。10月・11月と米原潜寄港阻止・日韓会議反対闘争を闘い、12月には「原潜阻止・日韓会議反対全国学生共闘会議」を結成しています。



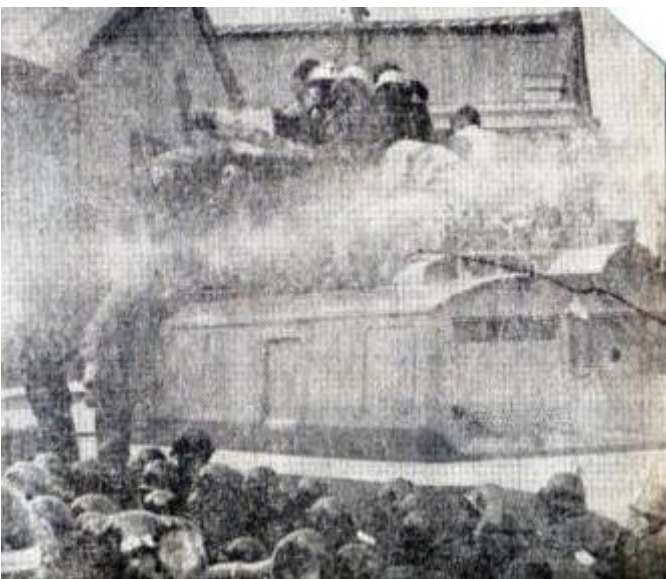
(1964. 11. 7横須賀)

この頃には、日共の指導下にあった平和と民主主義のための学生連合「平民学連」は、「全学連」として再建され、新左翼系の活動を「トロッキスト」とか「暴力主義者」と否定し、別個に敵対的な

潮流として学生運動を形成しています。

65年に入ると、学生運動、ことに新左翼運動はラジカルな活動スタイルで新しい生命力をみなぎらせて混迷の時代に終止符を打ち、統一の流れに向かいます。これらの新左翼潮流の特徴は、かつての60年安保ブントがそうであったように、大衆行動、現地闘争をひるまず誠実に闘い抜くところにありました。つまり、権力の弾圧に抗して闘う以上、先鋭化は避けられない道を歩み続けるのです。

65年2月、椎名外相は日韓条約協議のため韓国訪問が決まり、この椎名外相訪韓阻止羽田現地闘争から、秋の日韓条約を巡る国会での大詰めを迎えて、激動の日韓条約反対闘争が続きます。



(1965. 2. 16椎名外相訪韓阻止闘争)

このころのブントの再建過程を見てみると、60年安保闘争を闘った関西ブントは、京都府学連を中心にして、ブントとしての活動を継続していました。

64年9月には、関西ブントとしてブント中央委員会を開き、地域の組織拡大を掲げ、65年4月には新しい学運動論を提出しています。「政治闘争・社会政治闘争—第三期学生運動論」というもので、京都府学連書記長の一向健(塩見孝也さんのペンネーム)によって提出されています。

65年6月には、ブントは東京や関西地方含めて共産主義者同盟(統一委員会)結成大会を開き

ました。関西・東京のブント社学同を中心にして、ブントを全国組織化し、「第二次ブント」を結成したわけです。この再建されたブントの議長に松本礼二さんが就きました。

(その後、66年5月第2回ブント大会において「共産主義者同盟の全国的確立・大ブント構想の一環」としてマルクス主義戦線派(マル戦)との統一を決定しています。)そして65年7月31日に、社学同再建大会を開き、社学同も再建しています。社学同は、全国委員会の委員長に高橋茂夫さん、副委員長に塩見孝也さんと高原浩之さん、書記長に斉藤克彦さんを選び、第二次ブントとして闘いつつ、全学連再建にむけて活動を重視していきます。

この時期には、ベ平連(「ベトナムに平和を! 市民連合」)も結成され、ベトナム戦争反対闘争と、日韓条約反対闘争が勢いよく盛り上がっていた時です。65年7月、ブント社学同の再建のころ、労働組合の最大組織の「総評」青年部、社会党の青年部の「社青同」、ベ平連の小田実さんらの呼びかけで「ベトナム戦争反対・日韓条約批准阻止のための反戦青年委員会」(略称「反戦青年委員会」)が結成されます。それは、労働組合などの42団体、ブントら10の左翼団体を含む、非日共系の統一戦線的な団体として、社会党と総評の枠内から生まれたものです。こうした時代の転換期の65年4月に私は明治大学に入学したわけです。

2・全学連再建と明大「2・2協定」

65年の日韓条約反対闘争を経て高揚した学生運動は、66年に入っても拡がり続けました。同じころ、学費値上げ問題が深刻化していきました。これは、全国私学共通の問題としてあったためです。慶應大学同様、早稲田大学でも学費値上げ反対闘争は150日間にわたるバリケードストライキで闘いぬきました。しかし66年、文学部バリケードが撤去されてストライキ闘争は幕を閉じさせられました。だからといって、闘いは死んだわけではなく、学生たちも、また、党派的な活動も、良くも悪くも強固にきたえられたのです。そして闘いは各地に広がりました。66年には横浜国立大学では、教員養成制度の改悪阻止全学ストライキ、慶應では専門科目削減反対闘争、立教大では学館の管理運営や生協の闘い、東大では五月祭警官パトロール抗議闘争、青山学院大では処分反対闘争、京大では自衛官入学反対・フォード財団委託研究反対闘争など拡大していったのが66年です。明大でも66年から学費値上げ反対闘争が本格化します。

65年日韓条約反対闘争を都学連として大衆運動の一翼で闘いぬいた成果をふまえて、66年3月、都学連指導部を中心にして、12月には全学連を再建するという方針を決定しました。

そして、すでに「はたちの時代」(「1960年代と私」第一部)で述べたように、66年12月、全国35大学、71自治会、1,800人の結集参加によって、全学連が再建されています。民青系全学連、革マル系全学連に続いて「三派全学連」がここに結成されたわけです。



(1966. 12全学連再建大会)

この66年12月の三派全学連の再建は、当初から激しい怒号や論争という、後の分裂を思わせる出発をなしています。それはまず、大会前からこれまでの全学連の継承のあり方をめぐってもめています。

中核派は「第20回大会」を主張し、社学同は「第17回大会」とすべきだといい、社青同解

放派は「第1回大会」を主張して折り合えないのです。その結果、結局「全学連再建大会」とのみ呼称することになっています。論争しては妥協点を見つけながら、全学連再建大会は、基本スローガンと3大基本路線を決議しました。基本スローガンは、「侵略と抑圧に抗し、学生の生活と権利を守れ」を採択しています。

そして、3大基本路線は・・・

1. 我々の闘いは政府・支配者階級の攻撃に対決し、学生人民の生活と権利を守る闘いである。
2. この闘いは、弾圧と非難と孤立に耐えぬく実力闘争以外に貫徹しえない。
3. その為の闘争組織を作り、闘いの砦・自治会に結集して闘う。

というものです。そして以上の方針を執行する中央執行委員会メンバーを選出しました。

(中執メンバーの構成は、三派各9名、書記局構成は「社会学同」「中核派」各5名、「解放派」3名、「ML派」と「第四インター」は執行部人事に加わらなかった。)

全学連委員長は「明大社会学同」の斎藤克彦都学連委員長が選ばれています。

明大記念館で行われたのは、2日にわたる全学連大会の最初の日だったと思います。

ちょうど、12月1日に、二部学生大会で民青系執行部の学苑会(二部夜間部学生の中央執行機関)から、対案によって60年安保以来、学苑会執行部を奪回して活動をはじめたばかりの私たちも、この明大バリケードストライキの中で行われた大会を見に行ったものです。

革マル系全学連による妨害の動きと、機動隊による包囲の校門外の態勢、構内は明大当局の監視もありました。激しい野次と熱気、しまいには、壇上に向けあがっての小競り合いと、何をめているのかよく理解できない大会でした。中断して議長団が話合ったり、わけのわからないうちに大会は終了しましたが、明大記念館を轟かすような大勢によるインターナショナルの歌は素晴らしかったと心に残りました。

この再建全学連大会は、全学連委員長斎藤克彦(明大)、副委員長蒲池裕治(同志社)と高橋幸吉(早稲田・解放派)書記長秋山勝行(横国大・中核派)を選出しました。全学連が結成されたことは、当時は、全面的に学生の利益となる闘いの強化だと思っていました。でも、それにはプラス効果とマイナス効果があったと、後知恵的ですが、とらえ返すことができます。

プラス面は、全国の大学が「学問の自由」「大学の自治」を土台に共通の問題を個別大学の枠を越えて考える基盤が生まれたことです。共通に直面している問題を理解しあい、相互に支援し合って共同して解決する条件が生まれたことです。日本政府に対する政治闘争においても、野党社会党や共産党、労働組合、総評、産別や「反戦青年委員会」などと、「全学連」として共闘し、統一行動もとれるようになります。また、各大学も全学連と結びつくことで、共通の政治課題にすみやかに行動しうる有利な条件が生まれました。また、明大もそうだったように、日共系による大学を越えた地区党らを含む組織的な競合、対立に対して、私たちも組織的拠り所を持ったことは有効だと思っていました。

しかし、否定面もありました。それは第一に、以降深まる党派の争いの影響です。すでに「都学連」として、日韓条約反対闘争を闘ってきた街頭行動にも現れていましたが、全学連の主導権をめぐって、中核派、ブント、社青同解放派、ML派などの争いが絶えずくり返されたことです。世界各地の解放・革命組織と共同したり、交流してきた私自身の経験に照らしてとらえ返すと、党派闘

争によって殺人に至る持続的な「内ゲバ」暴力は、日本の左翼運動にとりわけ特徴的な傾向であったと思います。

これは第三インターナショナルの「加盟条件」に示され、スターリン時代に厳格に適用された「一国一党」の原則の無自覚な教条化なのかもしれません。自己の党の「無謬性」によって、「唯一性」を主張し、他を認めないあり方です。他党派を批判することで自党の「無謬性」を理論的に証明し、それを立脚点として自己正当化していきます。スターリンやスターリン主義を批判しつつ、「唯一性」と「無謬性」の拘泥は、同じ陥穽にあると思わざるをえません。結局、理論、政策、路線の競合のみならず、物理的に相手を解体しようとする「内ゲバ」に至り、自分たちの側からしか物事が見えず、対象化しえない分、共に闘うべき人々を離反させる結果に至ってしまいました。

第二の否定面は、やはり第一の党派のあり方の影響でもありますが、大学の自治会が党派の「下部組織」のような位置に陥ったことです。学生運動や、自治会活動は、革命を目指す党派からみれば、重要な一翼ではあっても、そこに党を代行させることはできません。全学連は「大衆闘争機関」であり、学生運動を革命党派の「下部組織」のように位置づけるあり方は、ますます全学連執行部や自治会人事を権力闘争の場にしていったのだと思います。逆にいえば、党派は大衆運動機関の質にとどまっていたともいえると思います。

66年12月、全学連(三派)は再建され、明大社学同の斎藤克彦さんが委員長となりました。このことは明大学費値上げ反対闘争に作用したといえます。すでに「はたちの時代」(「1969年代と私」第一部)の明大学費値上げ反対闘争で書いたように、再建大会から2ヶ月もしないうちに、いわゆる「2・2協定」が調印されています。明大の学費値上げを、学生代表らとの合意を破り、理事会が一方向的に学生へのダイレクトメールで通知するという事件が66年12月に発覚した後の闘いです。

学費値上げの必要性を問い、学問の充実や「自治」をめぐる問題とあわせて、1月から話し合いが続いていました。学費値上げ以外の方法を学生側は問い、理事会に誠意を求め続けました。理事会側は66年12月15日の正式表明まで、のらりくらりと「値上げをする」という確答を避けていました。しかし理事会側もそれまでは一時期値上げすることを迷っていたし、また、進歩派といわれた学長小出康二さんは「値上げ撤回を考えてはどうか」と、宮崎学生部長(当時)に相談したりしていました。66年には「値上げ凍結」で話合う機会もあったかもしれません。しかし67年1月には、すでに値上げが示された上で話し合いが続いていました。そして1月30日、機動隊が導入され、理事会はこれまでの妥協をも撤回しています。

全学連委員長を引き受けたばかりの、明大社学同のリーダーたちは、学長名による1月30日付学費値上げ反対の昼間部と夜間部の闘争機関の「解散命令」後にも、何とか收拾しようとあせったのでしょう。



(1967. 1. 30明大機動隊導入)

全学連の中で、ブントとしての勝利的成果をつくりたかったのかもしれませんが。

2月になれば、入学試験が強行され、大学自治は再び警察権力の介入で壊されてしまい、処分者を出さざるをえない現実も予測されていました。当時、体育会右翼の激しい攻撃で、学生大会を開くことも、収拾案を民主的に決議採択することも、難しかったかもしれません。

しかし、他の方法はとれなかったのでしょうか？

2月1日の明大社学同会議では「理事会との手

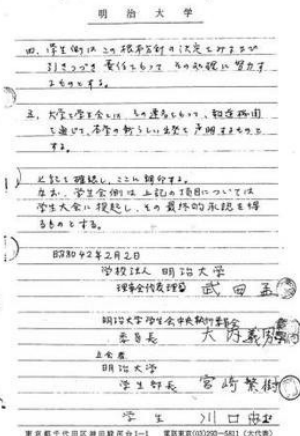
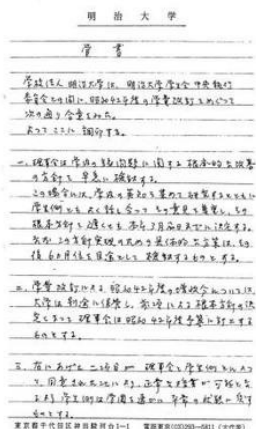
打ちに反対」して「継続討議」を決定して散会したのですが、リーダーたちは、その足でホテルに向かい、理事会と協定に調印しました。

これは社学同仲間にも、学生たちにも裏切り行為でした。「2・2協定」の覚書よりも、ほんの少しましな「明大改革案」を理事会側が提出し、「叩き台」として話し合っていたのは、1月29日から30日の明け方のことです。学費値上げの白紙撤回には程遠くとも、力関係の結果がそこに一定の改革として示されていました。その「叩き台」をふまえて、昼間に明治大学構内で調印と記者会見を公明正大に行ったなら、もっと違った展開になったでしょう。大学での調印はできたはずで、「暁の妥結」といった「煽情的」なニュースとして社会に伝えられることはなかったでしょう。

調印責任者の大内学生会委員長は、「2・2協定」合意後に、まず学内に戻り学生に説明するつもりだったようですが、順序が逆だったのです。まず中執会議を行い、学生大会に臨み、全学生の決議機関の採決を経て当局と交渉に入るという順序の逆、理事会側とスケジュールを決めて調印し、その後、それを既成事実として社学同仲間から合意を取り付けるつもりだったのでしょう。

しかし、この「2・2協定調印」は他党派ばかりか、まだ統一再建して間もない社学同の他の大学の仲間たちからも怒りを買いました。

中核派は、明大昼間部学生会室に殴り込みをかけて、直接当事者ではなく、むしろ批判者であった人たちに「お前は社学同だ、自己批判しろ！」とリンチしては「自己批判書を書け」と迫っていききました。こうした暴力沙汰の危機と、「2・2協定」白紙撤回求める声明が、あちこちの明大の学部執行委員会から表明されました。当の合意した当事者たちは大学に近づけなくなってしまったせいか、行方が知れません。



(2・2協定)

和泉校舎は、やはり社学同系が執行部でしたが、2月1日の社学同会議では「妥結」に反対していた人たちです。彼らは学生集会をただちに開き、「ボス交の2・2協定は無効だ」と宣言しました。全学闘争委員長であり、学生会中央執行委員長である大内さんは、工学部生田校舎の方にいるらしいのです。

大内さんは、明大新聞に次のように述べました。「これは(「2・2協定」のこと)現実の力関係

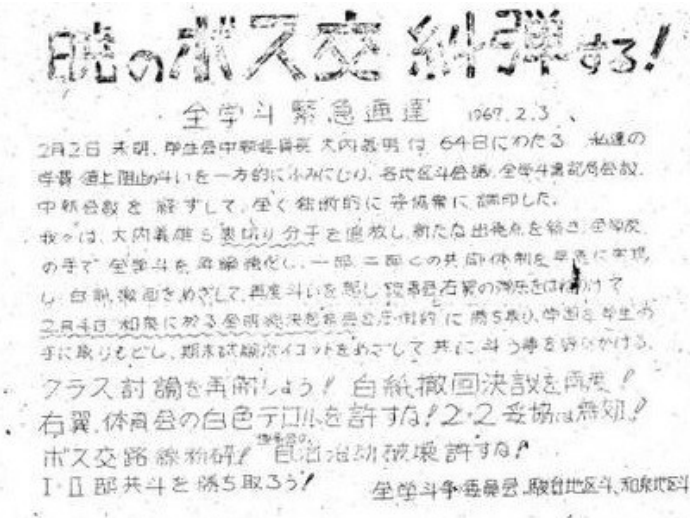
の上での休戦であり、次のステップのための妥協である」と。しかし、和泉校舎にも神田駿河台校舎にも公然と戻って説明できる条件は失われています。

ブント自身も再建されて間のない寄せ集め的で、一枚岩でもありません。ブント内の元「社学同統一派」が全学連委員長斉藤克彦さんが属していたグループだったので、ブント内からも斉藤一派追及が続いていました。この件で、ブントは再建全学連斉藤委員長追放と、中核派の秋山勝行委員長代行という事態を認めざるを得なくなりました。その分、中核派もブントも「非妥協主義」が以降、前面に主張されていくようになったと思います。また、この件で「自己批判」を迫られたブントも「ボス交斎藤一派路線」を否定し、中核派と競うように、政治的「妥結」や、大学当局との「合意」を否定し、「革命における改良闘争」ととらえる観点を棄てたように思います。これまでの大学当局との改良・改善の話合いではなく、「白紙撤回」を断固求める道へと進むことになりました。それは後に「革命的敗北主義」として路線化されていきます。

(2・2協定反対のビラ)

今からふり返ると、明大学費闘争は二つの点で「学生運動の岐路」に立っていたように思います。一つは、個別大学自治会の活動における改良闘争を否定する方向に一歩も二歩も踏みだしたことです。もちろん、全学生を結集し白紙撤回を求める闘いの勝利もありえます。

66年の明大の学費闘争での可能性や、68年2月、中央大学の学費値上げ反対闘争は白紙撤回を実現してい



ます。それは、現場の指導部が主体性をもって、よその介入をはねのける力関係や、当局側の考えも作用しています。学内自治を守り、あくまでも警察機動隊権力の介入を許さない大学当局もありました。勝利かゼロか(実際にはゼロ以下)という闘い方の他に、改良闘争も条件闘争として位置づけて闘う余地は、まだ当時はあったと思います。それらを否定する方向に導いたのは、党派の介入の否定的な動きです。「ボス交」の2・2協定にみられた「決定の独占」にも、また、以降

の「白紙撤回」一辺倒の闘いのあり方にも、党派的な利害に自治会の活動が制約されていたといえると思います。

もう一つの点は、「ポツダム自治会」の否定という名の「非民主」の常態化についてです。明大学生運動は、ずっと、クラス代議員による決定に基づいて学生大会を学生の最高意思決定機関として、自治会は運営されてきました。私たちが夜間部学苑会を民青系から奪取したのもまた、学生大会の多数派形成をもって行われてきました。

多数派形成は、学生の要求と向き合わなければならず、常に足かせのように執行部の党派的飛躍や、それら一辺倒の志向を問う作用がありました。「ポツダム自治会は形が美化した民主主義だ」と批判されながらも、クラス討論を行うための「総学生の意志」を無視しえない規律がありました。

明大においても、早大や慶大同様に、自治会組織とは別個に闘争機関を結成して闘ったのですが、学生大会ルールを大切にしていたと思います。学生大会は、直接民主主義ではないけれど、全学生に向けて開かれた論争があり、民青系と激しく論じつつ、その中で多数派形成し、方針が決着していきました。全学連再建時の基本路線にも示されたように、自治会を基盤に、自治会と別個に「闘争機関」を作って闘うことを奨励していました。

この思惑は、二重性を持つことで、自治会をつぶそうとする権力の攻撃に対して「闘争組織」が責任を負う構造をつくる防衛的意味と、自治会の制約をとっぱらって、または自治会権力を掌握できなくとも、より先鋭化して闘う攻撃的意味が含まれていたと思います。早大闘争の時にも明大闘争でも、「ポツダム自治会批判」とともに「闘争機関」を結成して闘う方式が広がっていきました。それは後の「全共闘運動」へと時代を拓き、学生運動の広がりや全国化をつくり出していく方法となりました。

そこには、闘う意思のある者が直接民主主義形態で闘う良さがありました。同時に否定面としては、全学を代表する自治会の学生大会決議などが軽視されるようになっていったのではないかととらえ返します。そして、逆に党派の意志が深く運動を支配する構造になったのではないかと思います。量的な学生の同意がなければ、政治的突出が許されないと、当時の日共のようなことをいっているわけではなく、党派と学生指導部の側に、その「制約」の自覚と方法が欠けていたことこそ問題としてとらえています。

明大についていえば、私の知るこの67年から69年の闘いにおいては、大学の自治会・学生大会を第一義とする闘い方をゆるがせにはしなかったと思います。しかし、明大闘争後「2・2協定」後は、「非妥協」が闘いの「モラル」となり、以降も引くべき時に引けない新左翼学生運動の、良くも悪くもラジカルな闘い方を拡大していくことになったと思います。私自身がそうであったように、闘いの渦中にあっては「妥協」が不純で「裏切り」に見えてしまうのです。

67年明大学費闘争のあとには、国際基督教大、法政大、佐賀大、東洋大など、全学連再建とともに闘いは多くの大学へと波及していました。そして、バリケードストライキに対して機動隊導入、全面衝突が続き、渾身を賭した学生たちの皆は、次から次へと破壊されていました。明大闘争で闘い切れなかった個別闘争の「改良と革命」や、党派のあり方は問われないまま、街頭政治闘争、運動戦の拡大は、「非妥協」を最良の闘いとして突き進んでいきます。2・2協定を経て中核派は「右翼体育会・ガードマン」から、はては国家権力を使って暴力的に身構

えた学校当局の最後の拠り所をつき崩す闘いは、唯一、学生の大衆的な実力闘争の展開であり（中略）闘いそのものをより目的化し、自覚化され、目的意識と自覚によって武装された闘いが明大闘争にもちこまれること」を求め、ブントは「大衆自らの闘争ヘゲモニーによる実力抵抗部隊こそ、来るべき階級決戦をプロレタリア革命に転化する主要部隊に発展するであろう」と述べています。実力による「徹底抗戦路線」は、明大学費闘争の「教訓」として67年の流れを中核派のイニシアチブ中心に形成されようとしていました。

3・明大学費闘争から再生へ(大学内の闘い)

明大学費闘争は、すでに述べたように、理事会と昼間部学生会の「合意」に近づいた67年1月29日、徹夜団交中の1月30日早朝の機動隊導入、バリケード解除と「ロックアウト」となり、昼間部全学闘争委員会と、全二部共闘会議の「解散命令」が学長名で発令されてしまいました。昼間部社学同側は、29日、合意ぎりぎりまでこぎつけたのに、ML派と中核派による「白紙撤回要求」と「徹底抗戦」の他大学の動員に、大学院の団交会場が包囲され、「機動隊導入」という事態に至ったという思いが強かったようです。

昼間部中執としては、責任ある形で決着させたいと主観的には思ったのでしょうか。それが、入試実行と引き換えに奪われた堡壘をとりもどす突破口として、理事会側とのかけひきから「2・2協定」という過ちへと至ったのでしょうか。

その結果、大学当局と一体化した体育会の暴力パトロールは強化され、大学はロックアウトされ、学館にも一時近づきにくい状態に陥りました。ML派らは法政に、また、社学同系は中大学館を拠点に対策を練っていました。

ちょうど、「2・2協定」後の2月11日は初めての「建国記念日」となる日で、雪が降り続けていました。「神話を建国の日とするのは、再び戦前への復活だ」と、当時、建国記念日制定に反対していたのですが、2・2協定で私たちはそれどころではなくなっていました。降りしきる雪の中、黒い学生服の一团が日の丸を掲げた行進をしてきたので、私たちの友人もデモを組み、雪つぶてを日の丸の一团に向かって投げたりしていました。

「2・2協定」に反対を表明していた和泉校舎の執行部と、全二部共闘会議は、「入試阻止闘争」を宣言しました。ロックアウトで体育会系の「防衛団」のうろつく神田駿河台校舎周辺で、ゲリラ的にピラマキを繰り返しました。全学連もそれを支援しています。そして、2月20日、明大入学試験当日、全学連の入試阻止闘争の呼びかけで、御茶ノ水駅一帯は騒然となりました。

300人以上が御茶ノ水駅に結集し、明大前通り側の西口改札口前ホールでスクラムを組み、横5列くらいの隊列を組んで渦巻デモを繰り返して座り込みました。駅のホームでは乗客があふれ、ホームから落ちたり大混乱となって国電は電車の運行を停止しました。改札口ホール前では、「2・2協定」を批判した社学同の全学連副委員長成島忠夫さんや、全二部共闘会議のリーダーたちがアジテーションを繰り返して、入試阻止を訴え続けます。国電側は機動隊出動による実力排除を要請し、成島さんらリーダーの何人も逮捕され、駅の構外へと押し出されてしまいました。

そのため、東京医科歯科大学構内に再結集し、工事用の丸太を持った学生を先頭にして、明大駿河台通りのデモ行進を続けました。御茶ノ水駅前などで機動隊とはげしく衝突しましたが、この日、2月20日、結局入学試験は強行されました。そして、この日の入試阻止闘争のデモをピークに、学費値上げ反対闘争は封じ込められていきます。一方、「2・2協定」の当事者であった明大

理事会と学生会中執は、3月28日と31日に駿河台本校の第二会議室で、「2・2協定」に基づく話し合いが行われました。

明大新聞によると、「28日午前10時から法人側からは長野理事長、武田総長、小出学長ら常勤理事が出席、学生会側も大内委員長ら10名が出席した」。この日、学生会中執から3月25日付で法人理事会へ提出された意見書の趣旨説明が行われたという。31日には、中執に対する理事会の見解が述べられて、4月13日に理事会と中執の共同声明を発表することを相互に確認したということです。大内委員長は、「意見書は団交の継続として行ったものである。この中で問題点を惹起し、その基本が認められれば、細部については今後団交によって話を進めたい」と明大新聞に述べています。

当時、二部の学苑会は臨時学苑会学生大会を3月24日に駿河台本校の91番教室で開催し、「学費値上げ反対・白紙撤回」を求める大会決議をめざしました。法学部と商学部の学部自治会を握っている民青系の執行部は、昨年、学苑会中執を追われたこともあって、この臨時大会をボイコットによって流会させようと企てました。そのため、代議員の出席過半数入場が遅れ、6時開始はようやく7時半を過ぎて大会を成立させて、「2・2協定破棄」を正式に決定しました。その結果、昼間部の学生会中執は「2・2協定」に基づいた改善要求闘争に入り、夜間部学苑会中執は、「学費値上げ白紙撤回」というこれまで通りの路線を進むことになりました。

法人理事会と学生会は、4月14日、確認文章「基本方針決定」がとりかわされました。4月28日、大内委員長は記者会見でそれを明らかにしました。明大理事会は、一段落したとして「人心一新」名で理事会を総辞職し、学生を十数人処分することを表明したのです。その流れに呼応するように、5月初めになると大内委員長は「経済的理由」をもって「休学届」を提出してしまいました。何とか形をつけるまでと踏ん張っていたのでしょうか。

本人の気持ちはどうあれ、無責任なあり方を露呈し、大学側に利用されて終わりという状態でした。学苑会は「2・2協定破棄・不当処分反対闘争」を決定し、4月23日に理事会に対して団体交渉を要求することを決定しました。そして、酒田委員長は記者会見を開き、6月末に無期限授業放棄、9月末には再度ストライキ態勢をとると発表し、長野理事長の「人心一新」理由の辞任や、学生処分も許さないと表明しました。

「2・2協定」に反対する一部二部合同討論会を開き、5月23日には理事会との団交を要求することを確認し、大学側に学生組織の解散命令を出したことに抗議文を出すと同時に、大内委員長に自己批判を求める要求書を送ることを決めています。「この闘争は長引くと思うが、1年続こうが2年続こうが、あくまでも白紙撤回運動を推進していく」と表明しつつ、学生側には厳しい前途が予想されていました。長野理事長は「学生処分後に辞任したい」と述べたことがわかりました、教授会も動き出しました。

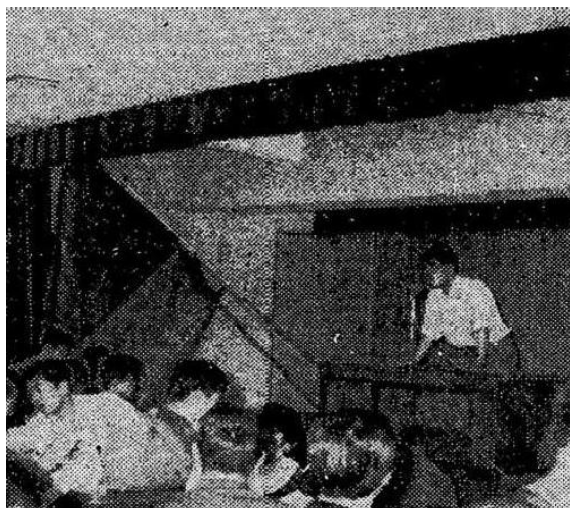
このように「2・2協定」以降、明大学生運動は、不統一な方針のままでした。大内委員長は、大学当局側にだけ「責任を果たすつもり」で、学生を放り出したまま、突如「休学届」に及んだのです。大内中執執行委員長に対する批判は当然であり、学生会は立て直しが急務となっていました。

中核派やML派から批判されてきた「2・2協定」以降の明大社学同は、自己批判しつつ、沈滞・消耗の中からも、とにかく学生に対する責任として、再び学費値上げ反対を闘う態勢に立とうとしている状態でした。これらの人々は、中核派のリンチを受けながらも、黙々と立看を書き、カッ

ティング、スツティングという鉄筆によるガリ版のビラを作りながら、新入生歓迎集会を準備していました。こうした社学同再建をめざす人々に同情して、私も社学同に参加していくことになるのは、この2月から3月頃であったと思います。そして、これまで明大二部になかった社学同の拠点を作り出していくこととなります。その場として、現代思想研究会(現思研)という同好会サークルを始めることにしました。それは後に述べます。

昼間部では、新入生歓迎準備を担ってきた者たちが、大内委員長の休学届によって矢面に立たされ、批判をうけつつ、大内批判をしながら中執体勢維持が問われました。駿河台、和泉、生田という三つの校舎の定員24名の中執メンバーによる新体制づくりに対し、大内委員長の出身学部である生田校舎は出席しなかったため、流会となるなど学生会中執内で対立が生まれていました。

「2・2協定」まで、全学的に掌握してきた明大ブント・社学同の内部で、「2・2協定」はやむを得なかったと肯定する立場と、大衆的民主的な学生大会などの正式な手続きを経ていないので否定されるべきだという立場の違いがあったのです。生田校舎のボイコットによって、中執は流会をくり返しましたが、新入生も入学し、学内が正常化されつつあり、また、全学連による砂川現地闘争などの運動も問われていました。明大学生会は全学連の重要な動員の一翼を占めてきたし、新しい政治闘争に参加していくためには、学生会自身が態勢を整える必要がありました。



(1967. 5. 16砂川総決起集会)

全学連は、67年5月16日、中大学生会館に350人以上が集まり「砂川基地拡張実力阻止闘争全学連総決起集会」を開いています。

中核派の秋山全学連委員長、社学同の成島副委員長らのアピールに応じて、明大からも多くが参加しました。また、すでに長野理事長辞任による「人心一新発言」によって、学費闘争を闘ったリーダーたちを処分することと抱き合わせに行われることが迫っており、学生会中執は早急の体制づくりが情勢的にも問われていました。明大短大学生会も5月25日、「2・2協

定破棄」「不当処分反対」を採択しています。また、5月31日、学苑会も定例学生大会を約300人を集めて開催し、「2・2協定破棄」ストライキをめぐる全学投票を決定しました。

6月3日、やっと昼間部学生会中執会議が開かれました。これは小森副委員長が中執開催を再度呼びかけ、大内委員長が小森さんを委員長代行とする旨の委任状を提出して、やっと学生会としての決定機能を回復したためです。「『2・2協定』の是非は、今後討論で決定する」と棚上げし、「自治会として学館運営問題、砂川基地拡張反対闘争、不当処分反対を闘い、再度明大を全国学生運動の再拠点としていく」と確認しました。



(1967. 6. 23学費闘争処分発表)

しかし、すぐの6月23日、小出学長名で、退学11名を含む21名の大量処分が発表されてしまいました。明大新聞によると次の通りです。「この処分は、さる昭和41年(1966年)11月、和泉学園封鎖で端を発し、約70日間紛糾した昭和42年度学費値上げをめぐる反対闘争の責任を問われたもので、今回の措置は、昭和37年維持費闘争以来、初の学生処分である。これに対し、学生側は、発表と同時に

行われる大学側の記者会見場になだれ込み、小出学長との会見を申し入れた。このため、記者会見は中止された。今後学生側は『処分撤回闘争を組み、ハンストや授業ボイコットに入る態勢を組む』と発表。一方、理事会は、かねての公約通り、7月初旬までには総辞職するものとみられている」と載っています。

厳しい退学処分は、小森委員長代行ら、昼間部の闘いの再建をめざしている学生たちに向けられました。また、二部からの退学処分は、酒田全二部共闘会議委員長も含まれていました。「一連の暴挙が、全学闘争委員会ならびに全二部共闘会議の指導によるとの判断から、すでにこの2組織に対して解散を命じたが、今回各学部教授会の会議に基づき、上述の違法行為に組織上の責任を有すると認められた学生に、学則第57条により懲戒処分に付する」と6月23日付明大小出学長名で処分が発表されたのです。

6月17日からは、処分と同じ頃、2月20日の入試阻止抗議行動「御茶ノ水駅事件」で起訴された成島全学連副委員長らの初公判が東京地裁で始まっています。

明大学生会も学苑会も、「処分撤回、学長団交要求」を掲げて激しく抗議行動を始めました。二部では「学費闘争処分撤回」「学長団交」の要求を掲げて大学院前に午前9時から夜10時まで無期限座り込みを6月30日から始めました。



(1967. 7. 7学長宅デモ)

一方、和泉校舎でも「処分撤回・対学長団交」を要求して、退学処分を受けた学生らが、7月3日からハンガーストライキに入りました。

そして7月7日、和泉校舎では「処分撤回団交要求」を訴えて、百余名がバスで駿河台へと集まり、学長団交を要求しデモをかけました。その夕方には、また、小出学長宅を包囲すべく、シュプレヒコールで学長宅に向かい、機動隊ともみあい、4人が逮捕されてしまいました。機動隊が待機して学生らを蹴散らしたのです。

夜間部も7月に入って、学苑会中執も抗議に授業ボイコットを呼びかけ、全学投票を行うと決定しました。このように、学費値上げに反対した学生指導部に対する大量処分は、ついに学生たちが再び闘う意志を固める状況を作り出していきます。夏休みによって闘争が終息することを狙った大

学側の処分であったのですが、共に闘った者たちは、自分は処分されず、共に闘ったリーダーたちが処分されたことで怒りが収まらず、夏休み中も次々と結集し、9月新学期に向けて闘う方針を固めていきました。

退学処分を受けた者たちも、引き続き仲間と共に明大自治会活動の中で、その一員として、闘いを続けていきました。昼間部では、退学処分を受けた小森学生会委員長代行に代わり、10・8闘争後、中央執行委員会によって米田新委員長を選出しました。学生会は、ようやく「2・2協定」から転換し、明大社学同、明大学生運動の傷をいやしながら、闘いの体制をつくりあげる方向に向かいました。米田委員長は「とにかく官僚主義といわれる中執は、平和と民主主義の運動のバネにはならない。だからクラス討論の徹底によって、大衆からの反発と乖離を避けていきたい」と、自治会執行部再建の決意を述べています。

このように「2・2協定」にもとづいて、昼間部学生会は「自治」や「大学の民主化」など、話し合いの道に踏み出したにもかかわらず、その当事者だった学生は処分され、改革を約束した理事会も総辞職してしまったのです。その結果、大学改革、学館管理運営など、明大当局との今後の交渉の土台と方向はうやむやになり、新学生会執行部も「2・2協定」については新たな方向を求めつつ、すでに、67年のベトナム反戦闘争の盛り上がりからのちの10・8闘争を経つつ、明大当局批判を強めていきました。

当局側が、大学改革を示さず、学館管理運営は学生自治のもとに、自主管理は強化されていました。また、学苑会においては学費闘争ストライキをめぐる「全学投票」を行いながら、学苑会中執メンバーが、投票箱を事前にのぞいていたことが、研究部連合会執行部によって、偶然、夜間に目撃され、その有効性を損なったことを学苑会中執が自己批判を表明するという事件も発生しました。次々と新しく生まれる事態への対応、ことに夏休み明けからベトナム反戦運動の全学的な参加、10・8闘争、その後の高揚で「2・2協定」と「不当処分撤回」を掲げながら、有効な闘いを組み得ませんでした。当局側は「処分撤回」を拒否し、退学・停学を受けた者たちの人生を支える力も十分ない分、当事者たち自身に委ねられていくようになっていきました。

結局、全学の自治と決定をもって闘いつつ、その敗北の責任は各自に負わされる結果に至ったのです。個別大学の「ポツダム自治会」と呼ばれる与えられた自治の代議制民主主義の数によって決定された闘いの限界を痛感した者も多かったのです。

こうした闘いの挫折を経て、「ポツダム自治会」の民主的多数派形成の闘いと同時に、少数派であっても、直接民主主義によってヘゲモニーをとろうとする全共闘的な闘いの萌芽や、個別大学の闘いから普遍的な政治闘争を党派へと求める方向へ進む者もいました。

そうした時代、三派全学連のけん引するベトナム反戦闘争を中心とする街頭戦へ！という闘いの方向へとエネルギーを注ぎながら、活発な学生運動へと、67年から68年高揚していくことになります。

No 511 重信房子「1960年代と私」第二部第2回 2019年2月

4. 社学同加盟と現代思想研究会

「二十歳の時代」(「1960年代と私」第一部)の学費闘争の活動の中で述べたように、私は、「2・2協定」直前の社学同の昼間部の会議に頼まれたとはいえ、参加してしまいました。

「学費闘争の今後の方針を決定する会議であり、二部夜間部の意見を知りたい」と言われ、私は二部中執メンバーであっても二部を代表する立場も意見も持っていなかったし、そういう不適切な会議への参加を断ったのです。しかし状況は切迫し、警察権力が1月30日朝、導入された直後の2月1日です。何としても新しい方向を見つけないとする昼間部学生たちの焦りも知っていました。

当時、明大二部には、政経学部の上原さんが一人、社学同の同盟員でしたが、彼は学費闘争前までは昼間部で活動しており、ちょうど1月には体育会右翼学生の訴えによって神田署に逮捕されていたのです。団交などの小競り合い、ゲバルト戦になると、池原さんら昼間部の仲間と先頭に立って闘っていたのが目立ったのでしょう。当時の「学生柔道日本一」の「明大生を殴った」として告発され、逮捕状で逮捕されていました。

二部の政経学部は、中核派系の労働者の委員長をはじめ、社会党の協会派系の労働者や、上原さんら含めて三派系反日共系の学部自治会執行部を形成していました。67年1月は、特に厳しく体育会系と対立していました。野球部の島岡監督は、黒龍会という右翼やくざ団体と共同して動いていると、当時の噂でしたが、太った島岡監督が樺棒や桑の棒を配り、激をとばしていた姿は、私も本館の中庭で二度目撃しています。彼らは活動家を見つけると拉致して、小川町校舎の柔道場に連れ込んでリンチをしては、学生を消耗させようとするのです。この時には、のちの野球の有名選手も加わっています。彼らのうち何人かは、史学科で夜間授業を一緒に受けたこともありましたが、彼らは反日共の立場から当初は三派を支援しましたが、当局と学生が団交でシビアな対立に入ると、島岡指揮の暴力や、告訴などの法的措置で活動家つぶしを行っていました。

社学同としては、唯一の夜間部メンバーの上原さんが不在であり、私自身がML派に属さず、社学同と研究部連合会執行部時代から学園祭などで協力し合っていたこともあって誘ったのでしょう。

どうして応じてしまったのか・・・と後に考えましたが、とにかく好奇心もあったし、これからどう学費闘争を闘うのか？という思いも含めて、個人の責任で参加しました。それが、結果的に、予想もなかった「2・2協定」に化けてしまったのです。

あの時、確かに全学連委員長の斎藤克彦さんは「反対が多いな・・・。継続討議として今夜は一旦打ち切ろう」と会議を終えたはずでした。それが「暁の妥結2・2協定」になってしまったのです。

あの2月1日夜の中大学生会館での会議に参加していた明大社学同のメンバーこそ、私同様驚いたはずですが。加えて、翌日からの中核派によるリンチに対しても、また、ブント内からの明大社学同への批判に対しても、明大社学同は自己批判を繰り返しつつ、「それではどう方法で闘うことが必要なのか」と考え続けていました。

「2・2協定」は学生大会の決議に反して、学生の意志確認する手続きもなく、また、学生会中執としての決定も行っていない。「2・2協定妥結」は許せないのですが、内容的には学費値上げの根拠、使用目的、値上げ幅、大学改革に活かす必要性など、大学と学生側で積み重ねてきた討議は一部反映されています。情勢的には、すでに「白紙撤回」には無理があり、その上、闘いを中心的に担った者たちへの懲罰処分が行われようとしていました。

2・2協定「妥結」を当局と合意した以上、それを当局はベースとして、今後話し合いが始まるでしょう。いいかえれば、大学理事会はそれ以外のことは、法的処置や規則違反として弾圧で乗り切ろうとしている時です。

(2・2協定反対のビラ)

中核派やML派などの「白紙撤回」は現実には、何の解決も望めない、そんな考えが明大社会学同の中に渦巻いていたように思います。学館の学生会中執の何人かの社会学同メンバーは、体育会、中核派のリンチに耐えて居すわっていました。和泉校舎では、社会学同中心に、「2・2協定撤回」と「団交の継続」を求めています。

私は明大二部のML派や中核派の人らが拠点

としていた法政大学にも、社会学同が拠点にしていた中央大学学生会館にも出入りしていました。でも、基本は明大学館の研究部連合会の中執事務局室を中心として、学苑会、学生会中執事務局の部屋もある3階で、当時過ごしていました。

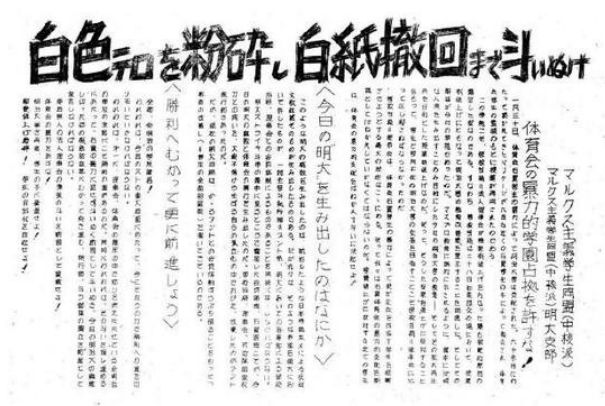
学館の旧館(8号館)は隣接して明大前通りに面していて、各学部自治会室やサークルの部屋になっています。アルバイトで日中を働いて過ごし、5時半過ぎると学館で友人たちと会ったり、語ったりしていました。

当時は文研の部誌「駿台派」の編集長をやって発行しており、また、67年秋に向けて、文研仲間と詩集「一揆」を自費出版するための活動と、多忙でした。こうした時に、2月1日の社会学同会議の場で、斉藤克彦さんらの提案に反対しつつ、中核派などの糾弾の矢面に立たされていた彼らに同情もしていました。よく話をしていたML派の畠山さんは「男気」の人と呼ばれていた人で、中核派がリンチに来ると、私が、畠山さんがいる時には応援を頼んで止めてもらったりしました。畠山さんが、中核派に「やめろ！」と割って入ると、すぐ収拾できたからです。

こうした中で「明大社会学同再建」に向けて闘いが続いているのを知っていたし、また、誘われました。私自身は政治意識が高かったわけでも、どの党派の機関紙に共鳴していたわけでもありません。2月20日御茶ノ水駅ホームを占拠して「白紙撤回」を求めて、一部二部学生たちも「入試粉碎闘争」を闘い、私自身も参加しつつ、一方で共感しませんでした。

個別の明大の闘いは、もっと話し合いをうまくやるべきではないのか、こちらの方の力が弱いのに、話し合いもせず入試阻止を主張してどうなるのか？阻止できる力関係にはありません。ただ自分たちを袋小路に追い込むだけではないか？「学園主義」と批判されても、私たちの競合対象は日共民青との学費闘争をめぐる全学生説得工作であり、中核派のようなやり方ではないというのが、学費闘争の始まりからありました。その分、学苑会執行部の活動も、精神の拠りどころとはしえない気分でした。

明大社会学同が、左翼反対派ではなく、主流派を形成していたせいか、総学生を意識しており、大学祭含めて明大改革を考えているのではないかと。ことに「2・2協定」の失敗があったので、真摯に社会学同再建を求めており、再建に誘われた以上、これから何か新しいものをつくっていけるかもしれない。



「社会をより良くしたい、そのために自分も尽くしたい」というとても素朴なところから、私は高校の「生徒会」の延長上のように自治会活動にも関わってきました。それは父の影響だと思いますが、世の中の不平等、不正に敏感に育ってきたこともあります。

新しい仲間と、精神のお互いの拠り所となる相手を仲間と認めあう関係を育て、変革の可能性を考えられる場をつくりたいと思いました。すでに、研連執行部や学苑会中執の活動の中で、人間的に気の合う信頼できる仲間たちの顔を思い浮かべながら、考えたことでした。

2月の終わりから3月のことだったと思います。中央大学の学生会館で、これまで何度か社学同オルグの声をかけてきた一人である早稲田の村田さんと、医科歯科大の山下さんの2人を推薦人として、私は社会主義学生同盟(社学同)に加盟しました。21歳の時です。

当時、学苑会事務長だった雄弁会のSさんを誘って、一緒に加盟しました。彼は、職場で、ブントの仏(さらぎ)さんたちの友人がおり、民青系との学苑会執行部に対案と人事案を提出する際、事務長を引き受けてくれた人です。それから、研連の教育研究会サークルで誠実に活動を続け、学費闘争も一緒に闘ったKさんも誘いました。

初期の社学同メンバーに遠山さん、文学部のIさんや、学費闘争の中で気が合って共同したり研連時代の仲間も加わって、10人ほどになりました。

上原さんは既に社学同で活動しており、一緒に現思研作りに加わりました。遠山さんは、研連執行部の私が、学苑会の対案人事のために学苑会中執財政担当になったために、私に代わって研連執行部に法学会から派遣された人です。当初はどんな人かわからず、民青系かという声もありましたが、初対面から、正義感の強い誠実な人とわかり、以来、もっとも分かちあえる友として行動を共にしてきました。

私たちは、研連で未認可の、「同好会サークル」扱いの「現代思想研究会(現思研)」というサークルをたちあげることにしました。社学同二部の仲間を中心にして、精神的思想的仲間として、共に学び、相互に助け合う場、砦として考えたものです。

「同好会」は誰の断りもないし、サークル連合である研究部連合会に加盟を認められた組織ではないので、予算配分で援助を受けることもありません。実績を積み、研究部連合会執行部の推薦によって、加盟サークルの一員に加わる方法もあります。私たちの仲間自身が研連の執行部なので、そうしようと思えばできたのですが、私たちは考え方や、気の合った仲間たちで、「同好会」としてずっとやっていくことにしました。

なぜなら、社学同仲間も、それぞれサークルに所属している人も多かったし、現思研は規則もなく、家族的、心情的な兄弟的な場で十分と思えたからです。私は文学研究会に入っていたし、他の現思研メンバーも法学会、雄弁会、教育研究会など、各々がサークルでも活躍していました。私自身が楽しい活動の砦としたかったように、皆もそう考えていたと思います。

「2・2協定」のあとで、それらの当事者、責任者らは神田駿河台校舎からいなくなっていたし、学生会中執委員長の大内さんらは、神奈川の生田校舎におり、また、社学同の人で、斉藤克彦さんを批判した人々は、和泉校舎を中心に活動していました。

それでも、駿河台屋間部の活動家には、ブント、社学同系の人以外は目立って存在していなかったと思います。ブントか、社学同シンパの人々で自治会、学館、生協を占めていました。

60年安保ブントで活動した篠田俊雄さんや、学館運営委員会も若山さんらで、生協や教職員の

日共系の人々と対峙しつつ、自主的な運営を行っていました。私たちは二部の社学同が「現思研」を作ったので、学館運営に協力することで、学館の未使用の一室を貸してくれることになりました。サークル部屋や学部の自治会室、生協の事務室などは、明大前通りに面した8号館という旧学館にあります。8号館からマロニエ通りに曲がった並びが学生会館新館です。新館は65年に開館し、1階は管理運営委員会室、地下に生協食堂、2階に談話室があります。ホテルのロビーのようにソファや椅子が配置され、コーラやファンタジュースの自販機が設置されています。

この2階と、旧学館(8号館)は、渡り廊下でつながっていて、部室や自治会室に行くことができます。新館3階は学生会中執と学苑会中執が向かい合って、同じ作りの部屋の隣に、同じスペースの会議室があります。その横には、研連執行部事務局と、昼間部の文化サークル連合である文連の執行部事務室がやはり同じ大きさで並んでいます。

4階は和室、会議室、それに新聞会室と資料室、5階はホールで、数百人の講演会や集会に使用できます。この新館の4階、新聞会室の予定だった部屋を、二部社学同、現思研のために貸してくれました。

3階の学苑会室の隣の会議室はML派の人が中心に使い、他校のML派の人にも寝泊まりしはじめていました。3階の研連の部屋は、ML派の人は入ってこないのですが、サークル連合のいわば行政機関を担っているのも、様々なサークルとの折衝や実務も多く多忙です。夜、学館に泊り込んだりする人も、学苑会の方にもいるので、学館運営委員会としては、社学同系の信用できる仲間が、きちんと管理してくれる方がありがたかったのでしょう。事実、立て看を描いたり、昼間部や夜間部のブント系・ML派系ら、いろいろな人が泊っていました。泊り込み作業のあと、和室に布団を敷いて寝ているのはブント系の人でしたが、朝9時過ぎには茶道部が和室を使おうとしても、汗臭い人間が寝ていたり、布団をひきっぱなしだったりすることもありました。

現思研では、朝8時には和室で寝ている連中を「起床！」と追い出し、窓を開け、布団を片付けて掃除し、いつ昼間部の茶道部や華道部などの和室使用があっても、苦情がないようにと整頓協力していました。そんなこともあって、4階の新聞会室は現思研が使用してよいということになり、いつの間にか、ずっと、現思研の部屋となりました。この新聞会室は、学館が65年に設立されて以降、未使用の4畳半ほどのスペースに、ピンクの公衆電話がそなえつけです。(3階の各中執や研連にも同様のピンクの公衆電話が設置されていました。)そこが、私たち現思研の拠点となり、のちに赤軍派でバラバラに大学を去っていく69年の秋まで、ずっと、愛着のある場、砦として機能していきました。

現思研は当初、「様々な思想、考え方を学習し、変革し、より良い社会を実践的に創っていく」という考え方に基づいていました。どのような考え、思想であってもかまわない。共に学び、共働し、一緒に汗を流して考えれば、身内のような関係性の中で、一つになっていけるはずだ、という私自身の考えがありました。だから「社学同でないダメ」という考えには立たないという立場です。

第一に、私自身社学同を理論的にもよく知りませんでした。

何よりも空疎な「理論」より、生きた人人との関係を大切にしようと思いました。昼間働き、貧しいけれども向学心のある田舎から出てきた仲間たち、社会には慣れていないし、相談する相手も見つけるのも難しいでしょう。だから、生活し、働く悩みを語り合い助け合いながら学び、共同する場としよう。「現思研に来れば、家族のように安心して話ができる」と仲間たちが言うのはうれしかっ

たものです。昼間部の人の中にも、現思研に「入れてよ」と頻繁に共同したりする人もいました。また、昼間部のYさんの発案で、現思研の内に「剣道同好会」の看板を掲げてはどうか、これからは右翼とも機動隊ともやり合う時代になる。ゲバルト訓練も加えてはどうかという話もありました。Yさんは剣道の達人ということで、彼に学ぼうと楽しそうに一時話題になり、彼もまんざらでもなかったけれど、私たちはやっぱり思想を学び実践すること、「現思研一本でいこう」ということになりました。すでに、65年の日韓闘争のデモの頃のような警察と学生側相互の暗黙のルールのような牧歌的時代は終わろうとしていました。

私たちが現思研を立ち上げたのは、67年春ごろ、入学式の前のまだ春といっても寒い季節でした。67年はベトナム侵略戦争が激しくなり、米国の戦争予算は史上最高額を更新し、米軍派兵も、朝鮮戦争の47万2千人を上回りながら続いていました。米国は、国際的批判にさらされ、出口戦略もなく泥沼化状態にありました。67年1月には「2・2協定」の前に「ベトナム反戦闘争第一派行動」が全学連斉藤委員長の指揮下、数百人で担われ、全学連としてのベトナム反戦闘争は始まっていた。米国内でも、欧州でも、若者たちのベトナム反戦闘争は盛んに闘われていました。65年に結成されたベ平連は、各大学、地域、高校にまで自発的な組織がつけられ、市民運動の広がりが、日本社会に影響を与えていました。

一方で、左翼運動では、全学連(三派)のヘゲモニー争いもありました。また、日本共産党と、文化大革命の中国共産党の間の矛盾が激化していました。それを反映して、日本共産党内の中国を評価するグループと、宮本書記長の自主路線を支持するグループの内部矛盾は拡大していきましました。そして、後楽園近くにあった中国人留学生宿舎の「善隣会館」の管理運営をめぐる、日本共産党員と中国人留学生の衝突に至り、流血沙汰になりました。ML派は中国派に加担し、善隣会館に駆けつけて中国人留学生らを支援しました。明大闘争で「外人部隊」として参加していた横国大のML派などや、ML派の猛者として名の知れた畠山さんも林彪を高く評価して、「林麟次郎」のペンネームを名乗り、「日中青学共闘会議」の議長となって活動し始めています。この頃から、ML派自身が、ますます毛沢東路線へと変化していったのだらうと思います。

私は社学同に加盟し、「現代思想研究会」を拠り所としながら、授業にも、文研サークルにも、アルバイトにも精を出していました。「先生になりたい」「書きたい！」と夢の実現は確かな手ごたえがあり、大学生活は楽しくて、生きがいでした。心を許せる仲間が何人もいて、新しい日本や世界の変革を語り合って、話は尽きません。学生運動の好奇心と喜びに、何をしても有意義で燃えていました。

5・67年現思研としての活動を始める

学費闘争の中から仲間意識を持った者たちが、社学同に加盟し、入試阻止闘争の後から、現思研の活動は始まりました。同好会資格で、まずもって、新入生をオルグしようと動き始めたのです。新入生は、3月に入試の合格発表が行われます。そして、各種の書類や案内書を受け取り、入学金、授業料の払い込みが行われ、更に新入生説明会のようなものがあって、その後、入学式が行われたように思います。私自身の入学式は、どんなものだったのか思い出せないのですが、たぶん、夜間部として明大記念館で行われたのだと思います。昼間部と一緒に武道館で行われたのかもしれませんが。どちらにしても、働いていて、出席できなかったような気がします。

のちに触れるように、「現思研構想」を決めた後、私は、福島県議会議員選挙のアルバイトのた

めに、一時抜けて活動しています。お金がいるだろうと、この割の良い選挙運動を引き受けたのです。その後、入学式後に新入生歓迎会が行われます。夜間部学苑会中執、各学部自治会執行部と研連執行部によるオリエンテーションが行われ、駿河台校舎正門から入ってすぐの中庭には、各サークルが所せましと出店して、机を出して、サークルへの勧誘を行います。大学のバッチや、新聞なども売っています。

私たち現思研もその一角を借りて「現代思想研究会(同好会)」の貼紙を出して、遠山さん、私ら女性中心に、新入生歓迎を訴えつつ、オルグします。「何をやるどころですか？」と何人かが立ち寄ります。「学習したい人、哲学、政治、歴史などの思想的な学習を、デモや実践的な活動と結び付けて、社会変革に役立てるのです」「実践活動って何ですか？」「自治会活動とか、デモとかの運動です」と、ニコニコ話します。アカデミックな研究の場ではないことを、はっきり表明しました。

遠山さんも「ほら、名前忘れたけど『私はあなたの意見には反対だが、あなたが弾圧されたら、その時には命がけで守る』と言った人がドイツにいたのよ。正義を実現するところよ」などと話しているの、相手は何か難しそうと言いつつ、「ボクは創価学会の家庭で育ったので、思想には興味があります」と言い、青森から出てきたS君も現思研に入ることにしました。



(記念館中庭)

社会運動と学園改革、二部の学生の現実に則して関わる場として、その精神的中心に現思研を育てたいと、初めての現思研勧誘に熱を入れました。若い18歳くらいの学生は、どんな考えを持ってもいいし、共通の問題意識を育てながら、自治会、デモに参加しようというのが本音で、その本音を新入生に率直

に語ったものです。「デモは路上観察でもいいよ」と私たち。

自分たちがそうであったように、不正に反対し、反戦を訴えるデモは、見ていれば自然に参加したくなるものと考えていたからです。そして、そんな雰囲気、学費闘争を媒介にして「2・2協定」後も明大には強くありました。

新入生歓迎会では、各執行部熱烈歓迎のアジテーションです。一方的アジテーションで、「何を言っているのかさっぱりわからない」と言われる人もいれば、学苑会酒田委員長の演説は、情熱的でわかりやすく、学費値上げ反対や、入試阻止を闘ったことを語りました。現思研のメンバーたちも同様に新入生たちに語りかけました。

こうして賛同した新入生が数人集まってきました。この人々が、のちに現思研の中核となる67年入学組のO、T、A、I、Yさんらです。新しいメンバーの中には、自民党支持の田舎の優等生で、夜間大学に働きながら学ぶために来た者もいます。すでにベトナム戦争反対は市民社会に広がっており、デモへの参加を初めから楽しみにしている人もいます。

私たちは、自分たちが大学生になって、右も左もわからずに過ごしていた初期の経験を思い出しながら懇談会を開いて、様々なオリエンテーションを行いました。まだ就職、アルバイト先が見つからない者たちには、大学の学生課の掲示板に連れていき、求人広告から「これがいい」「あれがいい」とアドバイスしました。

すでに先輩格になった現思研のKさんは、九州から出てきた当初は、中央線などの快速電車

や急行は、別料金を徴収されると思って、各駅停車の鈍行しか乗らなかったとのこと。また、水洗トイレの使い方がわからず、反対向きに座ることを知るまでは便器に上がって用を足したりしたということです。東京は地方から出てくると刺激的な街で、何でもありますが、どうしていいかわからないことが多いようです。そんな彼らに、現思研との出会いは頼もしいものだったようです。のちに大分から上京してきたI君は、すでに「社学同で闘うつもり」と二部に入ってきました。そんな人は稀で、みな高校の生徒会やクラブ活動の延長のような感覚の人が多いいのです。

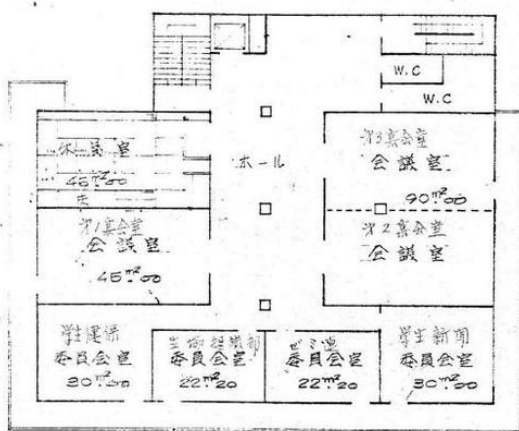
入学前に、ちょうどデモがありました。新潟から来た、真っすぐな青年のO君は、入学前に現思研の誘ったデモで逮捕されてしまいました。この時、現思研は社学同の隊列に加わるようになっていました。ベトナム反戦か、沖縄闘争のデモか、はっきり思い出せません。「デモを見学しよう」と誘ったのは、私たち先輩です。

初の入学式前早々のデモに新入生が隊列を組んで進もうとすると、学館4階の現思研のベランダから私と遠山さんが、花吹雪を盛大に撒いて「がんばってねー！」と叫んでいたと後に現思研の友人たちに言われています。初めてのデモなので「新入生は、どんな様子か、見学なので歩道を歩いてください」と確認はしていました。しかし、歩道から見学していたO君ら新入生たちの前で、ちょうど学生に機動隊が襲いかかりました。機動隊が学生を小突き回し暴力をふるうのを目の前にして、純情なO君は思わず「止めろ！」と仲裁に飛び込んでしまいました。田舎から来て間もない青年の善意は「逮捕！」という声に殴られ拘束されてしまったのです。

仲間たちは、O君を引き戻そうとしましたが叶わず、警察側に連行されてしまいました。これを目撃した仲間たち、自民党支持のS君も、宮崎から出てきたT君も、古いメンバーのNさんらも、顔を紅潮させ、怒りと戸惑いで一杯です。新学期初の授業が始まる前から、O君の拘束されている警察署への救援手配を行うことになりました。

この出来事がきっかけとなって、彼らは現思研のコアメンバーとなり、社学同のデモや集会にも、自治会活動にも積極的に参加していくことになりました。私自身が高卒で働き、その職場に夜間大学に通う人がいて、大学進学という方法を知りました。大学生活は楽しく新鮮で得がたいと心から感激したように、彼ら新入生もみな眼が輝き、わたしや遠山さんらを質問攻めにしていました。

(新学館4階平面図)



学館4階の現思研の部屋は、「新聞会」のプレートしかないのですが、この部屋が精神的砦となっていました。御茶ノ水駅を下ると、みんな真っすぐにこの学館の4階の部屋にまず立ち寄ります。そして、『今日の予定は何かないか?』と聞き、頼ったり、頼みたいこと、ビラ配り、立て看作り、イベント、集会のスケジュール、自分の協力できる時間帯を確認し、授業に向かいます。

授業がない時にはこの部屋に戻って、時には入りきれないほどの現思研の仲間が集まって雑談に花を咲かせます。自分の家族、職場での話、就職やアルバイトを紹介し合う仲間同士の助け合い

も、自然成長的に仲間意識を育てていきます。

そうはいつでも、夜間部の学生は毎日が時間との闘いです。朝から5時頃まで職場で働いて過ごし、5時半の授業前に、5分でも学館4階に立ち寄ったり、すぐに駆け足で教室の授業へと出ていきます。授業の空き時間にラーメンを食べたり(当時50円でした)、学館内の生協食堂で30円のうどんをかきこむ人が多いです。夜9時50分から10時に授業が終わると、本格的に活動開始で、最終電車の頃まで、クラス討論のビラをカットイングしたり、謄写版印刷したりします。鉄筆で一字ずつ口を塗った原紙に書き込んでいくもので、当時はワープロもパソコン、携帯電話もないですから、ビラや立て看が情宣の武器です。一枚一枚、手刷りで500枚ほど刷ったビラを、各クラスや、校舎入り口で学生に配布します。

それから立て看は、角材とベニヤ板で畳1畳分から2畳くらいの看板を作り、模造紙を洗濯糊で貼り合わせて、その白いスペースにスローガンや政治表明、イベント予告や当局への要求などをアトラクティブに描きます。これらの協同作業は、また楽しいもので、慣れると看板屋をしのぐ、立派な字の「立て看」を描く人もいます。現思研で一番上手だったクラケンは、のちにその腕を活かして、プロの看板屋になったほどです。

そのうち、68年には大分出身のI君が、下宿から現思研の部屋に持ってきた小さな電気釜で米を炊き、道路を隔てたところにある中華料理の小さな店「味一番」から、みんなで乏しいあり金を出し合って、ニラ炒めやギョウザ、ラーメンを出前してもらって、ご飯のおかずとして分け合って、助け合って、食べたりしていました。

お金がなくても、ここに来れば誰かが助けてくれて、食べることができたのです。また、和室を借りて、立て看作業で遅くなる人は泊まることもできました。神保町に朝4時までやっている中華料理店があって、立て看を描き終わると、お金のある時は、みんなでそこに行って焼きそばやラーメンを注文したり、近所の銭湯に行ったり、だんだん学館が根城になっていきました。

「楽しい。仲間がいる。そして、仲間とベトナム戦争に反対する正義の仕事を共同している」これは、生きがいとなり、仲間もまた増えていきました。明大二部では、学費闘争を経て、中核派や解放派の何人かもML派も増えました。

でも現思研は、研連執行部の人材も加わっていたせいもあって、Nさん、Mさんら含めて20人近くが集うようになりました。私もそれまで、自宅や、親類の家から通っていたスタイルから、夜の遅い最終電車でも間に合うところに下宿したいと思いました。そして、67年の夏には、初めてアパートというか長屋に部屋を借りることにしました。初の自分の一人住まいは、とてもワクワクしたものです。

大学の掲示板で小岩駅から歩いて15分くらいのところの材木屋の店子のような長屋を見つけました。家具を揃えるのもうれしかったものです。でも、とても粗末な長屋で、3畳くらい。確か、1ヶ月3,500円だったか。初の一人住まいを見に来た母は「こんな家に住まなくても・・・」と絶句したくらいです。実家にあった古TVを持ち込んで、本人は気に入ってましたが、駅から遠いこと、学館や実家に泊まることも多く、あまり使いませんでした。借りた期間は長かったです。

中大の久保井拓三さんが傍に住んでいて、よく往来し、私がそこから引き上げる時に、TVをもらってもらいました。久保井さんは誠実な人で、「安保反対・日帝打倒」の闘いの話や、どんな本を読んだらいいかなど、現思研仲間がぎゅうぎゅう詰めに私の部屋に遊びにくる時には、一緒に多く話

たりしたものです。

当時の67年の現思研について、Tさんは次のように述べています。「僕たちが入学試験を受けた67年は、明治は学費闘争の最中で、機動隊が校舎の周辺に配置され、それに交じって学ランを着た応援団、体育会の学生らに守られる形での受験でした。ちょうどそのころ、取り交わされたはずの『2・2協定』のことは、後に先輩たちから存分に教えられることになる。入学後は、授業の合間をぬって、自治会役員による歓談があった。宮崎の片田舎で育った自分には、東京や大学で目にするものはすべて珍しく、興味を惹かれることばかりだった。上原さん(当時の駿台政経学会委員長)に連れていかれたのが学館4階の現思研で、文字通り現代の思想研究サークルと思っていた。ブント社学同活動家養成所であることを知ったのは、ずっと後のことである。

現思研には、全国から面白い人が集まっていた。Oは入学早々、沖縄デー集會に逮捕されたというし、東京出身のKは『党宣言読んだ?』と聞く。『党宣言』がなにものか知らない自分は、上原さんにたずねて知った。Kたちは、すでに高校のとき読んだというのでびっくりした。

その後、運命の10・8を迎える」と語っている。このTさんとは10・8を共にし、68年には成田闘争で彼は未成年のまま逮捕されることになる。それはまた、そのところでTさんの話を伝えたい。

6・67年春、福島県議選

一方、この頃、67年3月だったと思いますが、アルバイトで福島県の地方選挙に出かけることになりました。雄弁会のアルバイトで、これまでもいくつかの地方選挙の候補者の応援演説や、候補者の名前を連呼する「うぐいす嬢」と呼ばれるアナウンスの役などをやってきました。

二十歳の時、町田市議選に出る高校時代の友人の父親に頼まれて、アルバイトとして、応援演説に加わっていました。これを、市内に住む父の知り合いが聴いて、気に入ったとのことでした。

「兄貴が福島で、社会党から県会議員選挙に出馬するので、アルバイトで来てほしい。標準語で演説できるのが大きなインパクトになるから」と、父を通して頼まれたので、アルバイトとして引き受けました。ちょうど現思研が活動を開始し始めたころで、活動資金の必要性もありました。

私がアルバイトではありましたが、応援したのは、2011年3月11日の東日本大震災による「フクシマ原発問題」で脚光を浴びた元双葉町長の岩本忠夫さんです。

67年当時の岩本さんは、双葉原発誘致反対のイニシアチブをとる社会党双葉支部長であり、「葉たばこ共闘会議議長」「出稼ぎ対策委員長」などの肩書を持つ闘う活動家であり、38～39歳くらいだったと思います。私は世田谷に住んでいた子供時代から、地域に住んでいた鈴木茂三郎(第2代日本社会党委員長)が好きだったので、社会党には好意を持っていました。

でも、社会党についても、福島についても、何も知りません。東京生まれの私には「田舎」といっても、九州の両親の里に行ったこともなく、初めての「田舎」でした。その土地の、のびやかな美しさ、浜通りには海が迫り、夏には毎日泳げるといふし、中通の麦畑や小高い森一つ一つが興味津々でした。私にとっては、浜通りや山間部で応援演説をしたり、車を流しながら「岩本忠夫が参りました。日本社会党公認候補岩本忠夫でございます」とアナウンスしながら回るのは、とても楽しい仕事でした。

社会党の東北ブロックの参議院議員や、労働組合議長の和田英夫さんも同乗して、代わる代わる声を張り上げました。岩本さん宅の、よろず屋のような酒屋を事務所にして、たくさんの住民が出入りし、ことに労働組合員が多かったように思います。選挙区は、双葉郡で、双葉町や浪江

町などです。私は、こんな論旨で語りかけたのを覚えています。「浪江の町にも双葉の町にも春がやってまいりました。しかしながら、父親のいない、兄のいない、子のいない、これが本当の春と言えるのでしょうか？岩本忠夫は『出稼ぎ』の様々な困難や事故に、もともと尽力してまいりました。岩本忠夫は皆様の代表であります。これまでも、またこれからも、出稼ぎに行かなくても暮らせる福島、出稼ぎの不要な地場産業の育成に尽力していくのは、この岩本忠夫であり、葉たばこの国との交渉に尽力してきたのも、この岩本忠夫であります。どうか岩本忠夫に皆さまの清き一票をお願いいたします。それでは、岩本忠夫候補から御挨拶申し上げます」などと、前座を務めるのですが、アルバイトというよりも、私は岩本さんを心から応援した日々でした。

岩本さんの人柄、献身的なとても自己犠牲的な姿、信念、自分を振り返らないで打ち込む姿、また、青年団の私と同年代の人々との熱心な信頼関係や、岩本さんへの尊敬心を横から見ている、私のアルバイト気分は消えてしまいました。そして、身内のように声援を続けました。この頃、ちょうど、原発の誘致を自民党らが始めており、原発反対も訴えていました。でも、東京の経験と違って、人間関係が濃いせいか、選挙運動の過熱ぶりには驚かされました。ある日、山間部を候補者たちと回った時のことです。山深いふもとに2、3軒の農家があっただけのところ。その家の前で応援演説を始めた時、家人が出てきてこういったのです。「岩本さん、悪いけどもう〇〇から〇本もらったから(と指を立てて)あっち入れっから。今回は勘弁してくれ」と。「金権選挙」はあたりまえなのです。金のある自民党が勝ってしまうのは当然なのだと実感したものです。

岩本さんは、結果は次点で落選でした。でも、これまでに考えられないほど保守王国の基盤に肉薄し、初の社会党県議の可能性が生まれたのです。「次は勝って、この地から社会党県議を誕生させよう！」と、落選後の御苦労会も意気さかんでした。多額のアルバイト料を岩本さんの弟から受け取り、「また4年後もお願いします」と言われたものです。

しかし、私の方は、高揚する学園闘争や、ブントの反政府デモなどで時間をとられるようになったし、69年には逮捕されるなど、すでに、そうした活動はできる条件はなかったし、次の地方選前に海外へと出国してしまいました。次の地方選は71年で、岩本さんは当選しましたが、その年の2月に日本を離れてアラブへと活動し始める頃であり、その後はどういう経路をたどったのかも知りませんでした。

ところが、アラブにいたある日、80年代後半か90年代か、届いた資料の中で、「原発推進」の双葉町長として、岩本忠夫さんが載っているのを見て、私はびっくりしました。岩本さんは、当時、反戦、反核、反原発の戦闘的な活動家であり、リーダーではなかったか？事情は記事にも書かれておらず、わかりません。そのまま縁もなく、アラブにあっては知る術もなく、記憶の底に沈んでいきました。

それが、2011年の3・11の「フクシマ人災」を経て、いくつかの資料から岩本さんのその後を知ることができました。「亡国原発を闘った男・石丸小四郎の証言」(2011年週刊朝日10月15日号)で以下のように記されていました。「石丸さんは、66年に反原発運動を始めた。双葉町の酒屋の店主で、社会党双葉総支部長だった岩本忠夫さんの『核と人間は共存できない』という言葉に共鳴したのがきっかけだった。翌72年、石丸さんは岩本らが結成した双葉地方原発反対同盟に加わった。岩本さんは、社会党の町議から県議になった。県議に3回落ちた後、岩本さんは原発推進に転じ、第一原発5・6号機がある双葉町長に立候補して当選した。05年1月、内閣府の原

子力委員会の新計画策定会議に岩本町長(当時)は招かれた。議題はプルサーマル。福島県の佐藤栄佐久知事(当時)は、東電がひび割れ記録を改ざんした事件が02年に発覚してから反対に転じ、東電や経産省は頭を痛めていた。その会合で、岩本町長は『どうぞ、ここは確信を持って推進していただきたい』とエールを送ったという。

石丸は、かつての同志岩本さんを『東電と国に徹底的に利用されたんだ』と気の毒そうに言った。その手口が原発の『甘い蜜』だ。石丸さんの試算によると、電源三法、交付金や大規模資産税、東電からの寄付金などで、約40年間に458億円にのぼる収入があった。双葉町の人口7,000人で割れば、一人当たり650万円だ。過疎の町には、原発修理などの下請け企業、労働者相手の下宿屋、居酒屋など次々と出来、『原発長者』が次々と生まれた。(中略)私は岩本前町長にぜひ会ってききたかった。だが、7月15日に慢性腎不全で死去した。」と記載されていました。

また、週刊「金曜日」の2011年9月9日号の「原発と差別の中で」鎌田慧さんと樋口健二さんの対談で、次のようにあります。

「鎌田—ひどい話です。樋口さんもよく御存知の岩本忠夫前双葉町長は、7月15日82歳で亡くなりました。(中略)町長になる前には、社会党(当時)県議や『双葉地方原発反対同盟』委員長として、反原発の先頭に立っていました。

樋口—ところが東電側の総攻撃で3回連続で落選させられる。

鎌田—政界引退を決めたが、1985年に町長選に引っ張り出されて、05年まで五期20年を務めました。町内には福島第一原発5・6号機があるが、財政難を背景に、7・8号機の増設を求める推進派の筆頭格になってしまいました。事故後、テーブルを叩いて怒っていたと聞いていますが、東電に怒っていたのか、自分に怒っていたのか、残念ながらわかりません。岩本さんの長女と次女は東電社員と結婚しています。被害者と加害者がぐちゃぐちゃになっている。原発はそういう社会を作ってきた。差別構造の中に、さらに複雑な構造がある。ほとんど地獄だと思います」

私が67年に福島に行った時、きっと石丸さんに会い、一緒に岩本選挙で語り合ったのでしょうか。岩本さんの長女も次女もまだ小さかったのです。こういう人たちと一緒にいたのだな・・・と、3・11以降、感慨深く思い返しました。

岩本さんは清廉な人で、私の子供時代の世田谷の稼業のよろず食品店と店構えも似ていました。岩本さんの母親は、しっかり者で、妻も従いながら店をきりもりし、選挙で何十人も出入りする人々に、おいしいコメの塩むすびと、忘れられないほどおいしい白菜の漬物をふんだんに振舞っていました。子どもたちはまだ小さかったけれど、忙しく出入りする父親や大人たち、それに東京から来た私に、遠慮がちに興味津々で遠巻きにしていました。私は夜も岩本さんの家族と泊まってすごしたので、子どもたちとは仲良くなって話をしました。若者や、同年輩の社会党員たちが威勢よく選挙運動を楽し気に担っていました。選挙運動の1日が終わると、一杯飲んで「あの家は大丈夫だ」とか「あそこはもっと応援をかけた方が良い」とか、団結や勝利を陽気に誓う、雰囲気の良い選挙でした。私は、当時の岩本さんを思い出します。

「出稼ぎのとうちゃんが戻らない」とか「息子がどこで働いているのか連絡がとれなくなってしまった」など、村や農家の人々の相談に真剣に聞き入り、メモをとっていました。

「この双葉、働くところがあれば家族がバラバラにならないですむ。この双葉を働いて暮らしていける町にしたい」と私にも言っていました。高度成長の中で、取り残されていく故郷を変えたいという

願い、巧妙な反原発運動に対する妨害とカネのバラマキ。「安全神話」と原発に潤う町。独占と企業の論理が、国家意志として過疎の町を襲う時、こうした社会党の中核部隊ががんばれなくなっていたのでしょうか。社会党自身も政策変更し、「平和利用論」に変質したように、原発の国策「平和利用」「安全神話」にからめとられていきました。

良質の社会党の基盤は、国労、労働組合、原発政策と堡壘を奪われ続けた時代の一端を、岩本さんの人生は示しています。「地獄への道は善意で敷きつめられている」というのは、岩本さんのような歩みをいうのでしょうか。彼の「無私」の「善人」さ、当時、そうした多くの「岩本さん」を生み出し、現在の日本の保守化、右傾化に変質していったのでしょうか。これはまた、ソ連、東欧崩壊、社会主義の展望の暗転の時代に重なるのでしょうか。

No 516 重信房子「1960年代と私」第二部第3回前半 2019年4月

7. 全学連の活動 砂川闘争

米軍による北爆から「ベトナム侵略戦争反対」を訴える国際的な反戦運動が、米欧日で激化し続けていました。朝鮮戦争を上回る兵力を投入しながら、ベトナム人民の北部、南部の強じんな抵抗の前で、米政府は痛打をくらわされていました。

米国内の反戦運動は社会に広がり、政府を脅かし、欧州、ソ連、東欧から非同盟運動の主体である第三世界に至るまで米国のベトナム侵略に反対し、ベトナム人民連帯行動を強化しました。日米安保条約を盾に、米国のアジア侵略基地として、日本の米軍基地は侵略の前線として機能していました。兵力の補給、武器の更新、負傷兵の撤退、海軍兵力の寄港と日米政府の様々な密約の中で進められていきます。

67年1月のベトナム反戦第一波闘争が、12月に再建された三派全学連の初の行動として、羽田へと、400余名が全学連部隊として登場しました。明大は、学費闘争の最終局面でしたが、初代全学連委員長が斉藤克彦さんであり、参加も多かったようです。その後「2・2協定」を経て、斉藤さんに代わって秋山勝行委員長代行のもとで、全学連の第二波行動として、2月26日、砂川基地拡張阻止闘争が行われました。この時の参加か、その後の参加か、私自身の参加記憶ははっきりしません。たぶん「2・2協定」後で多忙で参加しなかったのでしょうか。



滑走路前での総決起集会(26日)

(1967.2.26 滑走路前での総決起集会)

ただ、この2・26闘争で三派全学連と反戦青年委員会は、初めて独自の集会を持ち、「反戦勢力」の流れを作り出したと、全学連自身が評価しています。このため、砂川基地拡張反対同盟青木行動隊長は、1,500人の青年、学生、労働者に次のような挨拶をしたと、記録されています。

「あの11年前の砂川闘争以来、こんなに前進した集会はなかった。これまで抗議集会といっても、基地に近寄ることができず、立川市役所前の広場などに集まって、犬の遠吠えをするだけでした。それが今日はどうでしょう。このようにして今日は滑走路の前で堂々と集会をやり抜いたのです」(77年「流動」

8月号より)。

67年前半の私たちの主要な闘いは、「2・2協定撤回」「学生処分白紙撤回」と、現思研の組織化であり、学外では、ベトナム反戦・砂川闘争が中心としてありました。

その中で、第一次砂川闘争を闘ったのは、全学連の明大の先輩たちであり、この時の逮捕起訴の裁判で、「伊達裁判長判決」が出たことを学びました。伊達裁判長は「米軍は日本国憲法に違反する軍隊であり、基地に侵入したと起訴された全学連の学生は無罪である」と言い渡したのです。ところが検察は、高裁を飛び越えて上訴しました。そして最高裁判決で差し戻しされ有罪になったという話です。当時も、司法権力のいかさまだと、私たちは話をしていましたが、のちに、このころの記憶は、2013年、土屋源太郎さんの話で、1955年の闘いが再び明らかにされているので、ここに触れておきたいと思います。

土屋源太郎さんは、伊達判決で無罪を受けた被告の一人であり、当時明大生で、全学連の都学連委員長として活動していました。

(土屋源太郎氏 2015年撮影)

土屋さんは、「伊達判決をいかす会」を立ち上げ、「砂川伊達裁判判決破棄した最高裁判決は無効」を求めて活動を開始していました。なぜなら、伊達判決を覆すために米駐日大使と日本の外相・最高裁判所長官が判決を巡って会っていたことが示される資料が、米国の機密文章解除の中から発見されたためです。土屋さんの発言は次のような内容です。(「情況」誌2014年11・12月合併号)

「1950年朝鮮戦争が始まると、立川基地からも米軍機は飛びたち、ベトナム侵略戦争でも拠点になっていった。米軍立川基地もその一環であり、原水爆を搭載できる大型機、高速戦闘機発着の必要から、滑走路拡張が必要となった。1955年5月、砂川町長に政府は基地拡張の通告を行い、126戸の農家と17万平方キロメートルの接收を告げた。これは町の生活破壊であり、砂川町議会を始め、

反対を表明して『砂川基地拡張反対同盟』が結成された。

これが砂川闘争の始まりだった。この基地のための測量に抗して、機動隊の暴力にスクラムで抵抗し、5,000余が流血の中で闘い抜いた。『土地に杭は打たれても心に杭は打たれない』と青木行動隊長の発した言葉は、その後の闘いの合言葉となった。権力の分断工作、逮捕などに抗して、1956年、反対同盟は全国の人から応援され、全国へも支援を呼びかけた。この時から全学連として砂川闘争に関わるようになった」と土屋さんは述べています。そして、延べ2万5千人以上の学生が砂川に泊り込み、地域ぐるみの支援活動を行ったとのことでした。





(ポスター)

「1956年10月12日、13日、数千の機動隊に守られて早朝から測量隊が現れた。6,000を超える労働者、学生、市民が盛り込み、測量阻止のスクラムを組んで反対同盟と一体となって闘った。この闘いの中で『赤とんぼ』が唄われ、大合唱となり、さすがの機動隊も静かになった。

この日、1,000人以上の怪我人、13人の逮捕者が出た。世論の反対の高まりの中で、15日以降の測量は中止になった」。その後のことです。57年の7月8日、早朝から基地の柵をゆさぶり、抗議行動を行った柵がこわれて立ち入れるようになり、基地内に200～300人の人数が数メートル侵入した結果となったようです。

当時、都学連委員長だった土屋源太郎さんは、指揮をとっており、この基地への侵入は当然のことと考えていたそうです。



(基地に突入する全学連)

「基地に入ると、1.5メートルくらいの高さに鉄条網が数百メートルにわたって置かれ、その後ろから機関銃を乗せた米軍ジープが2台現れた。司令官から基地内に入った者があれば射殺してよいと命令を受けていたという。対峙は昼近くまで続き、国会議員や調達局(測量当事者)、警察と話し合いがなされた。『本日の測量は中止する。双方は同時に引き上げる。逮捕者は出さない』ということで闘いは終わった」

のです。

ところが2ヶ月以上も経った9月22日に、米軍立川基地に侵入したとして、労働者、学生、23人が逮捕され、労働者4名、学生3名が『安保条約に基づく行政協定に伴う刑事特別法違反』として起訴されました。土屋都学連委員長もその一人でした。

この砂川事件で起訴された7人の被告には、総評弁護団中心に、大勢の弁護団が結成されました。被告側の主張は「安保条約に基づく米軍基地の駐留は、日本国憲法第九条違反であり、基地侵入は無罪」という立場で、「この裁判は憲法裁判だ」として臨んだのです。59年3月30日、東京地裁一審判決は伊達裁判長によって宣告されました。「主文・被告人全員無罪」。主旨は、「米軍の日本駐留は軍備なき真空状態からわが国の安全と生存を維持するため、自衛上やむを得ないとする政策論によって左右されてはならない。

米軍の駐留が国連の機関による勧告または命令に基づいたものであれば、憲法第九条第一項前段によって禁止されている戦力の保持に該当しないかもしれない。しかし米軍は、米戦略上必要と判断した場合、わが国と直接関係ない武力紛争に巻き込まれる危険があり、駐留を許可したわが国政府は、政府の行為により、再び戦争の惨禍が起きないようにすることを決意した日本国憲法の精神に悖る。

わが国が、外部からの武力攻撃に対する自衛に使用する目的で米軍の駐留を許容していることは、指揮権や軍出動義務の有無にかかわらず、憲法第九条第二項前段によって禁止されている戦力の保持に該当するものであり、結局わが国に駐留する米軍は、憲法上その存在を許すべからざるものと言わざるを得ない。米軍が憲法第九条に違反している以上、一般国民の同種法益以上の厚い保護を受ける合理的理由は存在しない。軽犯罪法より重い刑事特別法第二条規定は、なん人も適正な手続きによらなければ刑罰を科せられないとする憲法第三十一条に違反し無効である」以上が伊達判決の主旨です。

この「伊達判決」に危機感を持った米日権力者は、司法に介入してこの一審を否定すべく、秘密裏に話し合っていたのです。そのことは、当時の秘密だったので、被告らも知りませんでした。この会議の結果、上訴に至ったのです。

この最高裁判決によって編み出された「統治行為論」という詭弁が、以降も日本国憲法を骨抜きにしていくようになりました。最高裁判決いわく、日米安保条約のような、高度の政治性を有するものに対する違憲か否かの判断は、司法裁判所の審査には原則としてなじまず、一見きわめて明白に違憲、無効と認めない限り、裁判所の司法審査権の範囲外であるとして司法判断をしないと決めたのが、「統治行為論」です。「統治行為論」というこの論理によって、以降の「福島裁判長判決（自衛隊違憲論）」を退け、また、「イラク派遣訴訟」や、米軍基地に関する判断回避など、立憲主義の否定、骨抜きは基本となってしまいました。

司法において、最高裁判所が憲法判断できなければ、国の統治者の恣意的な憲法判断を許し、憲法第九条も骨抜きにされていかざるをえないのです。

とにかく、土屋源太郎さんらは最高裁の差し戻し判決によって、再度、地方裁判所の審理が行われ、有罪となり、被告7人は罰金2,000円の有罪刑を科されました。最高裁判決から40年を経て、2008年、米国立公文書館で砂川事件「伊達判決」に関する解禁文章14点が発見されました。（国際問題研究者の新原昭さんの発見）その主な重要な点は、マッカーサー米大使と藤山外相の田中最高裁判所長官との間で行われた砂川裁判「伊達判決」を破棄するための謀議密約があったこと、その内容を大使が、米本国国務省に報告した公電にあったのです。以上のように、50年代砂川闘争は闘われ、かつ、権力の謀略によって、無罪から有罪に変化したばかりか、「統治行為論」という、日本の立憲主義の否定が公に「合法」化されてしまったのです。

こうした歴史の上に、再び砂川基地に対する拡張計画が出され、それを阻止する闘争が日程にのぼったのが、67年だったのです。

67年2月以降、ベトナム反戦、さらには4月28日沖縄返還要求闘争が続き、そして5月16日、「三派全学連」は中大学生会館において350人以上の学生参加の上で「砂川基地拡張実力阻止闘争全学連総決起集会」を開きました。同じころ、明大二部の研究部連合会（研連）合宿が行われています（4月29日～5月3日）。

研連は執行部が、学苑会執行部に対案として名を連ねた人々に代わって、教育研究部幹事長の諏訪さんらが中心となって新執行部を運営していました。この合宿には、教育研のクラケンや、現

思研の仲間も参加しています。(私の記憶はあいまいですが、遠山さんと当時一緒に参加した写真が残っています。)

(1967.5.28 砂川現地闘争)

5月16日には、学苑会は5月末の定例学生大会開催を決定しています。すでに4月以降、新入

生を迎えた自治会の呼びかけで、反戦・反基地闘争は広がっていきます。

全学連の呼びかけで、5月26日、砂川基地拡張阻止の日比谷野音集会や、デモが繰り広げられていました。この集会で、革マル系の全学連と場所取りめぐって乱闘になったとのことですが、私には記憶にないです。この集会をふまえて、5月28日、砂川現地において総決起集会が行われました。

立川市砂川町に基地拡張予定地において、日共系の集会と、三派全学連の基地拡張反対決起集会が別々に行われることになりました。当初は、社共統一行動を予定していたのですが、結局、全学連の参加をめぐって折り合いが付けられなかったの

だと思います。明大新聞67年6月8日号によると、日共系の集会には3万人で、明大からは約20人が参加し、安保廃棄・諸要求貫徹実行委員会主催の「ベトナム侵略反対・立川基地拡張阻止・米軍基地撤去諸要求貫徹、6・28砂川集会」として開かれました。当時の日共系の主張には、必ず「諸要求貫徹」という言葉が使われていたのを思い出します。

一方、三派全学連は、約3,000人で、明大からは約250人が参加しています。そこから200メートルほど離れた場所で、約500人の革マル系全学連も集会を開いていたと、明大新聞に載っています。当日は、私も現思研の仲間と共に参加しました。私たちの結集した全学連(三派全学連)は機動隊と激しく衝突し、双方合わせて約100人の負傷者を出し、学生48人が逮捕されています。私たちも、明大屋間部の自治会も「2・2協定」の敗北的事態をのりこえて、再建された社学同勢力も勢いづいていました。まだ学費闘争指導部に対する処分が行われる少し前であったので、200人を超える人々が参加しています。

私も、現思研の仲間も、ブント社学同の隊列に加わり、「明治大学」としての隊列を組んで滑走路北側の集会に参加しました。和泉校舎から現地にマイクロバスで乗り付けた部隊が200人と明



砂川予定地・滑走路前の青年学生総決起集会

大新聞に出ているので、農・工学部の生田校舎や、神田駿河台校舎も含めれば、はるかに300人を超えていたでしょう。このころ、現思研のメンバーは、研連や各学部自治会、学苑会執行部で活動しつつ、学外のデモ、集会には15人から20人の仲間がデモに加わっていました。時には現思研のみならず、学部学生も誘って、より多くの仲間が加わります。

この日は、新入生の経験教育もあったので、私たち上級生らもほとんど参加しました。13時からの集会を経て、4時過ぎからデモ行進に移りました。「江ノ島ゲート」と呼ばれる付近から大量の機動隊が隊列を狭めるように規制し、それに抗議する学生たちは楯と警棒の暴力に阻まれてしまいました。私たちは歩道側へと追いやられ、片側サンドイッチ規制のまま、立川駅方面へと向かいました。私は青医連の人たちと、傘に大きく「救護班」と書いた紙を貼ってさし、腕にも同種の腕章をまいて、社学同の医学部の友人たちのグループと一緒に、緊急医療救護体制をとる一員として、歩道をデモに並行して歩きました。衝突のたびに、頭を割られる怪我人が出ていました。それでも学生側も機動隊の隙をついて、投石や駆け足行進で抗議します。基地正面ゲート付近になると投石が激しくなり、投石を止めると、ゲート付近で急に一斉座り込みに入るなど、全学連の指揮のシュプレヒコール・笛に従ってスクラムを固めてシットインを行います。機動隊のごぼう抜きに対し、退去させられたあとから再びスクラムを組んで態勢を立て直し、投石する学生たち。



(1967.5.28 砂川現地闘争)

たまたま機動隊は、逮捕した学生を盾にして投石に対抗するという卑劣な行動にでました。

野次馬含めて「ナンセンス!」「何だ!」と騒然です。救護班と書かれた傘を目印に、怪我人が次々と運び込まれてきます。白衣をまとった医学連の友人たちが、即応体制をとっています。

この友人たちは、かつて雑談の中で「手術にはまだ立ち会っていない」とか、「縫ったことは一度

だけある」という医者の方の卵たちで、普段は活動の方に熱心な人もいます。でも、こういう場では未経験でもそれどころではないと、果敢です。頭を割られて血がドクドクと出ています。その本人が何か話すと、それに合わせるように血が更に流れ出ています。青医連の者たちは止血し、また縫い合わせています。「大丈夫?」と私の方が不安になって尋ねると、真剣な顔で「消毒をしっかりしていれば大丈夫。血が出ている方がまし。打撲で脳内出血で血が外に流れない方が怖いんだ」などと言っています。これは頭から血を流し、縫ってもらっている人への励ましの説明かもしれません。私は何もできず、もっぱら消毒か、必要物品を手渡すか、服をハサミで開いて医者の方の卵たちが治療しやすいような補助しかできません。私と行動を共にしていたのは遠山さんともう一人、女性もいました。

夜8時半ごろ、デモ隊は、ジグザグデモや渦巻デモをくり返して、立川駅前党派別というより大学別に集まって総括的に逮捕者や怪我人などの安全確認をして、9時ごろにみんなで立川駅から御茶ノ水へと向かいました。学館に戻り、現思研の仲間は、すでに新学期前に新入生逮捕の経験から、よく注意していたので、みな無事でした。この日の明大からの逮捕者は1名でした。当時は逮捕されてもだいたい2泊3日で釈放されていた時代です。長期勾留は指揮者のみだったと思

ます。その後も6月も数次にわたって砂川基地拡張阻止の全学連の闘いは続きます。6月末に佐藤首相の第一次東南アジア訪問に対する新たな経済侵略に対する、訪問阻止闘争が広がっていきます。



正門ゲート前で
こむ全学連・反戦

労学一万の大集会 基地正門ゲート前でかちとる

(1967.7.9 砂川現地闘争)

7月9日には、砂川基地拡張阻止大集会が社共統一行動として行われました。雨の中、全学連、反戦青年委員会も加わり、12,000人の人々が集まっています。この日も激しい市街戦となり、機動隊はデモのたびごとに、新しい防護服や乱闘靴から、盾や指揮棒に替わっていくというのが、当時の私の印象です。

学生は反撃して投石しますが、社共統一行動を要求された反発もうまれます。このころの闘いから、反戦青年委員会は既成左翼や組合の無力さ

や、しがらみを超えること、「自立・創意・工夫」のもと、独自に全学連との行動を重視するようになっていきます。そしてまた、砂川闘争の先陣争い的な競合が闘いの中から育ち、党派間の内部矛盾も顕著になっていったと思います。

ちょうどそのころ、明大ではすでに述べた学費値上げ反対闘争に関わった指導的な位置にあった学生たちに、不当な大量処分が、6月23日、学長名で発表されました。退学処分11名を含む21名に懲戒処分が科されました。退学処分には、学費闘争の始まりの学生会中執委員長の中澤満正さん、全学闘争委員長の大内義男さん、全学連初代委員長だった齊藤克彦さんも、また「2・2協定」の混乱を收拾していた委員長代行の任を負っている小森紀男さんも含まれていました。二部では、酒田全二部共闘会議議長や研連委員長だった岡田さんに退学処分が下されました。

ただちに、昼間部、夜間部の各執行部、各学部自治会は、不当処分に対し「処分撤回闘争」を組み、ハンストや、授業ボイコット体制を取る宣告しました。それらはすでに述べたとおりです、当時のブントの学生対策(学対)指導部は、中核派と競合しつつ、明大の「2・2協定」自己批判の苦い教訓から、学園内闘争に対しても無理な急進的方針に執着していたのではないかと思います。街頭でも大学でも「改良と革命」の話はかつてのようには出ず、「革命的敗北主義」が主張されるようになりました。徹底的に非妥協に闘って敗北することによって次の勝利への展望をつくるとする考えです。私たちはそうした主張を大学の自分たちの活動の中では実践していないままでした。

私たちは、そういう意味では「社学同」といっても自分たち流のやり方で加わっていたので、仲間意識を大事にし、相互扶助・共同のスタイルで、働きながら学ぶ範囲で、街頭政治闘争に参加していました。党内を、だれが指導していて、どんな派閥があるかも興味はなく、明大学生会館を中心に会おう仲間たちと交流し、助け合っていたので、御茶ノ水周辺大学とは、ブント同士仲良しでした。明大・中大・医科歯科大、専修などの友人たちです。また、関西から東京に任務変えで常駐する全学連や反戦活動家のブントの人たちも、明大学館を根城にしていたので親しく、頼まれれば、現思研の仲間が助けました。後の反帝全学連の委員長の藤本敏夫さんや、学対の山下さん、

村田さん、高原さんや佐野さんらです。

「2・2協定」以降、明大闘争の過ちを他党派に対しては謝罪しつつ、ブント内では「斉藤糾弾」を求めて彼を探しまわったりはしていたけれど、ブント指導部自身の自己切開の痛みを伴うものではなかったのだらうと思います。その分、東京に乗り込んで活動を始めると、「関西方式」をそのまま持ち込んで、「関西派」的な人脈形成しつつ、自らを自己肯定したまま「革命的敗北主義」路線を主張していたように思います。私の知る関西派の人たちは「政治主義」というか文化、芸術、文学を語り合うことはありませんでした。

ブントは、全国の自治会数では中核派をしのいでいるのだということでした。中核派の断固非妥協路線と競うように「革命的敗北主義」路線が主張されていたように思います。解放派やML派もちろんライバルではあったけれど、「反中核派」でブントと共闘していたように思います。現代帝国主義の規定、情勢分析、ベトナム連帯の位置づけなど一米帝国主義の侵略戦争か、スターリニズムと帝国主義の代理戦争かといった一あらゆる局面で論争し、他派批判を自らの立脚点とするといったやり方です。

当時の全学連中核のメンバーは、中核派11、社学同9、解放派5、第四インター2となっており、議決においては、中核派の方針に反対して拮抗したまま進んでいきます。その結果、「非妥協性」を競うような運動戦へと、全学連の活動が益々傾斜していったといえます。夏休みを経て、9月佐藤訪韓阻止闘争から、500名をこえる実力部隊を先頭に街頭行動を更に重視し、9・20佐藤東南アジア訪問実力阻止闘争を経て、10・8羽田闘争へと飛躍していくこととなります。

No 516 重信房子 「1960年代と私」第二部第3回後半 2019年4月

8. 67年の学園闘争の中で

67年街頭行動の中で、一番鮮明に忘れることができないのが、10・8羽田闘争です。あの経験は私に、学生運動ばかりかその後社会に出ても教師として働きながら重視しようとする生き方に導いたといえます。67年は、私はまだ学苑会の財政を担当していたと記憶しています。66年の対案によって、日共系から学苑会執行部を、いわゆる三派系の学苑会に転換して以降、たしか5月の定例学生大会だったと思いますが(もしかして、それ以前にあった「2・2協定」に関する3月の臨時学生大会だったかもしれない)私は財政担当として、会計報告の中で、民青の時代の不正を糾弾しました。

この時の大会は、66年12月1日の一票差で勝利した大会と違って、大きな差で三派系が勝利しています。私は、民青から引き継いだ会計帳簿を一つ一つチェックし、日共系の暁出版印刷所の領収証が実際より多いと感じたので、私は印刷所に行って、原簿をチェックしてもらい、実際に支払われた額を書き出したうえで、領収証の総計額の書類を再発行してもらいました。2回の印刷代数万円が水増しされているのがわかりました。それを示しながら、民青時代の帳簿の不正を学生大会で報告しました。印刷所の方も、私たちが三派系とか理解していなかったのか、妨害することもなかったもので、正確な数値が得られたのです。

民青は「清廉潔白」をこれまでも主張していたので、ダメージでしたし、日共内の中国派のパージと重なり、急速に学苑会奪還や「民主化」の中央奪還の活動は退潮していき、商学部、法学部自治会死守体制をとり、文学部民主化委員会など、学部活動にシフトしていきました。そのころか、その後のことですが、ブントの現思研活動に対して脅威を感じていたのか、今度は、ML派に属し

ていた会計監査委員が、私の会計処理の領収証に不正がある、デパートの食品や衣料の領収証があったとして告発をはじめました。私に直接問い合わせや審査を行わず、ML派に報告し、ML派からブントの指導部に話を持ち込んだことがありました。

それによって、私に自己批判を迫り、私を辞めさせようとしたのか、他の交換条件があったのかわかりません。私は、こうしたやり方で自治会のことを党派問題にしたことに、ML派に大いに憤慨しました。まず、「私の会計処理は正当だ」とブントの人に言いました。「ML派こそ自己批判する必要がある」と伝えました。ブントの人は驚いていました。これは実際に「不正領収証」だったので

理由は、学苑会委員長であり、全二部共闘会議議長のML派の酒田さんの授業料の一時穴埋めだからです。66年12月の学生大会対案人事で酒田さんに委員長になるよう説得した時には、授業料が払えず除籍になりそうというので、私が会社を辞めて貯めていた虎の子貯金を貸しました。それも返せず、3月再び授業料支払いが求められる季節となり、「2・2協定」後の処分含めた大学側との闘いにおいて、委員長を除籍させるわけにはいかないと、中執内部で会議をして決めたことなのです。酒田さんが返却するまで一時的に中執財政で立て替えること、その会計処理は私にお願いされた訳です。ML派も、立て替える考えもないし、私含めて、他人の授業料をもう払えなかったからです。

私は「ML派の会計監査委員が、問題を党派的に歪曲したのは許せない。学生大会で、すべて経過報告する」といきまいて怒りました。しかし、ML派が謝ったので、そうはしませんでした。そのかわり、私は大会の新人事で私の財務部長の他、副財務部長にML派の人間を置くよう要求しました。ML派に監視と責任を分担し、公明正大を証明してみせようと思ったからです。この人事は、たしか67年5月の大会だったと思います。

ところが、この財務副部長のK君は、数か月の夏休み明けから大学に来なくなり、一時金として常時支払いのため彼が管理していた金を使い込んだと謝りに来て、そのまま辞めたいと言い出す始末でした。「使い込んだ金は働いて返す、ML派には言わないで」と言い、その後連絡不通になりました。もちろん中執会議で報告しました。ML派とは、以来、冷ややかな関係となりました。また、卒論もあり、10・8闘争後の67年秋の大会で、財政部長は現思研の宮下さんに後継してもらい、学苑会活動は、一切、引き受けないようにしました。現思研が拠り所であり、また、卒論や、アルバイトも多忙だったためです。

また、この66年から67年は、日共系の学生たちとの主導権争いがとても激しかった時代です。66年にはじめて日共・民青系の人たちの激しい暴力を目撃したことがあります。これが初めてで、衝撃的でした。三派系(都学連系)は、ラジカルでも、民青のソフト路線では考えられない光景だったのです。明大本館で、全国寮大会が開かれました。当時は、今の武道館の建つ前から、そこには近衛兵の駐屯宿舎がありました。戦後、そこは苦学生たちの寮となっていて、「東京学生会館」(東学館)と呼ばれていました。そこにはまた、活動家の拠点として、ML派などが活動の場にしていました。「東学館闘争」の立て籠もりなど、退去と建物の破壊に抗議した闘争を経て、66年11月、学生たちはこの東学館から追放されました。

それ以前のことだったと思いますが、この全寮連の大会において、執行部の奪い合いで激しい対立となったのです。当時の全寮連の執行部を牛耳っていたのは日共・民青系で、御茶の水女子

大など、いわゆる反日共系の寮の代表に対して資格がないから大会への入場を認めないと対立が続いていました。結局、どちらが次期執行部を形成するのかの争いであり、また路線的には米帝に従属した日本政府の文部行政を批判し、「諸要求貫徹」を主張する日共系に対する反日共系の闘いでもありました。日共系は、鍬の柄のような棒を持った防衛隊を組織し、入場に押しかける反日共系を入場させないと、暴力的に渡り合っていました。2階から突き落とされ、頭から血を流し、よく死なずに済んだというような流血が続き、双方多数の怪我人が出ました。

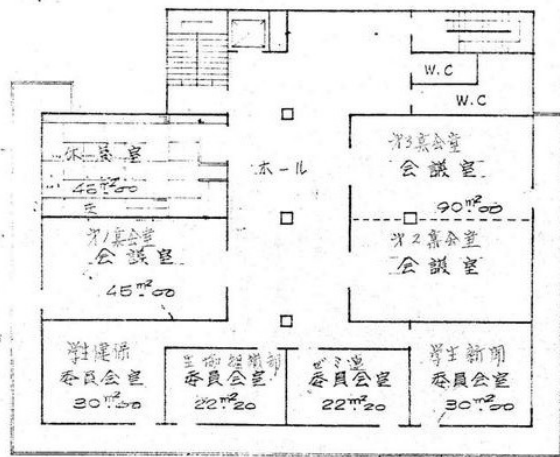
学生会館にいた私たちは、緊急救援を頼まれて、怪我して本館中庭に倒れている学生を、青医連の友人たちに治療してもらうために走り回りました。本館の現場に駆けつけてみると、代々木病院からの救急車が正門脇にすでに停まっていました。代々木病院の救急車隊は、倒れている人に「大学は？え？こいつはトロッキストの方だ」などと言いながら負傷した学生を選別して放り出したりしているのを目撃しました。「ひどいじゃないか！」と私たちは泣きそうなほどの衝撃を受けながら、倒れている者たち、選別排除の目にあつた者たちを立て看を担架代わりにして、次々と学館に運び入れました。「民青が…」話す程に、どくどくと流血します。糸は木綿糸まで消毒して縫っていたけれど、大丈夫なのか…と怖くなりました。一方、民青は、会場封鎖をして寮大会を続け、「トロッキストの妨害にもめげず、新方針、新執行部を選出した」と後の日共機関紙「赤旗」にも載っていました。

私は、反日共系の側にいるわけですが、民青の偽善的振る舞いにはうんざりするのですが、本音では、どうして反日共系は先に手を出してしまうのかが不満でした。いつも民青系は、やられてからやり返すと思っていたのですが、この寮大会の時は、まったく違っていました。

民青の人たちは譲れない時には、暴力を「正当防衛」として先に手を出すものだと思ったのはこの時です。67年か68年に、明大二部の民青が本格的に暴力を仕掛けてきたことがありました。きっかけは何だったのか…。とにかく明大二部の民青の勢力がずいぶん削がれてしまったことが一つ大きな危機感だったと思います。また、三派系が民青のビラ撒きなどにも暴力をふるったりしたことが原因だったかもしれません。

日共系に対し、三派系は横暴でした。学苑会執行部ばかりか、生協二部の学生理事選挙でも、日共系は敗れて、議席を失っていました。残っている商学部と法学部自治会を拠点に、「政経学部民主化委員会」や「文学部民主化員会」などを立ち上げて、巻き返しを図っていました。クラスに討論やビラ撒きに入ると、日共系と反日共系が教室でぶつかって論争もしていました。時には、三派系の活動家たちは、民青系の学生を無理やり三派系の自治会室に連れ込んできて、「自己批判要求」なども暴力的に行っていて、民青、日共の神田地区委員会で、我慢の限度にきていたのだらうと思います。

ある日のこと、夜9時を回っていて、最後の授業が始まり、みな現思研の仲間も教室に向かい、私は一人4階の現思研にいました。



4階平面図 450㎡20

(学館4階平面図・現思研は学生新聞委員会室)

「うオー」というようなとどろき、「あぶないー！」「民青の襲撃だ！」遠くで怒鳴り声がありました。

「日共の暁部隊はすごい」「中大では民青の方が暴力的だ」など、ブントの人たちから話は聞いていたので、民青が攻撃を仕掛けてくることを、私たちも話題にしていました。来た！私は現思研の部屋(マロニエ通りに面した4階)からすぐ走って行って、反対側にあるエレベーターが3階にあったので、それを4階に上げて非常ボタンを押して停止させました。エレベーターを日共系に支配させないためです。そして、そのすぐ脇の階段用の鉄扉を閉めようと急いで手をかけ、民青が来るのを遮断するべきだと思いました。

襲撃隊は、すでに3階の学苑会に到着したのか、ガラスの割れる音や怒鳴り合い、ドアを突く豪快な音がしています。覗こうとしたら、その一瞬に3階から4階へと黄色や白のヘルメットをかぶった集団が駆け上ってきました。「いたぞ！重信がいるぞ！」と先頭で2段跳びに駆け上がってきたのは商学部の民青のリーダーの和田さん。ぎょろ目でいつもキャンパスで反日共系に立ち向かい論争している闘志満々の人です。私はあわてて鉄扉を引き、閉めてカチャリとロックしました。間一髪で遮断しました。カンカンカンと鉄扉を叩き、しばらく怒鳴りながら鉄扉を壊そうとしていましたが、しばらくするとあきらめたらしく静かになりました。3階や隣の学生会館旧館の方に走っていったようでした。

旧館には、各学部自治会室があります。こちらの新館の4階には現思研のいる新聞会室以外、和室、会議室がありますが、調べてみると、4階にいたのは、夜9時から10時近いため、私以外誰もいませんでした。それも知らず民青は隣の旧館の窓からガラス張りの新館4階に板を渡して渡るつもりか、うかがっていました。私は会議室すべての電気を付けました。民青の行動が、ちょうど授業を終える学生たちによく見えるようにするためです。そして、現思研の新聞会室に戻り、ドアをロックして、ベランダからマロニエ通りの学生たちに呼びかけました。

「学友のみなさん！民青が地区民青や日共の人を引き連れて、ただ今、学館を襲撃中です。この暴力を監視してください！」と叫びました。ロープや板を渡って新館に乗り込んでも、民青が私の部屋に入るには、もう一つドアを壊さなくてはなりません。私もハンドマイクはないので、大声で訴えました。最後の授業を終えて夜間部の学生たちがぞろぞろと出てくる時でした。私の方からは、何人の民青襲撃隊が加わっているのかわかりません。ただ、「日共の暁部隊には半殺しにされる」と中大の友人からも聞いていたので、現思研でも時々話題になっていたのですが、それが現実になりました。

当時の千代田区など第一区の選挙区の日共の衆議院議員候補は、紺野与次郎さんで、私の中学時代の仲良しの友人の民子さんの父親でした。「大丈夫よ、もし日共に拉致されたら民子さんのお父さんに訴えればいから！」などと軽口をたたいていたのですが、本当になってしまい、驚

きつつ、下には学生仲間がいるので、闘争心の方が湧いてきました。続々と学館の下に集まった友人や野次馬が「日共は暴力を止めろ！」「ナンセンス」と大合唱しています。そのうち、雄弁会の友人で地理学科のMさんが、「警察が来たぞ！」と大声をあげました。すると、あっという間に日共・民青は撤収を始めて、さっと消えてしまいました。撤退時は隊列を組みつつ全力疾走です。警察は来ませんでした、Mさんの機転だったのです。民青は「暴力はふるわない」ことを原則としており、こんな暴力を白日にさらしたくなかったので、逃げ足は速かったのです。

もう1回の次の攻撃は、その後のことです。67年末か68年初めのことか、学館を道をへだてた大学院裏の校舎の1階で、民青と反日共系が長い旗竿で小競り合いを始めました。解放派やML派ら文学部の自治会と民青の対立のあった時です。この時の私は、やはり4階にいて、マロニエ通りを見下ろしました。そこに大学院の裏の方からマロニエ通りを通してデモ隊が整然とピッピッと笛に合わせて駆け足でかけつけてくるどころでした。水色のヘルメット部隊の助勢です。4階のみんなは援軍に手をたたき、下の野次馬や学生たちも拍手していたところ、突然、反民青の部隊を襲撃し始めたのにはあつけにとられました。社青同解放派の党派性は水色のヘルメットなので、てっきり救援隊が仲間と思ったのですが、これが民青部隊だったのです。

「あっ、そういえば民青全学連のシンボルカラーは青だ！」と誰かが叫びました。全学連防衛隊というのができ、トロッキストを粉碎するために駆けつけたということなのです。この時も、背後から100人ほどが襲いかかり、反日共系は防戦に追い込まれ、コーナーに押されていた日共系の学生の血路を開くと、あっという間に撤収するという見事な動きを示していました。よく訓練された組織された暴力に、現思研の仲間たちと感心してしまいました。しかし、大学祭などは、右派も民青の人々とも対立するばかりではありませんでした。

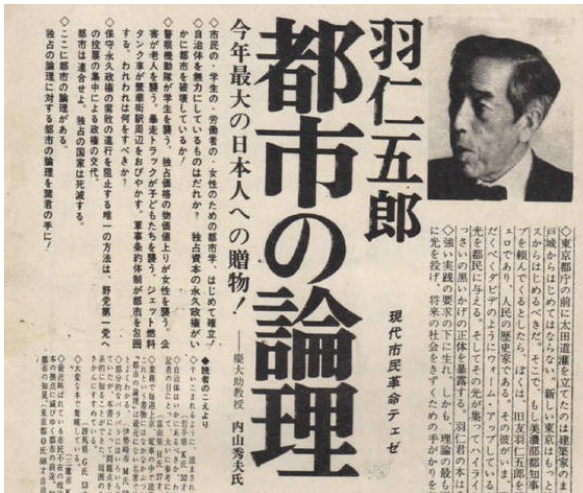
私自身の当時の関心や活動についても、ここで触れておきたいと思います。研連での合宿や行事、ことに秋の駿台祭の文化祭にはみんな協力し合います。駿台祭には昼間部も夜間部も、駿河台校舎を使う者たちが、共同して駿台祭実行委員会を結成します。66年にはそこで共同した応援団長のSさんらの協力のもとで、その後の学費闘争の時にはいろいろ助けられました。

体育会の危険な自治会破壊攻撃に、応援団は「中立宣言」して、体育会の動きに歯止めをかけてくれたし、本館で使用していた貸布団が体育会の占拠で妨害されて運び出せないのを、応援団員を動員して片づけを手伝ってくれました。貸布団屋に代金を支払う私には、当時、布団を失うことは深刻な問題でした。文化祭プログラムは、民青など含め、研連と昼間部の文連(文化部連合会)、応援団と協力し、学園祭はサークル中心の展示・発表・講演の催しをやります。実行委員会で大きな講演や、広場での打ち上げパーティーも企画しました。

67年には、右翼体育会の拉致や暴力が2月は猛威をふるいましたが、入試も終わり、新入生を迎えると、彼等は野球部の島岡監督の指揮で神田から引き上げ、生田など合宿所に戻っていききました。応援団は神田にいたので、引き続き交流していました。

67年の文化祭では、私も企画を担当しました。そのころ、「少年サンデー」「少年マガジン」「ガロ」などマンガが大学生の読み物となっていると、社会的に話題になっていました。なぜマンガが流行するのかといった「マンガ世代の氾濫」を問う企画をつくりました。また、当時、吉本隆明が学生に読まれており、そのことにも注目しました。そこで、「ガロ」に執筆していた上野昂志、マンガ評論の石子順三、最後の講演を吉本隆明として企画し、駿台祭に招請しました。

その前年、66年には、私たちは羽仁五郎を「都市の論理」の著者として招請しました。「交通費しか払えないが、講演をお願いしたい」と私は交渉しましたが、「講演料はきちんと払ってもらいたい」と言われましたが、講演後、始めからそのつもりだったのでしょう。交通費分も含めて、すべてカンパしてくれました。



（「都市の論理」広告）

65年は、小田実も記念館でベ平連運動について話をしてもらいました。ML派の人らがベ平連批判と質問をすると、「ベトナム反戦に関して、君たちは君たちのやりたいようにやったらいいでしょう。同じように、他の人がやりたいようにやるものまた、自由に認めるのが民主主義だ。ベ平連は各々自分のやりたい方法で、やれる方法でやる。私もそうだ。文句をいわれる筋合いはない」と返答していたのを覚えています。

67年の学園祭の吉本隆明の講演は、ちょうど10・8闘争後の遅くない日となったので、10・8闘争について吉本の考えを知りたいと、学生会館5階ホールには入りきれないほどの学生が集まりました。ちょうど、10・8闘争に関して知識人、文化人と呼ばれる人々が「暴徒キャンペーン」を張る政府マスコミに対抗して、警察の過剰警備による弾圧を批判し、学生たちの闘いを孤立させまいと奮闘している最中だったので。

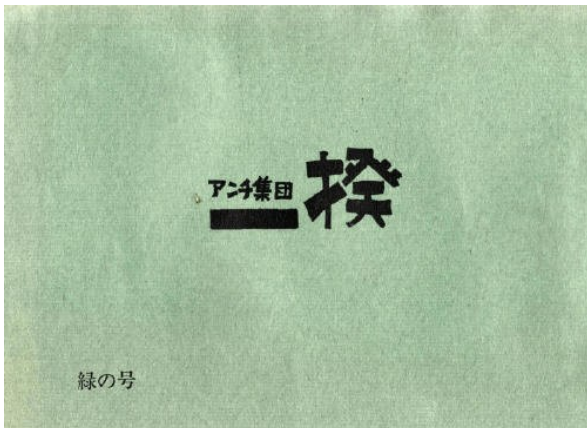
吉本は、10・8闘争に関してそれまで発言していなかったもので、学生たちへの「支持」をみな期待し聞きたかったのです。ところが、おもむろに口を開いた吉本は、評価する、しないと表明すること自体がナンセンスなのだとして述べて、みんなをしらけさせました。知識人の主体性とは何かを語り、自分のやり方で表現していると述べたのです。学生たちが吉本に期待したほど、吉本の眼中には学生たちの闘いが評価されていないことが、よくわかったのです。私自身は、67年10・8闘争までは詩作をしていたので、吉本の「詩」や「抒情の論理」などの本を読んだことはありましたが、思想的影響も受けていなかったのですが、友人の中にはがっかりする者もいました。

駿台祭のこうした講演のほか、日共系の社研(社会主義科学研究部)や民科(民主主義科学研究部?)のサークル展示には支援し、当時のベトナム反戦など研連でも共同したりしました。私の所属していた文学研究部は、部室を開放して、「駿台派」という同人誌を販売している程度だったと思います。

67年は、その「駿台派」の編集長として、私も短編から詩、エッセイを編集していました。この67年には、自分の情念の広がりや突出を詩の中で格闘していた感じでした。世界・社会を変えることができるという思いと、自分の意思を政治的な言語でなく、何とか表出したいと考えて、現代詩に熱中していたように思います。政治的言葉、ことに学生活動家たちの自己陶酔的なアジェーションのパターンの政治用語から排されている心情を表現したいという思いにかられていたのです。

「駿台派」では、小説や評論で、詩の発表の場が不十分と感じて、文研の詩人仲間呼びかけて、67年には詩集「一揆緑の号」を発行しました。9月に編集を終え、印刷中にちょうど吉田茂の死があり、はさみこみのしおりで「臣茂」が死んでも「臣人々」は生き続ける憂国的心情を記しまし

た。この詩集は、10・8闘争のあと発行されましたが、10・8闘争を契機に、私自身は詩作を一旦やめて、政治的声を拒否せず聴こうと思ったのです。



(詩集「一揆緑の号」)

「やりたいことをやり、なりたい自分になる」「自分の欲望・意志に忠実に生きる、生きることができる！」そんな思いにあふれていました。社会を変えられると信じていました。高校を卒業して就職し、新卒新入社員として社会に出た64年から65年に大学に通える道を見つけ、夢中で「学生」をやっていたといえるかもしれません。

大学生生活、学習も詩作もアルバイトも、学生運動も、すべてが楽しくて充実感を味わっていました。自分一人の人間の能力は限られているけれど、思いっきり自分の可能性を開いて生きようとしていました。寝る間を惜しんで、常に好奇心を持って前向きなエネルギーにあふれていた自分を今、振り返りつつ、その情熱を認めることができます。

しかし、当時、私に欠けていたことを、今ははっきりわかります。自分のことに精一杯だったのです。友人たちの悩みや困難と一緒に悩み、耳を傾け、解決に尽力していたつもりでしたが、今から捉え返すと、自分の関心角度からしか結び合っていなかったのだらうと思います。それを若さというものかとも今は思います。そうしたあり方は友人にも、家族、特に父や母に対しての配慮を欠いていました。大学を受験し、自分の意思通りに生きる私を、家族はみんな応援してくれました。そして学生運動にも理解を示してくれました。私も何でもすべて家族に、特に父親に話しました。でも、私が両親や兄弟たちに支えられていたほどには、私は家族をかえりみる余裕がなかったのだと、今ではとらえ返すことができます。若さは身勝手に思い切りよく、時には傷つけていることを自覚できないものなのでしょう。

このころ、替歌もたくさんバリケードの中で歌われました。学費闘争のころには校歌や明大の戯れ歌(ここはお江戸か神田の町か 神田の町なら大学は明治・・・)なども歌っていましたが、ブント

の歌もありました。67年にはブントの先輩たちが歌う「ブント物語」の歌(「東京流れ者」の曲で歌う)を知りました。この歌をコンパなどでインターナショナルやワルシャワ労働歌で締める前に、みな楽しんで歌っていました。「ブント系の軽さ」といえますが、なかなか当を得た戯れ歌です。

ブント物語

1. ガリ切ってピラまいて一年生
アジッてオルグって二年生
肩書並べて三年生
デモでパクられ四年生
ああわびしき活動家
ブント物語
2. 勉強する気で入ったが



行ったところが自治会で
マルクス レーニン アジられて
デモに行ったが運のつき
ああ悲しき一年生
ブント物語

3. いやいやながらの執行部
デモの先頭に立たされて
ポリ公になぐられけとばされ
いまじゃ立派な活動家
ああ悲しき二年生

4. デモで会う娘に片思い
今日も来るかと出かけたら
今日のあの娘は二人連れ
やけでなったが委員長
ああ悲しき三年生
ブント物語

5. 卒業真近で日和ろうと
心の底では思えども
最後のデモでパクられて
卒論書けずにもう1年
ああ悲しき四年生
ブント物語

6. 先生、先生とおだてられ
今じゃ全学連の大幹部
奥さんもらって落ちついて
今更就職何になる
ああ侘しき活動家
ブント物語

※ 管理人注

この替歌は、「戯歌番外地 替歌にみる学生運動」野次馬旅団編(1970. 6. 15三一書房発行)には「悲しき活動家」という歌として載っています。

本に掲載されている歌詞と一部違うところがありますが、替歌なので、いろいろなところでアレンジされて歌われていたと思うので、何が正しいということはないと思います。

No 521 重信房子「1960年代と私」第二部第4回 2019年7月

9. 10・8羽田闘争へ

67年10月8日、この日の闘いによって、学生運動が転換したと言っても過言ではないでしょう。砂川基地拡張反対闘争を闘いながら、三派全学連は矛盾や対立は続いていました。中核派のヘゲモニーに対して、他の党派もそうだったので、私のまわりでは特にブントが対抗意識を

露わにしていました。中核派の「反帝反スターリン主義戦略」と「反帝戦略」のブントは、闘いの位置づけ、分析において常に対立し、全学連の基調報告や政策にどう反映させるか、7月の全学連大会でも争っていました。

私たち現思研は、それらを学対の村田さんや、山下さんから聞くとか、機関紙で知る程度で、主体的な立場でどうとらえるというほどの考えもありませんでした。学内の党派的な拮抗や、民青との対立には反応しますが、党派的な大学外のやりとりは、あまり注目もしていません。

67年には、ベトナム反戦闘争が国際的な高揚を背景に、学生運動、ベ平連をはじめとする市民運動も広がっていました。4月に美濃部革新都政が始まり、社共や総評・産別などの労働運動も共同し、世論は平和と反戦を求める要求は強まっていました。再びアジア侵略によって経済成長を遂げようとする独占企業、財・政界の露骨な動きに対し、多数の都民が美濃部都政に平和と民主主義を託したといえます。

学生運動は、そうした時代を背景に学費闘争、砂川米軍基地拡張反対闘争を闘い、ラジカルさを競うように各党派の街頭活動は先鋭化していきました。6月には佐藤首相が訪韓し、9月20日には、第一次東南アジア訪問の日程が決まり、日韓条約を免罪符のように、日本政府は戦争の責任をあいまいにしたまま、再びアジア経済侵略を開始しています。こうした佐藤政権下の67年、8月には新宿で米軍タンク車衝突炎上事件が起き、9月には米政権が、日本への原子力空母エンタープライズ寄港を申し入れています。そして、10月8日、佐藤首相は南ベトナム傀儡政権の招きによって、ベトナム訪問が行われようとしていました。佐藤首相のベトナム訪問には、ベ平連も社共の既成政党も、連日、街頭抗議活動を行っています。

10月8日、全学連と反戦青年委員会5,000余名は、この日、激しい弾圧に抗して闘います。実際には、前日に法政大学で行われた、中核派による解放派リーダーへのリンチ事件で、全学連としての統一行動は不可能となってしまいました。10・8闘争の総指揮を執るはずだった高橋孝吉さんらに対する中核派のリンチ、テロのやり口に、反中核派で社学同含めて爆発寸前の矛盾が激化しました。ブントや解放派らは中大から法政大学へと抗議行動を起こし、衝突しそうな状況であったようです。私たち現思研も、中大での決起集会に参加し、翌日の備えて明大学館に戻って、みな泊り込みました。

法政大学での党派対立に備えて、各派は角材を準備したのですが、この角材は内部対立ではなく、権力に向けて行使されるべきだということで收拾したと聞きました。それが10・8闘争の新しい実力闘争街頭戦に転じていったのです。

当時の私は、授業もあったし、文研サークルの活動や詩集作りにも熱中し、学苑会執行部も現思研の後輩に財政部長を継ぐように説得し、やりたいことを整理しながら、来年は卒論に集中しようと考えていました。すでに必要な卒業の単位はだいたいとっており、卒論と教職課程を中心に、来年の68年を迎えようとしていました。

このころ、関西から東京駐留で、学館に寝泊まりしている佐野さんや藤本さん、また、その後、北海道から学館に来ていた山内昌之(のちの小泉首相ブレン)や吉田さんら、頼まれれば、現思研として雑務を引き受けたりしていました。社学同の人々のことを身内のように親しんではいましたが、だからといって「同盟員」としての活動を特に義務付けられるわけでもなく、招請があればデモに参加し、機関紙を購読するくらいの活動です。もちろん学内での私たちの自治会や生協の活動自身が、社学同にとってはメリットでもあるのです。

早稲田社学同の荒さんもよく私たち現思研の部屋に顔を出していました。彼いわく「現思研は心の軍隊だな。お互い家族のように思いやるのはうらやましいが、それだけでは心情主義だ。学習会をやったり、機関紙討論などの理論的活動をやっていない」と批判していました。のちに下級生から思い出話として知らされたのですが、私は「あらそうかしら。観念的で大言壮語の『戦旗(機関紙)』を読んでもピンと来ないのよ」と平気で言い返していたようです。

また、私が、じゃあ学習会をやるかと言って始めるのはカフカの朗読だったり、ブント社学同の学習会というので、私が準備しているのかと参加するのかと思ったら、医科歯科大の山下さんや早稲田の村田さんにレクチャーを頼んでアルバイトに行ってしまったそうです。中国文化大革命にも共感せず「あんな画一的なおかつ頭が社会主義なら、私はあんな革命はいりませんよ」と言っていたと荒さんは、のちに語っています。この頃から荒さんが私にニックネームで「魔女」「魔女」と呼ぶので私は腹を立てていました。



「魔女って『奥様は魔女』のサマンサみたいなもんだよ。魔女らしくないのに魔女みたいなことするからさ」と荒さんが言い出したので、以降、ブントや赤軍派の多くは「魔女」というニックネームで呼んでいました。私が怒るので、私の前では当初は使わなかったですが、のちには、68年ころにはまあいいかと気にしなくなり、当時の通称となってしまいました。こうした雰囲気の中で羽田10・8闘争を迎えることになりました。

10月8日早朝。いつもは早々に知らされる集合場所が(すでに萩中公園に決まっていたまかもしれません)当日朝ブントから「今日はこれまでと違う。歴史的闘いとなる。ことごとく指揮には従ってほしい。まず、何人かに分散して東京駅へ行ってほしい。そこで次の指示が出る」というのです。上原さんや、67年に入学した田崎さんら含めて、私たちは分散して三々五々、御茶ノ水駅から東京駅へと向かいました。東京駅のホームに着いてからか「品川駅京浜急行ホームにただちに結集せよ」というのです。私たちは赤旗を巻いたまま、品川駅のホームへと向かいました。社学同の仲間たちもどこに行くのかわからないし、乗り替えの改札があるので、みんな一番安い区間の切符買うように言われて、10円区間だったか20円区間だったか覚えていませんが、京浜急行品川駅に入りました。スクラムを組んで改札を無賃で突破するグループはいません。ホームいっぱい社学同の仲間らしいのがうろろろしています。成島副委員長や、佐野さんもいます。

しばらくすると「ピーッ」と笛が鳴って「乗れーッ！」との号令です。みな、あわてて乗り込みました。私たちは30人くらいの明治の仲間たちです。現思研の仲間は仕事があるので、そんなに多くなかったと思います。田崎さんはこの日、生まれて初めての街頭デモで、行く先も告げられず？みんなと行動を共にしたとのことです。昼間部には元気の良い池原さんらがいます。私は東京生まれですが、品川から京浜急行で行く地域は、まったくなじみのない方角です。いつも通う小田急線よりも狭い家の真近に迫ったようなところを電車が走っていきました。駅名を読みながら、指示がないかと耳を澄ませながら待機していました。「ピーッ」と笛が鳴り、「降りろーッ！」との指示がとびました。あわててみなホームに降りました。小さな駅のホームです。私たちが降りると列車はガラ空きで、残った少ない乗客が何事かとホームをしきりに眺めています。ホームの駅名を見ると「大森海岸」と書かれていました。ホームに立っていると、「飛び降りろーッ」の号令がどこからか。無賃下車です。ホームの背は簡単なコンクリートの柱が並び、そこに太い鉄棒が通してあります。これをまたいで、駅脇の道に飛び降りろという要求です。かなりの高さで、みな元気よく次々飛び降りるので、私たちも飛び降りました。

そこで1,000人を超える人々が集結して、緊急の集会です。「我々は決死の覚悟をもって羽田空港へ突入し、佐藤訪ベトを阻止する。我々こそがその使命をやりとげるのだ！」成島全学連副委員長が声を限りに演説しています。他の人の工事中ヘルメットではなく、成島さんだけオートバイ用のヘルメットです。どこから調達したのか、前方に角材が届きました。社学同ばかりか、社青同解放派ら全学連の反中核派連合が結集しているようです。どどどと、角材が地面の置かれると、先頭部隊が決まっていたのでしょう。早大の荒さんら、一人ずつ角材を握り、短いアジテーションが終わると、シュプレヒコールで景気付けながら旗棒を持った部隊に続いて角材部隊が続き、ジグザグデモで出発です。

私たちは救護看護班なので、友人たちは、貴重品を持ってくれと私たちに託してきます。救急箱もあり、それらを分担して荷物管理しつつ私たちは後方を歩くことにしました。デモ隊は1,0000

人～1, 200人だったといわれています。ぎゅーぎゅー詰めめの連結車両のほとんどがデモ隊だったのです。デモ隊は、角材か樫棒の前衛部隊100余人に続いて駅の広場から道路を渡り、デモでジグザグ進みます。そこまでは予想外の展開ながらいつもの調子で、私たちはデモの最後尾についていました。



すぐそこには鈴ヶ森ランプの高速道路に乗るインターチェンジの入口があります。その坂道の下までくると笛が鳴り「羽田へ突入するぞーッ！」「走れーッ！羽田はすぐそこだぞーッ！」と激がとんだのです。角材をもった連中は全速力で高速道路の坂を上りはじめました。デモ隊が続きます。置いていかれてはならじと、救護班は後に続きました。

私たちの役割は、取り残されては果たせないからです。新入生たちも私たちと一緒に走りました。身軽に棒一本持った連中や、何も持たずに走るデモ隊に対して、カバンや救急箱を抱えた10人ほどの私たちも走りました。たちまち引き離されながら息を切らせて高速道路に上がると、すでに佐藤訪ベトに向けて一般車両の通行を禁止していたらしく車は見当たりません。かわりに何十メートルおきくらいに見張りとして立っていたらしい機動隊員は、学生たちの急襲攻撃で殴られたり倒れたりしています。それらの機動隊員たちを踏まないように避けながら、デモ隊の後を追って疾走しました。

しばらく行っても「羽田はすぐそこだぞー！」という掛け声ばかりで、一向にそれらしい風景が見えません。たちまち引き離されながら、必死に追いかけます。走りに差が出て、部隊はいくつかに分かれて羽田へと向かっていたらしいのです。先頭集団を走っていた早稲田の荒さんらが、渋谷方面へと道を間違えたようだというのが聞こえました。出口を逆走すれば羽田に向かうのですが、入口をそのまま走ると、東京方面に向かってしまうようになっていたのをよく知らなかったのです。(のちに知ったとのこと)そのうち機動隊が羽田方面からと、大森方面から追いかけて、私たち百余名の集団を挟み撃ちにしようとします。

装甲車から降りてきて、殴られて孤立してぼう然としたり倒れたり休んでいる機動隊仲間を收容する部隊と、学生デモ隊を攻撃する部隊に分かれています。彼らは、学生たちを包囲し、警棒で乱打し、蹴ったり激しい暴力をふるっているのが見え、だんだんこちらに近づいてきます。高速のインターチェンジの少し低いところで、「あっ！」という間に2, 3人の学生が追い詰められて、飛び降りました。「あっ！今落とされたんだ！ひどい！」。見ていた仲間が悲鳴をあげました。下を見ると倒れたままです。生きているのだろうか心配です。機動隊は仲間の復讐に燃えて、容赦ない暴力ふるい、血まみれの学生たちが、頭や顔から血を流してうずくまり、血の臭いが充満しています。

機動隊は次々と殴りながら、何故か逮捕せず蹴散らす方針らしいのです。私たちの番です。ひとかたまりに私たちは身を守り、包囲を縮めてくるので、身動きが取れません。小隊長らしい男の指揮で殴りかかってきました。私たちは「救護班」の腕章を巻いているし、荷物を抱えているので一目瞭然のはずなのですが、警棒で殴りかかってきました。「見ればわかるでしょ！救護班に何

する！」「女に何するんだ！」と私たちは口々にわめきました。私も頭は殴られなかったですが、肩や背、腕をしたたか警棒で殴られました。あとで見たら腕には青アザが出来ていました。みな口々に抗議しつつ、頭から流血している仲間を護るように立って対峙しました。

そこに首都高速道路公団のマイクロバスが通りました。ちょうど羽田方面から大森方面に向かって走っていくようだったので「運転手さん！助けて下さい。怪我人がいます！」私は道路に飛び出して車の前の方に走り寄りました。運転手はきつと、ずっと先から学生たちが殴られ蹴られ、小突き回され血を流してうずくまるのを憤りの思いで見ながら走ってきたに違いありません。うなずくと、運転手はすぐ車を止めて、降り、ドアを開けて、数人の近くにいた血だらけの学生を車に運び入れるのを手伝ってくれました。機動隊に聞こえるように「ひでえことをするなあ」と大きな声で言いながら、どこに行けばいいのか？と私に聞きました。機動隊員たちは指揮者の号令で、羽田方面へと去って行こうとしています。私は運転手に「この近くに個人病院はありませんか？大きい病院だと警察に通報されたりすると困るんです。お金は私が御茶ノ水の大学までもどって持ってくるので、即金で払いますから」と言いました。「よし、わかった」と言って車をスタートさせました。

私は、一緒にいた他の現思研の仲間には気がまわらず、怪我人で頭がいっぱいで、みんなと別れて私は車に乗り込みました。私たちの乗った公団の車は、鈴ヶ森ランプから普通道に出て、道からちょっと奥まったところにあった個人病院に連れていってくれました。私は病院に飛び込んで「おねがいます」と呼びました。年輩のやせた院長が出てきました。私は「デモで怪我した人がいるので治療してほしいのです。今、手元にあるお金をまず払います。これから、私が御茶ノ水にある大学にとんぼ返りして治療費を持ってきますから、こちらの怪我人を助けて下さい。警察には知られたくないんです。私自身もこの怪我をした人たちの名前も知りませんし、聞くつもりもありませんから。とにかく私が責任を持ちますから助けて下さい」と院長に訴えました。

道路公団の運転手は、怪我人を運ぶのを手伝ってくれた上に、自分のポケットをさぐって、有り金を差し出し「これ治療費に使って下さい。学生さんたち、がんばれよ！」と言って行こうとしました。「あっ、すみません。名前教えてください。あとでお金返したいので」と言うと、笑いながら「いや、いいから。一市民ということでそれでいいでしょ」と言うと、院長にお願いしますと言って出て行きました。院長は怪我人の傷をざっと見ながら「まあ若いんだから大丈夫だろう」と言いながら引き受けてくれたので、私はすぐにタクシーに飛び乗って御茶ノ水へと向かいました。そして、お金を調達すると、また、タクシーに飛び乗って医院へと、とって返しました。

この時、大森に戻るタクシーの中で、運転手から「今、ラジオで聞いたんだけど、学生がデモで殺されたらしい」と教えられました。えっ?!と息を呑み、ラジオのニュースを聴きました。私にとっては羽田近辺はなじみのない場所で、橋の名前をいわれてもわかりません。でも、鈴ヶ森ランプから羽田方面に向かい、押し返されたデモ隊が、橋の上で攻防を繰り返しているらしいことがわかりました。当初は私も羽田空港に通じる3つの橋の位置関係や橋の名前も、また、殺された学生というのがどのグループに属するかもわかりませんでした。

そこに社学同の仲間がいるのかもわかりません。とにかく大森の個人病院に戻って精算しました。治療した4、5人の学生たちは、どこの大学の人か聞きませんでした。必要な人には電車賃を渡して別れました。その後、現思研や社学同の仲間と合流すべく、そこから歩いて行こうとしても、機動隊の通行止で方向もはっきりしません。現思研の仲間たちもどこかで闘っているはずですが。

この日は、機動隊に追いかけられる学生たちを羽田周辺の住民たちがあちこちで助け、分散、蹴散らされながらも学生たちはみな萩中公園の方に集まって行ったようです。



私は何人かの仲間に会い、御茶ノ水の学生会館に戻りました。夜、萩中公園で追悼集会が開かれ、それに参加してきた仲間も戻りました。

仲間の話や報道から、殺されたのは京大1年生の山崎博昭さんで、中核派が中心に攻防しつつ羽田へと突破を試みた弁天橋で殺されたことがわかりました。現思研の仲間たちは、突撃隊やデモ隊で加わった者もあり、防衛戦を突破して、鈴ヶ森から穴守橋をはさんで攻防を繰り広げたとのこと。穴守橋を渡ると羽田空港です。

中核派は、社学同や解放派が萩中公園集会前に突撃隊を率いて、鈴ヶ森ランプをから羽田突入を図ったと、ブントの成島副委員長の誇らしげな発言を聞いたので、集会を早々に引き上げ、突撃体制に入ったと、政経学部の中核派の友人が語っていました。前日の中核派によるリンチ事件から、全学連統一行動が分裂した結果でもありますが、穴守橋では、社学同や解放派、反戦青年委員会、中核派は弁天橋、革マル派は稲森橋をはさんで、羽田空港突入攻防を繰り返したのです。

弁天橋では、橋の真中の障害物として置かれた装甲車に、車のキーが付いたままに置かれており、学生が運転して警備車を押し戻しました。そしてそこに出来たわずかなすき間から抜けて前に進もうとする学生たちを、機動隊は警棒メッタ打ちにし、学生も投石と角材で対抗しつつ、警備車を倒して道を広げようと、ワイヤーや丸太などで激しくわたりあったそうです。すき間から一番早く向こう側に到達した一団に山崎博昭さんがいて、無差別の警棒の乱打に虐殺されたのです。(それらは、50年後に「10・8山崎博昭プロジェクト」によって当時の公判、証言、資料の科学的真相再究明の結果を本の中で明らかにしています。すでに当時から主張していた内容を再検証したもので、警察の「学生が運転して轢き殺した」というデマがつくられたが、矛盾をきたして、結局通用しなかったという事実なども明らかにしています。)

また、ちょうど昼ごろには、山崎さんの死が穴守橋にも伝わり、佐藤首相の飛行機がベトナムへと飛び立ったこともあって、弁天橋に向かう者も多かったようです。川に落とされ、ズブ濡れの人や、怪我人が多数いましたが、弁天橋のたもとでは、山崎さんに連帯して「同志は倒れぬ」を歌い、1分間の黙祷をしたとのこと。革共同の北小路さんが車の上に乗って「機動隊もヘルメットをとって黙祷しろ！」と糾したが、機動隊はリンチを止めなかったと話していました。攻防を経て、萩中公園で夜遅くまで虐殺抗議集会が続きました。

この日のことを「戦旗」(ブント機関紙)は次のように記しています。「装甲車を先頭に学生はジリジリと橋の上を前進した。装甲車の前に近づき進み、橋を渡ろうとした。その時、これを見た機動隊は、学生の群れに襲いかかった。逃げ場を失った学生が次々と川に飛び込んだ。残っている学生に向かって警棒を振りかざした機動隊が狂犬のように襲いかかり、メッタ打ちにする。このメッタ打ちされた学生の中に山崎博昭君がいたのだ。学生の装甲車はやむをえず後退し、橋から引き

上げた。山崎君はこの機動隊の突進、警棒の乱打の中で虐殺された。」(「羽田闘争10・8→11・12と共産主義者同盟」より)

10. 10・8羽田闘争の衝撃

この日、共に闘った一人の学生が殺されたことは、大きな衝撃となりました。「命を賭けなければ、もはや闘えない時代なんだなあ…」社学同の昼間部の友人が、現思研の部屋に来てため息をついてそう言いました。理屈抜きに、もう後には引けない新しい段階へと闘いが転じたのを、誰も実感していました。「学校の先生になる者たちこそ、こういう闘いの中で日本社会の変革の担い手になるべきだ」私たちの友人たち、教育研究部の人々も、下級生も元気がいい。私もまた、みんなの憤怒を聴きながら、もう詩を書いてはいられないな、もう書くのはやめよう…としました。これまでは自分の中で、政治では言葉にできない情念や憤怒を詩に結晶させようとしてつつ、カタルシスのように書いていたような気がするのです。10・8闘争による闘いの気分は、そんな私のあり方を問うていたのだととらえたのです。詩にではなく、本当に社会を変えるために情熱を捧げよう、そんな風に思いました。そして、新しい社会参加への関わりを模索しました。

その第一は、何よりも、来年には卒論を仕上げ、教育実習も終え、先生の職業に就いて、社会変革の多くの担い手の一人として生きること、そこに私自身の生きがいがあると確かな思いを持ちました。家に戻って、10・8闘争のことを父に話しました。学生が殺されたこと、それほど激しい弾圧で数えきれない負傷者が出たこと、住民が学生たちをかくまったこと、首都高速道路公団の運転手が怪我人を個人医院に運ぶのを手伝ってくれて、持っていた現金を差し出してきて、名前も名のらずに去ったこと…。テレビでは学生の暴徒化と、もっぱら、公安側の情報報道を流しているけれど、現実には過剰警備が殺人に至ったことなど話しながら「私、先生になっても社会活動はずっと続ける」そんな話をしました。この時、父は、自分も若い時、民族運動に参加したことを話してくれました。父の親類らの話から小耳にはさんで、昔父が何か「大それたこと」に関わったらしいことを、子供時代に聞き耳をたてて知ったこともありましたが、父からくわしく聴くのは初めてでした。

子供時代から私たちは、父と、どう生きるべきかとか、人間の価値や正義、どちらかといえば天下国家を語り合う家族でした。博識の父を子供たちは、いつも質問攻めにしたものです。財政的に商売は武士の商法でうまくいかず、貧しかったけれど、父の知識を社会への窓口として、私たち兄弟は豊かな子供時代を過ごしました。父は子供たちを大学に行かせる財力がなかったせいもありますが、働くことを奨励し、社会から学ぶことを大切にしていました。自分が「知識人」的な生活を体験した結果かもしれません。私が働きながら大学に行く手立てを見つけて、入学を決めたあとに父に話すと、父は大変喜んでくれました。

でも、父はいつもの静かな口調で「房子、『物知り』にだけはなるな。物知りだと思った時から人間が駄目になる」と言ったものです。子供時代から金の多寡(たか)で人間の価値をみる軽薄な人間になるな、と教えた父。その父がこの日語ったのは、若い時の自分の民族運動の時代と友情、そこで志を共にした人々が捕まり、刑を科されたこと、中学時代の親友池袋や、四元、血盟団の井上日召の話などです。美しい日本が、資本主義の金の支配によって、人々の暮らしはたちゆかなくなり、餓死や飢えが広がり、娘を売らざるをえない農民たちがいる。その一方で、財界、資本家、政治家や官僚たちは国民を犠牲に、利権と権力を謳歌しているとは何事ぞ！と若者たちは憤

り起ちあがったといひます。父も井上日召らの呼びかけに、池袋と共に加わったということです。そんな話を私は、10・8闘争の夜に聴きました。そうか、そういう風に父も生きてきたのか。子供時代に朝鮮戦争がはじまり、朝鮮人排斥の中で、父だけそうしなかったこと、近所の馬事公苑へと「天皇の車がお通りになる」というおふれに、近所の人々が道路に並び、頭を下げているのに、父は決してそういうことをしなかったこと・・・など、他の日本人の人々と反応の違う父の姿を思い出しながら、そんな父を誇りに思っていた小さい頃の自分をも思い出していました。それ以来、これまでよりも、もっと話し合う親子になったと思います。活動のために、会う機会は減っていましたが、どこにいても、のちにアラブに行った後も、父はずっと私の理解者でした。

10・8闘争はまた、チェ・ゲバラのボリビアでの戦死と重なりました。世界では、民族解放、革命のために命をかけて闘っている、チェ・ゲバラの「二つ三つ、更に多くのベトナムを！それが合言葉だ！」の呼びかけ、さらには、連帯はローマの剣士と観客の関係であってはならないというチェの言葉は、私たちにベトナム反戦から国際主義精神に基づく革命を実現する道をさし示していました。「たとえ、どんな場所で死がわれわれを襲おうとも、われわれの闘いの叫びが誰かの耳に届き、誰かの手が倒れたわれわれの武器を取り、誰かが前進して機関銃の連続する発射音の中で、葬送の歌を口ずさみ、新たな闘いと勝利の雄叫びをあげるなら、それでよい」とチェ自身が語ったような死に方だったのです。

また、チェはこうも言いました。「我々のことを夢想家というなら、何回でもイエスと答えよう」と。チェの闘いと死。世界の若者たちを共感させ、心をつなげた人が死んだことは、私には大きな衝撃でした。自分のことは後回しだ・・・求められた時は、私はいつでも応えられる私でありたい！チェ・ゲバラの戦死に、また、山崎さんの死に、私は一歩踏み出したのです。それは心情的レベルにすぎなかったかもしれません。

全学連もまた、10・8羽田闘争を教訓として、死を覚悟した闘いの時代だととらえました。そして、それを乗り越えて闘う決死隊、先鋭部隊を先頭とする街頭戦のスタイルが、10・8以降、新しい闘いのスタイルとなりました。決死隊はヘルメットをかぶり角材などで武装し、警察の警備の過剰な攻撃に対処する先鋭化へと向かっていきます。権力側は、公安情報によってマスメディアを誘導し、山崎さん虐殺を「学生の運転した車が学生をひいた」というキャンペーンを張り、闘いの中で警察の警棒の乱打によって虐殺されたことを認めようとしませんでした。

10月17日の、山崎君追悼日比谷野音集会には、党派を越えた6,000余人の労働者、学生が、



一万人が参列した中央葬会場。正面は故山崎博昭君遺影。

山崎さんを追悼しました。全学連委員長の秋山勝行さんは、この集会で「全学連は必ずや、この死に報い、この虐殺の本当の張本人を摘発し、粉碎するまで闘い抜く。時が経つにつれて、羽田の正義者は誰であり、犯罪者がどちらの側であったかが、ますます明瞭になった。全学連の死闘こそ、佐藤首相の南ベトナム訪問を最も真剣に受け止め、くい止めようとした力であり、日本人民が当然やらなければならないことを、もっとも忠実に実行した」と語っています。今からとらえれば、この10・8闘争を契機に、党派はこれまで以上に運動の先鋭化と非妥

協性にもっとも価値を置く闘い方に進んでいくのです。私も、広範な運動や合法的なさまざまな多様な活動を軽視し、それよりもラジカルであることが、もっとも使命を実践していると思うようになりました。

全学連は、10・8闘争から11月12日の佐藤訪米阻止闘争へと引き続く闘いを準備しました。10・8闘争で死者が出たことで、この日は決死隊として死を覚悟する者たちも多かったのです。社学同のデモ指揮にたった早大の村田さんは、オートバイのヘルメットをかぶり、いつものしゃがれ声を嗶らして死をいとわぬ闘いの指揮をとると、アジテーションで絶叫していました。第二次羽田闘争という位置づけで、全学連は、先頭に角材による「武装部隊」をすえて、3,000人の全学連・反戦青年委員会が闘いました。しかし、武装力を強化したのは、学生より機動隊の方でした。この日かその後から新しく等身大の大きさのジュラルミンの盾で防衛する態勢をとりながら、催涙弾を100発近くデモ隊に撃ち込んで、前進をはばみました。この日は大鳥居駅付近が、まるで戦場のようになりました。

10・8闘争の時もそうでしたが、マスコミが学生を暴徒と悪宣伝していましたが、羽田付近の住民たちは違いました。機動隊に追い立てられて路地に逃げ込む学生たちをかくまい、負傷した学生たちを手当してくれます。「あんたたちは、一銭の得にもならないのによく闘っている」と感謝されたという仲間もいました。私自身の10・8の時の経験でも、正義と信じて自らをかえりみず闘う学生たちに、住民たちは大変好意的でした。こうした高揚は、米欧各国でも同じようがありました。ベトナム反戦運動は、国際的な各地の若者たちをかりたて、チェ・ゲバラに共感し、一つの大きな力に育っていました。10・8闘争を経て、闘いの質はよりラジカルとなり、また、より多くの大学、高校でベトナム反戦の闘いばかりか、授業料の値上げや大学自治、管理運営などで、当局との闘

いますます広がっていったのです。67年の新しい闘い方は、68年を更にラジカルに高揚させていきました。

No 526 重信房子 「1960年代と私」 第二部第5回 2019年9月

第2章 国際連帯する学生運動

1.高揚する街頭行動と全学連

10・8 羽田闘争に続く第二次羽田闘争と合わせて、一連のこの「羽田闘争」で学生の検挙者は当時の明大新聞によると491人にのぼったと記録されています。負傷者は、学生、警察官、一般人を合わせて、消防庁調べで414人とのことです。



学生たちは、私がそうしたように、負傷者を自分たちで病院や医学連などで治療してもらう措置を取ったので、実際の学生の負傷者は更に多かったはずで、この時、水戸巖・喜世子夫妻が救援活動に乗り出して、各病院の支払いに奔走され、また弁護士に頼んで逮捕者を支援したりし、その後の救援連絡センターを設立していく土台を築いています。

政府側も弾圧を強め、当時としては初めて「凶器準備集合罪」を学生たちのデモに適用しました。更に、

公安調査庁を中心にして三派全学連に対する破防法の団体規制を検討し始めました。そして、逮捕された学生の主な国立・公立・私立の大学の学長を58人招いて、事後措置を含めて協議する事を決めました。警視庁も、10・8闘争後、11月には明治大学、中央大学、法政大学、早稲田大学の各学長、総長に対して、佐藤訪米前後の学生会館への学生の宿泊を禁止するよう申し入れたりしました。数々のこうした脅しや弾圧措置に対し、全学連は更に徹底抗戦を宣言していました。第一次羽田闘争後、第二次羽田闘争への予防弾圧として10月には、中央大学など含め、学生会館や自治会への機動隊の導入が行われたりしました。学生自治会側は、学生会館運営委員会と協力して、抗議の対抗措置として、泊まり込みを正当化する方法として「深夜映画祭」を行ったりしていました。ベトナム反戦の反体制運動の中で生まれている多様な戦い方を文化的にも表現し、若松孝二や寺山修司、赤瀬川原平らの映画、演劇、アートなどの文化・芸術に影響を受け、また影響を与え始めていた頃です。これらは、日本共産党の文化活動と違った形で、表現を作り出し、学生たちも共感していきました。



私も、中央大学であった若松孝二監督の「オールナイト映画祭」を現思研仲間の遠山さんらと、覗いた事があります。「壁の中の秘め事」か「情事の履歴書」というタイトルだったか…。

映画の微妙なセックス場面になると、「映倫カット」で、その部分のフィルムの上映不許可になります。若松映画は、「映倫カット」のその部分をそのまま空白で上映していました。あつと言う所で映倫マーク入りの空白になるので、学生

たちは「ナンセンス！」と大声を挙げて楽しんでいました。私は遠山さんらを誘って、既に始まっ

ていた真っ暗な教室に入ったのですが、その「ナンセンス！」が楽しくて一緒になって遠山さんと「ナンセンス！」と声を張上げて笑ったりしていました。途中でフィルムが切れたかで、中断になり、教室に電気がパッと灯されました。ぎっしり学生たちが居ましたが、なんとそこには女性は、私と遠山さんしか居ませんでした。先程大声で騒いでいたのは、私たちだという事は一目瞭然で、バツが悪く、慌てて暗幕を潜って外に出ました。2人で道路で思い切り笑い出していました。今もまざまざと、遠山さんの笑い声、笑い顔と共に思い出します。

67年の10・8羽田闘争の頃だったと思いますが、三里塚で測量が行われというニュースが入ってきました。成田国際空港建設の閣議決定が1966年7月4日になされ、67年秋から測量が始まったのです。

決定に反対して既に結成されていた「三里塚反対同盟」(三里塚芝山連合空港反対同盟)の中で青年行動隊隊長の島寛征さんは、中央大学の学生だったようで、早くから中央大学のブントの仲間に相談、協力を求めたようです。中央大学も、それを聞いた明治大学も、社学同の仲間たちは、国際空港建設に反対する農民たちの戦いの支援に早く取り組むべきだと訴えてきました。10.8羽田闘争後、測量開始を受けて、全学連の三里塚への戦いの取り組みも始まります。

67年10・21国際反戦デーは、国際的にベトナム人民と呼応した統一行動が世界各地で行われています。米国では徴兵制に反対し、徴兵カードを焼くなど闘いは全米に広がり、ワシントンで20万人のデモが行進し、ペンタゴン(国防総省)突入のデモに、ペンタゴンが休業に追い込まれています。欧州でも数万のデモが各首都を埋め、日本でも国鉄労働者が10月20日に「米軍用タンク車輸送阻止」の闘いで10・21闘争に呼応しています。反戦意識は広く世論を形成していました。そうした中で、政府は11月2日、原子力空母エンタープライズの日本寄港を承認し、それを11月12日の佐藤首相の訪米土産とする事にしました。

この原子力空母の受け入れは、憲法違反であり、政府野党、全学連、学生たちは憤り、「原子力空母の寄港阻止闘争」が火急の課題として日程にのぼりました。既に述べたように、チェ・ゲバラの戦死、山崎博昭さんの虐殺を受け止め、更に反戦闘争を求めて街頭へと参加する学生たちは増えていました。ラジカルな党派色の強い全学連に加えて、党派のセクト主義的な競合や一般学生を見下し、指導しようとする在り方を嫌うノンセクトラディカルの学生が、市民たちの自発的な参加の場として、ベ平連(65年4月24日ベトナムに平和を!市民文化団体連合結成。66年10月16日ベトナムに平和を!市民連合に改称)が各地、各職場、各大学、高校にも生まれ育ち、戦いの裾野は広がり続けました。



(由比忠之進さん)

ちょうど、67年11月11日、エスペランティストの由比忠之進さんが首相官邸前でベトナム戦争に抗議し、焼身自殺をしました。また、佐藤首相訪米のタイミングを狙ったように、ベ平連事務局は、「横須賀入港の米空母イントレピット号から、米国のベトナム戦争に反対して4人の水兵が

脱走した」と発表しました。ベ平連は、脱走兵たちを匿い、密かに4人を安全に北欧のスウェーデ

ンに亡命させる事に成功し、それを踏まえて、4人の水兵の声明を発表したのです。

「われわれが軍隊を脱走するという行動を公表すると決めたのは、それによって他のすべての国の人々が、この戦争を止めさせる行動に立ち上がることを願ってのことである」と、その公表の意図を声明で述べました。テレビでは、脱走した4人が、日本人の様々な人々に支えられて潜伏生活を過ごしている様子も、小田 実ベ平連代表の発言と共に映像でも伝えられました。



(小田実氏と脱走兵)

この快挙は、私たちには大きな衝撃でした。常々、党派が草刈り場のように見下していたノンセクトラディカルのベ平連の戦い方に感激したためです。「こうした戦い方があるのだ！」と、非暴力政治戦の鮮やかな戦い方を示したからです。また、同時にこんな事を公

表したら、米・日権力は、搦め手から襲いかかって来るのに。ベ平連も、米兵も大丈夫なのだろうか・・・と、心配になりました。

現思研の仲間たちと、「すごい時代だね。国際主義って、これでしょうね」「全学連のやり方では、一本調子で、次々と弾圧が正当化されてやられてしまいそう。脱走兵を助けてるとか、もっと見えない所で貢献した方が、ベトナム反戦としては有効ではないか？」「いや、弾圧に抗して街頭行動をくり広げる事こそ、ベ平連の人たちの脱走兵支援も支える事になるんじゃないか」などと、学生会館4階の部屋で語り合ったものです。チェ・ゲバラの死、米軍の脱走兵、エンタープライズが来る。私たちの小さな学生運動は、世界の流れに直結している時代を実感していました。

この頃の67年12月の学生大会で、私は現思研の仲間の宮下幸子さんに、私の担当していた学苑会中執(中央執行委員会)の財政部長を引き継いでもらいました。

私は、生協(生活協同組合)理事、現思研活動、それに卒論(卒業論文)に集中しながら、アルバイトを続けられる体制へと転換しました。

エンタープライズの寄港を政府が認めてからすぐ、全学連は11月17.18日に、全学連大会を開きました。1日目は法政大学、2日目は板橋区民会館に約1000人の学生が参加しました。秋山勝行委員長が基調報告をし「エンタープライズ寄港阻止闘争を第三次羽田闘争として戦い抜く」ことが、満場一致で可決されています。そして、新年68年1月6日に全学連の総決起集会を行う事を宣言しました。

ブント社学同は、秋山中核派委員長に批判的でしたが、それが執行部間の各党派の対立であり、また、戦闘に向けた動員競争のように続いていました。その分、東京のブントの拠点校である明治大学、中央大学は、最先頭で戦う事が要求されていたようです。昼間部の社学同は「2・2協定」のしこりや、学費闘争を指導した学生たちの退学処分を受けた後、11月9日に学生会中執によって選出された米田隆介さんが委員長になりました。新しい学生会は、「2・2協定」の「汚名挽回」とばかり「原潜空母エンタープライズ寄港阻止闘争」に向けて、張り切ってはつらつしています。

この頃12月頃か、ブントの総決起集会が学生会館5階のホールで行われました。

そこで、ブント内で、統一派(斉藤克彦一派)に続いて、今度は一緒にブントを作ってきたマル戦派(マルクス主義戦線派)と、ブント中央派との論争が既に始まっていたようです。その頃、マル戦派の主張する「危機論」はナンセンスなのだと、現思研にも山下浩志さんがレクチャーしてくれた事

があります。また、早稲田大学の村田能則さんや荒岳介さんらも、マル戦派の路線批判を繰り返していました。危機論だ、段階論だとか言うけれど、ブント機関紙「戦旗」自身の理論も大仰な空論と見て、現実とかけ離れていると感じる私同様の現思研の皆も「大した違いじゃないし、どうって事無いのに、こだわるなあ」といったレベルです。要は、自分たちの所属する党派の文献も信じていないというか、あまりに空論的について行けないといった所です。ロシア革命だ、ボリシェヴィキ綱領だ、ゴータ綱領だ、エルフルト綱領と学習会はやるのですが、「欲しいのは、よその国では無く、ブント綱領で、世界一国日本綱領をどう文章にしたのか？見た事が無い」といった不平を言うくらいでした。

68年の新年を迎えると、社会党・共産党などの革新政党が1月19日、佐世保港入港予定のエンタープライズの入港絶対反対を掲げて、現地と東京に於ける抗議集会を決定しました。

全学連もまた、その現地と東京における抗議集会参加を決定しました。そして、新年1月6日総決起集会を行うと宣言しました。それを受けて明治大学和泉校舎では「エンブラ寄港阻止・ベトナム戦争反対」のシット・イン(座り込み)が行われ、集会も開かれています。そして、全学連第一波行動として、神田、駿河台、和泉、生田地区の明治大学校舎から、1月12日清水谷公園へ向かいました。16・17日には「同盟登校」を行い、日比谷野外音楽堂の「1・17 エンタープライズ寄港阻止・ベトナム反戦青年学生総決起集会」に参加しました。私たち現思研も、この日比谷集会に参加し、18日の社会党・共産党との統一集会にも参加しました。



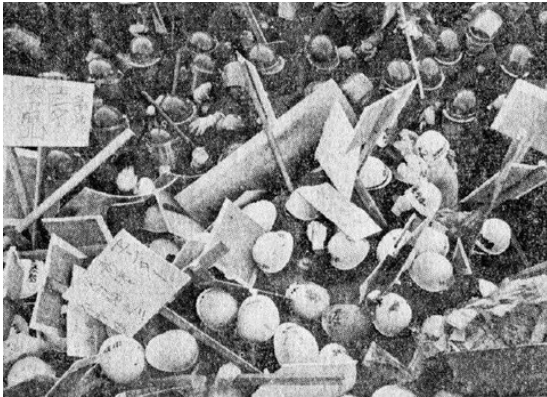
(1・17集会)

ブントは、中核派の現地闘争方針に対し、関西を中心に現地闘争に集結させ、東京の社学同は、首相官邸などの東京での抗議集会やデモを中心に活動しました。ブントは、中核派の現地闘争主義を一面的として批判し、「中央権力闘争」を常に主張していました。

同じ頃、中央大学は授業料値上げ反対闘争をめぐって、「全自」と呼ばれる学生大会や自治会選挙で、民青も、右翼も暴力的に介入する闘いが続いていました。外部の右翼が、中央大学の学生会館前の小さな祠(ほこら)の一角に陣取って危険な動きをするのを、明治大学社学同らが、中央大学支援でレポ体制を取り、私も年寄りの右翼たちが楯棒を隠し持ち、地図を広げて襲撃計画をやっているのを見張ったりしていました。友人の中央大学の前田佑一さんは、右翼に後頭部をぱっさり刀で切られ倒れた事もありました。中央大学の授業料(値上げ)白紙撤回を求める戦いは、学生たちの意志に沿った中央大学社学同指導部によって、勝利へと、後に2月に導かれます。

68年エンタープライズ寄港阻止の現地闘争は、激しい弾圧にさらされました。

(1・15飯田橋)



1月15日には、東京では現地闘争に向かう200余名の中核派の学生が法政大学を出て、飯田橋駅に向かう所、400余名の機動隊に阻止包囲され衝突を余儀なくされたのです。そこで、131名という大量の学生が検挙されました。それでも、学生たちは、更に九州へと向かう決意は変えませんでした。逮捕を免れた70人ほどは、急行に乗って佐世保へと向かいました。

関西から現地に向かった社学同の仲間たちも、九州の待ち伏せ弾圧攻撃にさらされました。全学連の予定

していた九州大学における集会に対して、警察の圧力もあり、九州大学当局は「不法占拠」や「暴力行為」を許さないと告示警告しました。

16日朝には、中核派やブントを中心とする学生約400人は、各地から博多駅に到着したのですが、未明から改札口や構内に待機していた1300人を超える機動隊が包囲したために、そこで衝突となりました。機動隊は、制圧して学生をサンドイッチ状態にした上で、強制的に身体捜検を行い、何人ものリーダーを狙いうちに拘束しました。

その後、彼ら学生たちは、九州大学へと向かいました。当初、九州大学教養学部では、職員等も500人がピケを張り、学生の入場を断るために正門に待機していたそうです。到着したデモ隊に対し、九州大学を包囲した機動隊は「学生らが、実力行使して構内に入った場合、侵入罪で検挙する」と警告したようです。しかし、博多駅に続く過剰な弾圧に抗議して、実力で入ろうと学生たちは決意していました。結局、九州大学教養学部長が、この衝突を憂慮して、自発的に正門を開けたために、その混乱は避けられ、全学連集会を整然と行う事が出来たのです。



(全学連集会)

正門前には機動隊が配備され、包囲の中で全学連の総決起集会が行われました。ブント・社学同機関紙「戦旗」1月25日号によると、以下のように記されています。

「16日博多駅で全学連の“令状なき強制身体検査”4人検挙。全学連九大で総決起集会。17日平瀬橋で第一回の激突、27名検挙。佐世保で反戦主催全国統一行動(1千5百名)、公明党現地抗議集会(5千名。筆者注:この時期、公明党も創価学会も「日米安保反対」でした。)、東京地区反戦に1万

名の大結集。18日実行委共催『佐世保大集会』4万5千名。全学連も参加。全学連、佐世保橋で2回目の激突。座り込み。東京では、全学連、外務省内で座り込み検挙89名。20日、東京で反戦全学連集会。アメリカ大使館デモ5千人」など、連日の反戦行動が続いていた事が示されています。

このように、10・8羽田闘争を契機に、これまでの攻防の質が大きく変わったのです。権力側もこれまでは、学生側のデモ指揮者の数名を検挙するやり方だったのが、大量逮捕に変わりました。

佐世保では、あまりに凄まじい弾圧、非武装のデモに対し、楯や警棒で襲いかかる様子が、テレビで全国に放映されました。このテレビで、現地の住民が学生を支持している事も、明らかになり、あまりの過剰警備弾圧に、各地、各界から批判が起こりました。現地では、住民の警察批判と学生たちの勇気を讃えるばかりか、追われるデモの学生たちを匿ったり、カンパを差し出しました。全国的にもテレビの報道映像で、学生たちへの同情が広がりました。博多駅前で、カンパ活動を行うと、ヘルメットにたちまち何万円ものカンパが集まったと、戻ってきた仲間も話していました。後に、学苑会やML派の仲間も現地闘争に参加して負傷した事も知りました。原子力空母エンタープライズは、19日から23日まで佐世保に寄港し、その間一週間にわたる現地闘争が続いたのです。そして、首都東京でも、現地に呼応し、集会・デモが続きました。

学生たちは、大学を拠点として学生たちに呼びかけながら、これまで以上に、デモや集会の参加者を増やして行きました。10・8 羽田闘争の新しい戦い方、デモの先頭に角材を持った防衛部隊の登場は、激しい弾圧に抗する手段として常態化して行きました。

ベトナム侵略に抗議とエンタープライズ寄港を阻止しようとラディカルに戦った数千の学生・市民の行動は、広く共感を育て、それが新しい歌や文化や演劇を刺激していきました。「ベ平連」ら、ベトナム反戦を求める自発的な集まりは、更に各地に広がりました。ベ平連の自発的なこうした戦い方と文化が、後の全共闘運動の流れに下地になっていったと思います。

こうしたベ平連の自発的流れは、縛りも無く、ルーズで気の合う者が集まり、文化的、創造的に自分たちのやりたい方法で戦っていました。実は現思研の実態は、ブント愛は強い分、ブントを標榜しつつ、このベ平連的かつコンミュニ的だったようなと思います。党派の指導部から見たら、ベ平連的な人々の行動は、「市民主義」だったかも知れないし、また「党派嫌のノンセクト主義」に見えていたかも知れません。その点では現思研は党派的でしたが、私自身は身の丈に合ったこうした闘い方に好感を持っていました。党派の指導部こそ、こうしたベ平連の在り方から学ぶべきだったとつくづく思い返します。明治大学のように、社学同がいわば「全一支配」と言われた昼間部では、ベ平連は大きくなったとは聞かなかつたし、また私たち二部でも「ベ平連」はほとんど見かけませんでした。

気軽に表現出来る場として、自治会や党派が68年には、希望のイメージとしてまだ、佐世保に示されたように住民、市民の共感を得ていたせいでもあったと思います。ちょうどエンタープライズ反対闘争が一段落した頃、「2・2協定」から一年経た68年2月6日、中央大学の学費値上げの白紙撤回を理事会は表明します。学費闘争で当局としっかり向き合い、明治大学の「2・2協定」を教訓として民主的な学生自治を最大限活用し、勝利した事を自分たちの事のように明治大学でも皆喜びました。

エンタープライズ反対闘争後、三里塚現地闘争、王子米軍野戦病院反対闘争と、全学連による戦いは、益々、力を誇示して行きました。

ブントは・社学同内部で、マルクス主義戦線派(マル戦派)との党内闘争から69年3月～4月に分裂していったのも、この時代らしいのですが、私自身は、ブント内の色合いの違いには興味も無かったせいか、知りませんでした。資料によれば、68年3月共産主義者同盟第7回大会や社学同全国大会で、マル戦派追放を決めています。このマル戦派との路線政策の対立から、10・8 羽田闘争でブントの指揮を執った成島忠夫全学連副委員長らを追放してしまったようです。後にマル戦

派と分かれたという話を聞きましたが、私自身まわりにマル戦派の人も居ず、関心角度につながっていませんでした。

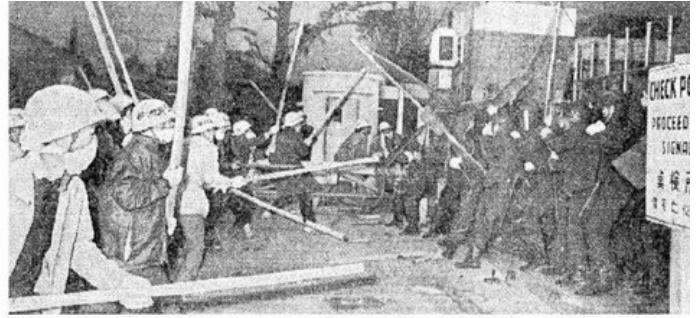
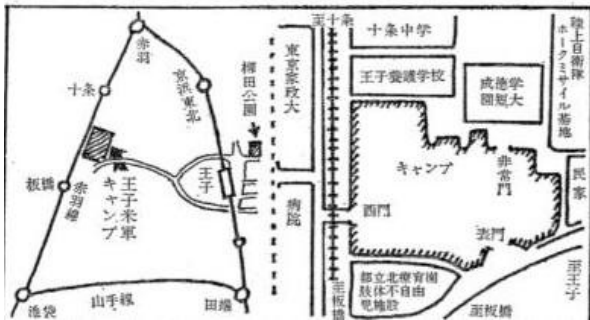
最近になって、旧ブント時代の友人が、当時明治大学学生会館5階ホールの総決起集会か何かが終わった後、エレベーターの所で成島さんが学対(ブント学生対策部)の塩見さんの指揮で、早稲田大学の村田さんら社学同の連中から殴られているのを目撃し衝撃を受け、まったく理解出来ず、こんな中核派のような暴力を使うのは、ブントらしくないと思ったと言っていました。このマル戦派に対する塩見さんの発想によるブントへの暴力の持ち込みが、後の赤軍派に到る「7・6事件」に継承されたのでしょうか。

現思研もエンタープライズ寄港阻止闘争から68年の街頭闘争に加わりました。その後の王子米軍野戦病院開設阻止闘争、三里塚闘争へと、全学連の戦いは大きなうねりとなって続きます。佐世保の戦いで、機動隊の弾圧の激しさに学生が流血に晒され政府批判となったテレビ映像を教訓として、政府は以降、学生が暴れる姿をまず広報して、その上で、防衛上仕方なく機動隊が規制するという映像となるよう、プロパガンダを意識した行動を取るようにしたようです。その一方、68年3月には、三派全学連への破防法適用検討を閣議決定したと発表しています。現思研は、仕事のある者は仕事やアルバイトに行き、仕事の無い者は社学同の隊列に加わって、連日デモや集会に参加しました。



中核派は白、ブントは赤、解放派は水色、ML派は赤にモヒカンの白抜きといったように、それぞれの隊列をヘルメットで統一カラーにして街頭戦を行うようになりました。これは、67年 10・8 羽田闘争以降の第二次羽田闘争から、ぼちぼち始まり、エンタープライズ反対闘争では、白ヘルメットとブントの赤ヘルメットは、既に登場していたと思います。赤いヘルメットは、売っていなかったもので、ラッカーを塗ったり、スプレーを吹き付けて一つ一つ作っていました。私も3月のその頃は、戦いの中にいました。まだデモ隊の全員がヘルメットを被る訳では無く、先頭の部隊に編制される男性

のヘルメット姿が常態化し始めたばかりで、私自身はヘルメットを被った経験は以降もありません。



68年3月8日、王子米軍野戦病院開設反対闘争に参加したのを覚えています。遠山美枝子さん、S(??)さんら女性も含め現思研や社会学部の仲間たちが、大学別に現地闘争に参加しました。私たちが、王子米軍キャンプに通じる道路に向かうと既に阻止線が引かれていて、午後3時過ぎには、各大学の旗を立てた一団が続々と集まって来ました。

ヘルメット姿の党派の隊列もあって、私たちは、赤いヘルメットの社会学部の隊列の後の方に加わりました。先頭部隊のジグザグデモに合わせて、後続デモ隊も、ジグザグにデモ行進を進めます。そのうち、機動隊が襲いかかってきました。デモ隊は慌てて引き、また態勢を立て直して知らない人々と仲間のようにすぐスクラムを組み直して進みます。

それを繰り返しているうちに、猛然と機動隊が深追いしてきました。指揮車から「逮捕！」の号令の指示で学生を片っ端から拘束し始めました。私たちは救護班ではなかったので、現思研の何人かと一緒に逃げたのですが、バラバラになって路地へと逃げ込んだ時には、遠山さん、Sさんと3人になってしまいました。路地の途中でようやく手が伸びてきて、誰かに腕を掴まれました。この路地の住民でした。

「隠れなさい！」と、私を引っ張ったのです。遠山さんとSさんと、その家の小さな門の中に入りました。門の所には、パンジーとデイジーの寄せ植えのプランターがあり、どこからか梅の香りが漂っています。門の中の小さな庭の隅に隠れるように招いてくれたのは、私たちの母親位の女性でした。外では、笛や怒号が聴こえています。その内、しばらくすると静かになりました。

「こんな所に、ベトナムからの訳が分からない傷病兵なんて連れ込む野戦病院なんて、まっぴらごめんだよ。学生さんたち、頑張ってるよ」その夫人が大声で言いました。住民が味方と言うには本当に心強い。戦いが正義で、住民が応援してくれるから、こちらもやる気満々です。この68年当時の戦いは、常に住民の支持が力になっていました。エンタープライズ反対闘争も同様です。

少し話をして、ほとぼりが冷めたかと礼を言って、路地を出て歩き出し、通りを見るとちょうどパトロール中の機動隊数人が獲物を探していたらしく、「いたぞ！こいつらも学生だ！」と、取り囲まれてしまいました。「何よ！」「何もしていないのに何するんだ！」と遠山さんと私、Sさんが大声で騒ぎました。「お前らは、あばれた学生だ！靴を見てみろ！」と言うので思わず足元を見ると、走っても靴が脱げないように靴の真中あたりを輪に靴紐で縛っていたのです。「何もしていないじゃないか！住民妨害はあんたたち機動隊だ！」と、私たちは、言い返していると、腕を掴まれて、傍に停車していた装甲車のような護送車に引っ張り込まれそうになりました。

そこへ、「何するんだ！この学生はたちは、内の知り合いだよ！」と、さっきの家の夫婦が飛び出して来て、私たちをかばってくれました。あつと言う間に近所の人や野次馬が取り巻いて私たち3人を引っ張り護ろうとしてくれます。

私たちが気が大きくなって、「証拠が無いのに逮捕するなんて、無謀な弾圧だ！あなたの名前を名乗りなさい！」などと大声で抗議しました。それで指揮者らしい男が通りから歩いて来て、集合を告げたらしく、私たちの手を離してにらみながら機動隊は撤収して行きました。

逮捕を免れて、私たちが興奮して嬉しさ一杯です。「ありがとうございます」、住民や野次馬にお礼を言いました。さっきかばってくれた夫婦は、嬉しそうにニコニコしています。でも話し込んではいられません。仲間たちは大丈夫だろうか……。私たちは、お礼を告げると、靴が脱げないように縛っていた靴紐を解いて、大通りへとそっと顔を出して見ました。

白いヘルメットの中核派が隊列を編んで、ジグザグデモで氣勢をあげ、社学同の赤いヘルメットや青いヘルメットの社青同解放派も合流して、離れた所で渦巻きデモや道一杯広がるフランスデモを繰り返しているところでした。1000人以上の大きな集団になっています。私たちから離れていった機動隊が、そちらに向かって包囲し、大量逮捕したのは、後に判った事でした。夜までゲリラ戦の騒乱は続き、飛鳥山公園の方に戻ろうとしましたが、道が分かりません。

夜の集会には、職場で働いていた現思研の仲間も来るはずでしたが、あちこちの大通りで、道一杯に攻防が広がり、私たちが夜まで、それに加わって抗議行動を続け、8時過ぎには、学生会館に戻って、仲間の逮捕者がいないか、確認する事にしました。この日は救援班や医学連も見あたらなかったからです。

後にこの日は、157人も学生が逮捕された事を知りました。現思研の仲間も逮捕されたような気がするのですが、記憶がはっきりしません。68年には、たびたび現思研の仲間が逮捕されたり、二部の学苑会のML派や解放派の仲間、加え一部昼間部の仲間が逮捕されたので、一つ一つの闘争の時の、誰がやられたか思い出せないのです。3月から5月と、ずっと王子野戦病院反対闘争は続きました。

命がけの戦いは、街頭で住民や老若男女を含めて戦われ始めていました。新聞によれば、3月から5月、王子野戦病院開設反対闘争は、野次馬を含めて戦いには、連日5万人以上の人々が街頭戦の「いたちごっこ」に参加し、ゲリラ的に抗議を続けたのです。

同じ頃、三里塚・芝山空港建設反対闘争が大きくなり始めていました。

ブントは、68年3月24・25日、共産主義者同盟第7回大会を開催し、(66年に統一したマル戦派を追放した大会です)世界同時革命を定式化し、70年安保粉砕・日帝打倒の戦いを基調として提起しました。

ここで、松本礼二議長に代わって、関西ブントの佐野茂樹さんが議長に着き、既に67年には、斉藤克彦さんらは「2・2 協定」以降、放逐され、68年の7回大会ではマル戦派を追放しました。当初の第二次ブント再建時に目指した大ブント構想—労働者階級の党としてのブント再建は、関西派がヘゲモニーを持った事で、党の攻防の中心が学生運動の闘争機関、指導部のような機能と方向へと純化していったように思います。

3月31日には、社学同全国大会が開かれ、マル戦派は、この大会をボイコットしています。ここで、早稲田大学の村田能則さんが社学同全国委員長に就任しています。当時、早稲田大学の村田さんは、現思研の学習会にもよく来て、ブント路線を語っていましたが、この社学同全国大会が中央大学で行われたらしいのですが、私には参加した記憶がありません。社学同同盟員ながら、党派の大会や党派の幹部には、あまり魅力を感じていなかったのは事実です。

第2章 国際連帯する学生運動

2.三里塚闘争への参加

「三里塚闘争」の発端は、1966年7月4日、佐藤内閣の閣議決定によって、「新東京国際空港の建設用地を成田にする」として、7月29日に空港公団が設立された事に始まります。その間に政府は、成田の当該地の農民、住民たちの意見を聴く事ありませんでした。もともとは、空港の候補地は、隣接する宮里地区だったのですが、猛烈な反対運動が起こり、自民党の基盤の強い千葉県の自民党の意向も受けて、広大な用地買収は無理として白紙に戻しました。次に狙われたのが、三里塚でした。三里塚には明治初期から三里塚御料牧場があり、天皇・皇室用の農産物を確保するために、広く国が管理している直轄地でした。そこに、戦後入植した農民たちが農業を営んでいたのですが、土地収用をやり易いと見たのか、三里塚に目を付けたのです。

その情報を得て、閣議決定の前に、6月28日農民たちは「三里塚・芝山連合空港反対同盟」を結成しました。この地域の農民は、戦争では大陸へと狩り出され後、開拓民として入植し、やっと農民としての生活を営んで来た人々が多かったのです。農具商で画家、クリスチャンの戸村一作さんが、みなに推されて反対同盟の委員長になりました。

農民の戦いは千葉県の社会党、共産党、労働組合も支持しましたが、67年には機動隊に守られながら空港公団は測量を始めました。10・8羽田闘争直後の10月10日の杭打ちに対して、農民たちのスクラムに機動隊は襲いかかり弾圧しました。(10月10日外郭測量阻止闘争—初の杭打ち)



殴られ、蹴られ負傷者が続出する有様でした。こうした苦しい戦いの最中にいち早く駆けつけ、割って入った日本共産党系の民青(民主青年同盟)の全学連の学生たちが「挑発に乗るな！皆さん、警察の挑発に乗らないで下さい」と叫んだと言うのです。実力で父祖の地を奪われまいと戦う三里塚の農民たちにとって、日本共産党のカンパニアと選挙への投票の誘導は、強い不信を招くようになっていったようです。

こうした中で、67年三派系の全学連や千葉県の反戦

青年委員会の共催による「11・3三里塚空港粉碎・ベトナム反戦青年総決起集会」が開かれました。この集会では、初めて反対同盟と三派系の全学連が共闘を確認しています。第二次羽田闘争前の、10・8羽田闘争以降の盛り上がりの中で集会は行われました。特に、中核派は千葉県の国鉄労働者や学生たちを動員して、三里塚闘争にいち早く、常駐体制を取り始めました。ブントは、千葉県に住む人はいたが、有力な大学や労働組合を持っていなかったせいで、出遅れていました。中央大学出身の反対同盟の行動隊長の島さんの常駐要請もあったのに、支援体制は準備が遅れていました。ブントは千葉県委員会を結成して、常駐体制を取るのは67年の11・3集会の後の年末か68年に入ってからではないかと思います。しかし、なぜか首都圏出身の人材を派遣せず、常駐体制のキャップは、後の連合赤軍事件を主導する千葉県委員会の大坂から来た森恒夫さんが担当しています。彼は、大衆運動に於いては誠実で、丁寧な率先垂範のカードルであったら

うと思います。

68年、エンタープライズ寄港反対の戦いが一段落し、王子野戦病院開設阻止闘争と三里塚闘争が、当面の反戦闘争の目標となりました。

ちょうど、3月4日、新入生を迎えようとする各大学は、闘争への呼びかけ、立て看板作成など休みなく忙しい季節です。3月10日、三里塚闘争の大集会を行う事になりました。社会党や労働組合も加わって、大きな集会になるようです。(3月10日空港粉碎・ベトナム反戦総決起集会～反対同盟・全国反戦共催)既に、反対同盟の農民たちが、日本共産党方針を批判していたので、三里塚闘争の大衆的な運動は、社会党系が中心的に、大衆的な闘争の基盤を持って主催する形となっていました。

この前頃から、三里塚に行って、実際に農民を助け農民の話を聴き学習するという意味で、社学同の学生たちが日程調整して「援農・泊まり込み」に、出かける事になりました。私たち現思研も、スケジュールを調整してそれに参加しました。私たちは、上原さん、クラケン、遠山さんら数人と一緒に一週間より短い週末の援農第一陣として出かけました。場所は、天神峰という所の堀越昭平さんのお宅でした。

受け入れ準備をして待っていたのは、千葉県委員会の森恒夫さんで、私たちに同行したのは、当時私たちを多分指導する位置にいた早稲田大学の村田さんです。堀越さんのお宅は、ちょうど母屋を新しく建てた所でした。新しい母屋で挨拶を交わした後、その裏に残されていた旧母屋が私たちの宿舎として、きちんと準備されていたのを知りました。

「学生さんたちがわざわざこんな所まで、応援に来て下さってありがたい事です」と堀越さんが、丁寧なお礼を言うので、私たちは大変恥かしい思いがしました。なぜなら、宿泊体制から三度の食事まで堀越さんの御家族が賄ってくれるというのです。夫人は、ニコニコと立ち働き、子供たちがもの珍しそうに私たちを遠まきに取り囲んでいます。「私たちに何かお手伝いさせて下さい」と言っても、「そうさな…。まあゆっくりして下さい」と言われただけです。家の旧母屋に入ると村田さんが「お！ここは合宿にいいな。学習会なんかにも使えそうだな」と梁にぶら下がって言いました。もう夕方になって、食事を夫人と子供たちが運んでくれました。米飯はおいしいし、鶏をつぶして食卓に提供してくれたり、かえって、物入りの多い迷惑な「援農団」です。食事が終わった後、まず堀越さんがこれまでの三里塚と戦いの始まった歴史について話をしてくれました。この一帯は戦前は御料地だった事、戦後苦勞して入植して来た人が多いこと、今になって農民の声を聞く事も無く、66年に空港用地として閣議決定された事。反対同盟の戦いに、日本共産党系の人々から、実力闘争を止めるよう説得された事も話していました。

翌日には、地域見学をする事になりました。翌朝、私たちは早く起きたつもりでしたが、すでに堀越家の人々は、一仕事を終え、朝食準備をして待っていてくれました。母親と一緒に小学生の娘が食事を運んでくれました。堀越家で収穫したおいしい米や卵、野菜など朝食もまた恐縮なばかりです。手伝うと言っても、何だか足手まといになりそうで、それでも遠山さんと2人「あの～、何かお手伝いさせて下さい。掃除でも何でもします」と言うと、「じゃあ、鶏小屋の卵でも取って来てもらおうか」と言われて、遠山さんと私は喜んで、小学生の娘と一緒に鶏舎に入って、カゴに卵を一つずつ入れて行きました。「いつもは、あたしが一人でやってるんだ」と小学生は、自分の仕事が取られてしまって、誇らしいのか、嬉しそうにやり方を教えてくれました。堀越家でも、まだ援農に来

る学生たちに慣れていないためか、お客様扱いで気が引けます。実のところ、足手まといなのは明白です。それに、みんな仲間たちは「大飯食らい」です。村田さんは、リーダーどころが楽しんでいて、食後の一服の時に覗いている子供たちを、私と遠山さんと部屋に誘って話していると、「タバコを吸ってみるか？」などと勧めたりしています。午後は、長靴を履いて畑に行き、キャベツやネギの収穫に加わりました。「働くと飯が旨いなあ」などと、村田、上原さんらはもりもり食べます。夜は、社学同学習会の予定だったのですが、みな疲れてぐっすりと眠ってしまいました。

そんな風に、援農は楽しい合宿となりました。村田さんは早々と出発し、森さんはずっといましたが、ちょうど前に雪が降ったので残雪が積もっていて、みんなで子供たちも含めて雪合戦をしたりしました。誰かが森さんに「おっさん、恋人いないでしょ、遠山さんどう?!」なんて言ったので、森さんも遠山さんも真赤になって、雪礫をお互いに投げ合っていました。遠山さんはどうあれ、森さんはとても嬉しそうでした。連合赤軍事件があった後、私はこの時の雪合戦の事をふと思い出したものです。

こんな風に「足手まとい」に過ぎない私たちですが、「援農」は楽しい合宿になりました。それでも、みんなが誰も感じたのは、「援農」と言う実態とは程遠い学生が農民たちの寛容さに助けられて学習するためのものだとしみじみ思いました。それでも、農民たちと少しでも直接触れあった事で、私たちは三里塚闘争が身近なものとなりました。

68年3月10日の事だったと思います。この日は快晴でした。三里塚反対同盟支援の大集会が現地で開催される事になっていました。この日は成田市役所前で三里塚・芝山連合空港反対同盟と千葉県反戦青年員会の合同集会で、4,500人が参加し、更に5,000人の市民がとり囲むように加わった日と記録されているようです。

前日、ブント・社学同の先輩から「空港公団公舎に突入する戦いになる。ひいては、この大きなカッターを検問突破して、何とか現地まで持って行けないだろうか」と現思研に相談依頼が来ました。現地調達も試みるが、デモ隊や、学生は厳しく強制身体搜検を受けるので、公団公舎に大きなカッターを持ってたどり着けるか分からない。多分公団の周りには鉄条網の阻止線を張っているので、カッターで解除しながら、社学同が、公団一番乗りを目指すつもりだと言うのです。全学連の各派、中核派も解放派も、同じ様に空港公団突入を準備するはずとの事です。渡されたのは、植木挟みのようなカッターと大きなペンチのような鉄線を切る道具ニッパーです。それで「OK! やってみよう!」と言って遠山さんと私が一つづつ運ぶ事にしました。

私たちはデモ隊の仲間と離れて、普通の学生かOLのように装い、手荷物検査でチェックされると困るので、マキシーのコートの下に身体に着ける事にしました。ところが時間帯のせいか、デモの一団と判る人々を除くと、案外総武線列車は空いていて、みんな座っています。私たち2人は、カッターが脇の下に隠してあるために、座る事は出来ません。ドア口の所に立って、とりとめも無い話をしながら成田に向かいました。どの駅だったか思い出せませんが乗り換え、言われた通りのコースを通過して更に歩き、空港公団建物の付近に出ました。記憶では、何だか小高い所に空港公団の建物があって、そこに続く道路は、装甲車で封鎖し、機動隊も配備されているのが見えました。そこに行く道に学生たちや労働者、農民のデモ隊が向かいます。デモ隊は、とり囲まれてはサンドイッチにされ、身体検査をされたりしていましたが、私たちは一般の市民のように検査も無く通行しました。会場は成田市役所前の広場で、集会は7000人以上の1万人近い人々が集まり、350

0人以上がその内の全学連の人々です。

空港公団公舎の建物から離れた所で集会が終わると、各党派が赤、白、青などの党派を示すヘルメット部隊を先頭に角材を持って、建物の方へと接近しました。私も記憶が定かで無いのですが、千葉県の反戦の人にカッターとニッパーをすばやく渡しました。

当時はまだ、警備側も、現在のような封じ込め規制では無く、公団に対する集会実行委員会の抗議文を受け渡すまで阻止する事は出来ません。警備よりデモ隊の人数が多いからです。集会参加者のほとんどの人群れが空港公団に向かってデモ行進を続けます。

全学連部隊は、自然に先頭になって、各党派や自治会の旗をなびかせながら、高台に向かう道一杯に進み、公団の門に向かいました。赤ヘルメットの社学同のとなりに白ヘルメットの中核派、解放派の青ヘルメットと、横に数列ずつ並んで一斉に公団への道を駆け登りました。後から見ると、色取りどりのヘルメットのおかげで、帯のように蛇のように列が動いていて荘厳な眺めです。正門にたどり着くとブントの先頭部隊が、カッターを使い鉄条網をカットしてどンドン鉄門へと接近しました。その時には、公団外側のそこに機動隊は配備されておらず、正門を巡って各党派が争うように門を壊そうとしていました。機動隊は、門の内側にも公団側にも陣取っていて、デモ隊が突破したら、不法侵入で逮捕する構えで控えているのでしょうか。ブントは、カッターの威力で一番早く門前に到着したのに、なかなか門は突破出来ません。

私はデモの後の方から、坂道なので良く見えたのですが、赤ヘルメットも白ヘルメットも、鉄柵を皆で押しまくったり揺するのですが、ビクともしません。「あの門は、外に開くのかも知れない。引っ張る方が開くじゃない」と誰かが言い出したのが聞こえました。居合わせた遠山さん、白井さんと私は、何か門の扉を引っ張るロープのような物は無いだろうかと思案し、近所に捜しに行く事にしました。少し行くと銀行がありました。銀行の駐車場は、通りからの無断入車を阻止するように、金属のチェーンの可動式の柵が置かれていました。「あっ、これいいね！」と、私たちは、このチェーンが可動式なのでそこからチェーンだけを取り外して失敬し、それを急いで持ち返りました。また、私たちも、ちっとも「悪事」と考えずに周りも見ることも無く、急いでこのチェーンを社学同部隊の列に渡しました。



まるで各党派の障害物競争のようだ、と笑っている人もいました。「よし！これがあれば一番乗りまちがいない！」と言いながら、ブントの赤ヘルメット部隊が鉄柵にチェーンを巻きつけて、ゆっさゆっさと引っ張りました。手応えあります。「よし！もう少しだぞ！」、皆で力を合わせて引っ張るうちに、少しだけ両扉の片方が開きました。「やった！」社学同の赤ヘルメットが大喜び



した隙に、あつと言う間に中核派の白ヘルメットの男が、旗と共にその隙間に滑り込みました。そして内側に入るとすぐ中核派の旗を高々と振り回したのは、口惜しいけれど感心してしまいました。「やっぱりブントのいいかげんさとは違うね！」などと、私たちは笑ってしまいました。もちろん二番手になりましたが、共産主義者同盟・社学同旗も跳び込んで高々と掲げていました。

こんな風に、傍から見物している人々にとっては、笑えるような大攻防戦が繰り返されました。機動隊の催涙弾攻撃に抗し、投石・ゲリラ戦も続きます。そして畑のくねった道を今度は、救護班の青医連の友人たちとデモ行進しつつ、私たちは集会場へと戻って行きました。あれは成田の駅近くだったでしょう。一緒に参加した現思研の仲間の何人か、去年入学してまだ未成年のTさんもいません。逮捕されたのを見たか？みんなであちこち確認しあいました。解散集会の頃には皆疲れと逮捕された友人たちの救援について話し合っていました。帰路は、国鉄では無く京成電鉄になりました。京成電鉄に乗ったのは、それがきっと解散地点から近かったためなのか、今は思い出せません。

この時の事だったと思います。この日のために、確か関西でもブントは数日前に「70年安保粉碎・王子野戦・三里塚空港阻止」の関西の政治集会をやっていて、東京へと闘争参加していたのだと思います。帰路京成成田から上野駅に着くと、そこで山手線の国電(今、民営化されJR)に乗り換えになり、私鉄と国鉄の違いで、乗り継ぎ改札が在ります。そこで切符を見せて山手線のホームに降りる事になります。10・8 羽田闘争以降、スクラムを組んで強硬突破して無賃乗車する学生も多かったのですが、現思研では「戦いでパクられるのは、仕方が無いけれど破廉恥罪を起こしては、人々の信頼を失うから気をつけよう」と、常々決めていたので、現地闘争には、ちゃんと切符を買って行動していました。

この日、三里塚での大奮闘を終えて、学生たちが無賃乗車で来るのではないかと、京成線も国鉄も共同して、手ぐすねを引いて待っていたようです。乗り換え改札の向こう側には鉄道公安官がずらりと並んでいます。学生の一部が強硬突破しようとして、抱え込まれたり、揉めている所に、私たちはちょうどぶつかりました。関西の社学同の学生たちのようです。小柄な学生が大柄な男たちに「切符を見せろ」と抱え込まれ暴れています。「何だ、何だ」と彼を助けようと皆で囲み込むようにしました。私は、改札を通った自分の切符を小柄な学生の振り回した手の中に握らせました。彼はハッと私の方を見てニヤリと笑って「離せよ！何だ！切符を見せればいいんだろう！持ってる！」と大声を上げながら振りほどき、「ほら！文句あるのか？」と開き直っているのが見えました。私は、急いでホームへと降りて行きました。私の切符だと知られないようにと、遠山さんたちとホームで固まっていた。上手くいったらしく、ホームに彼も降りて来ました。ホームで電車に乗る時に隣に来て、「ありがとう」と、こっそり切符を返してくれました。

御茶ノ水駅に着くと、また何十人かが「わっせい、わっせい」と改札を無視して通過しました。その後、明治大学の学生会館5階ホールで、三里塚闘争の総括集会が開かれました。彼が、改めてお礼に来たので、その時同志社大学の望月上史さんを知りました。この時、私が「破廉恥罪はやめて下さい。社学同の信用を落とします」と言うと、「いや。金が無いんだ。闘争優先という事で許

してくれよ」などと言います。「私に謝られても困るわ」と言い返しましたが、そんな縁で、望月さんとは顔見知りになりました。

そして、ブントが後に赤軍派と分裂するきっかけとなった69年7月6日の朝、東京駅から電話して来た望月さんと話をしました。この時は正規の切符で、彼は赤軍フラクの呼びかけに応じて上京して来たのです。それが彼と話した最後となりました。彼は、赤軍派分裂のブントの最初の犠牲者として、69年9月死亡してしまいました。その事は後に、「7・6事件」についての所で述べたいと思います。(注:「7・6事件」は第三部)

この日の三里塚の戦いでは、私たちの傍に居たTBSの車が、学生の角材を運んだと疑われ大キャンペーンが張られました。政府警察情報が、スキャンダルを作り上げたのです。実際には三里塚の農民の婦人たちがプラカードと一緒に乗せてあげたに過ぎなかったのです。当時、もっとも公正な報道は、TBSの「ニュースコープ」と言う番組でしたが、それらのスタッフら進歩的な人々が処分されました。それに抗議して、TBSの「ニュースコープ」キャスターだった田 英夫さんは抗議辞職しました。田さんのベトナム戦争批判の報道を政府は、常々クレームを付けていました。(のちに田さんは、乞われて社会党の議員になっています。)



また、私は後に、戸村一作反対同盟委員長と会う機会がありました。私は1971年以来、アラブを中心に活動していた時です。78年にパレスチナ連帯国際美術展が、バイルートで開催されました。78年3月21日から4月初めまで、世界30カ国から250点の美術作品が展示されました。そしてアジア・ラテンアメリカ・欧州などから美術、芸術家が招待され、連帯し様々に語り合いました。この国際美術展は、パレスチナ解放機構(PLO)のアートセクションの人々が中心になって世界の人々に呼びかけ実現したものでした。私たちも協力し支える団体の一つでした。日本からは、針生一郎さんとPLO東京事務所長のアブドルハミドさんが中心になってこの企画に連携し、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ

美術家協会(AALA)の人々の作品の展示に尽力しました。そして、その制作者たちが訪問団としてバイルートに訪れました。加えてPFLPや私たちの推薦で、画家であり農民を描いて来た戸村一作さんの作品が展示され、また彼も招待されたのです。成田空港の開港が3月30日に迫っていた頃の事です。

この展示会前の77年に「サダトの裏切り」とアラブ中を激震させたサダト・エジプト大統領によるイスラエル訪問とイスラエル承認の動きが始まっていました。これまで、イスラエルが占領地を返還しない限り、和平を結ぶ事は出来ないとアラブ諸国は一つになって、「包括的和平」を求めています。これまで各国が個別に単独にイスラエルと交渉する事はありませんでした。アラブ諸国政府と人民は、PLOと共に、サダトとイスラエルの動きに対して衝撃を受けつつ政治的物理的に抗議を拡大している時でした。物理的とは、アラブ諸国にあるエジプト大使館を各国民衆が占拠したり焼き打ちし、同時に対イスラエルゲリラ戦の強化拡大でした。政治的には、反エジプト路線を強化していた時です。この米国を仲介とするイスラエル・エジプト合意は、78年9月には「キャンプデービッド合意」として、初めてアラブの一国家がイスラエルを承認し、平和条約を目指す道につなが

って行きます。

イスラエルはエジプトを抑え込むその一方で、48年、67年戦争以来、初めてレバノン南部への侵略を開始し、3月上旬、戸村さん一行が到着する前から激しい攻防になっていました。レバノン南部戦場は、侵略者イスラエル軍に対するゲリラ戦が激化していました。イスラエルの偵察飛行は、レバノン全土に及び、ベイルートのPLOの施設を狙って空爆が続いていました。そしてまた、レバノンは、75年から以降15年にわたる内戦下にありました。レバノン経済、政治の既得権を持つキリスト教マロン派内のイスラエルと連携する右派と、政治改革を求め、PLOと連帯するレバノン民族主義勢力・イスラーム勢力との間の内戦です。

アラブ大学を会場とする国際美術展は、内戦下の左派民族主義的勢力やPLOが守る西ベイルートの解放区で行われる予定でした。そんなところに、3月になってイスラエルの侵略に抗する戦争が始まったのです。

戸村さんは、PLO治安部隊の護衛に案内されて、美術展での講演ばかりか、南部前線視察やキャンプなど、あちこちを精力的に見て語り交流していました。戸村さんはお会いした時は「こんな解放感はない！」と、とても感激しておられました。「三里塚と反対だ！」とレバノン内戦下のベイルートに大きな驚きだとして「検問しているのが、みな味方なんだ。三里塚の検問が味方だったら、どんなにいいだろう」と語りながら、解放区というのが、どんなに素晴らしいものか、どんなに戦いが文芸・文化を創造するかを目の当たりにすると興奮気味に語っていました。

戸村さんは「美術展の会場である、アラブ大学の入口にはアブストラクトのオブジェが飾られていると思ったら、これは数日前に撃ち落としたイスラエルのファントム機の残骸の一部だと判ったのは、凄かった！」などと話していました。更にベイルートにパレスチナ連帯で招待されて来た占領下パレスチナやアラブ、アフリカ各地の人々が、三里塚の日本の戦いを知っているのにも驚いていました。彼らが、パレスチナ労働総同盟中心に「三里塚連帯集会」をベイルートでPLOと共に開いてくれた時には、涙を浮かべていました。ちょうど三里塚は、開港阻止闘争が大詰めを迎えていました。それを知っているので、三里塚反対同盟委員長である「画家戸村一作」に対して、解放組織の人たちが次々と連帯の挨拶に訪れたのです。

戸村さんは、画家であると同時に、戦いの闘志を燃やしていて、ベイルートから南15キロメートルくらいのダムール地区が襲撃された直後に望んでレバノン住民らやパレスチナ難民と語り合いに出かけました。彼は、私たちにこんな提案をしました。

「何とか、三里塚の団結小屋をこのレバノン南部に一つ作りたい。作れないだろうか？一緒に協力して欲しい。三里塚の青年たちが世界の現実を、侵略も、解放区も学べるこのパレスチナ戦場で共に戦いたい」戸村さんは、そう主張していました。三里塚は、私たち学生を教育し、成長を促す現場でした。アラブに来ていた何人もの私たちの仲間が、一度は三里塚闘争に参加していました。そんな人々が三里塚の団結小屋をレバノン南部に作る事に反対する人はいません。

ちょうど開港間際の戦いで、自分が破防法で引っ張られるような事があつたら、奪還闘争してもらって、こっちの団結小屋の主になって、三里塚の青年たちの希望を大きく育てたい！そんな冗談とも言える構想を語りました。私たちは国内で、パレスチナ連帯に関わる人たちが激しい弾圧に晒されるのを知っていたので、「赤軍弾圧」を口実として、三里塚への更なる過酷な弾圧の口実に晒されるのを警戒していました。

だから、私たち抜きに、PLO やパレスチナ勢力と三里塚の直接の連帯を育てたいと戸村さんに伝えました。戸村さんは、三里塚は日本赤軍の言動より、十分過激で、自分があなたたちと会ったと、日本の帰国会見でぶち上げて、何の差し支えも無いと主張していましたが、私たちはそうしないよう望みました。

戸村さんの無事帰国後、1978年3月26日、三里塚では学生たちの逮捕覚悟の開港阻止実力闘争—管制塔制圧の戦いが成功しました。一旦開港は、阻止され、政府は開港日を5月に変更させざるを得ませんでした。このベイルート美術展でのPLOと反対同盟の会いは、戸村さんが1979年11月2日に亡くなるまで、またそれ以降もパレスチナの人々と三里塚の連帯を育てました。私たちも、また戸村さんとの出会いによって、三里塚の戦いに対する連帯を以降、いつもアラブで心にとめていたものです。

3.68年 高揚の中の現思研

67年～68年、ベトナム反戦を求める戦いが、米政府を追い詰め、米国内でも学生、市民の反戦運動が広がっていました。また、欧州でも反戦闘争と労働運動、学生運動が結び付き、革命を求める新左翼潮流の活動が汎欧州レベルに広がって行きました。この頃のこうした海外の動きは、日本の新聞国際面でも、大きなニュースとなって、私たちの興味を引いたのです。

世界の変革の流れは、毛沢東の言葉を借りれば「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求める」60年代を体現し、ことに資本主義国に於いては、その戦いの質の同時性を表現していました。これまでのソ連型の共産主義・社会主義にとって代わる戦いが、各地で討論となり各国共産党批判となっていました。資本主義にとって代わる社会主義計画経済は、資本主義を揚棄する道に進んでいるのか？否。プロレタリアートの独裁とは、プロレタリアートが例外なく社会成員を解放する能力を持つ事、つまり人間解放が故ではなかったのか？それが党独裁の官僚機構へと変質しているのではないのか？ソ連中心の国際共産主義運動は、「平和共存」の名で各国の階級関係の現状固定を望み、人民の戦いに連帯する国際主義を失っているのではないのか？当時の欧・米の新左翼運動や人種差別に反対する運動等などは、ラディカルな変革を求めていました。ブントの私たちがチェコへのソ連の介入に、ソ連大使館へ抗議行動に出かるのも、68年夏です。5月にパリで学生運動と労働運動の結び付いた「五月革命」と呼ばれる戦いが始まろうしていました。



私たち現思研は、神田御茶ノ水の大学同士の助け合いの「戦いの季節」の中にいました。私自身は、大学の執行部などの役職は退いて、卒業論文に集中するつもりでしたが、闘争が続き中途半端でした。卒業論文も、本当は深く父の経験を捉え総括する意味で、「日本ファシズムの形成過程とその思想的背景」をテーマとして研究を始めていました。

みず書房の分厚い資料を、父と読み討したりし始めました。父は、井上日召の「梅の実」や、中学時代から親友だったと言う池袋正胤郎さんや、友人の四元義隆さんの文を感慨深く読み直していました。四元さんの供述書に一部、父のことが述べられています。私は、当時の人物に焦点を当てながら、父の友人らと時代を捉えるつもりでした。それが当初の目論見と違って、結局68年

の高揚の中で、卒業論文に十分関わらず一般論に終わるような内容となってしまうのですが…。68年、現思研は新しい仲間も増え、活況でした。現思研のTさんは、3月の三里塚闘争で初めて逮捕された68年について、こんな風に語っています。「僕は初めて逮捕され未成年ということで、最初、千葉少年鑑別所に入所させられましたが、途中で僕だけ練馬少年鑑別所に送られた。23日の拘留を終えて娑婆に出てきた時は、68年4月になっていた。釈放され喜び勇んで現思研に戻ると、知らない新しい顔がいっぱいいた。田中、J、K、H、S、I等々。田中とは年令も一緒、同じ九州熊本出身と知ってすぐ仲良くなった」と。学習の場は毎日の街頭デモや学内闘争、立て看板やビラの作成などです。夜の泊まり込み作業も楽しいものでした。お金は無かったです、常に仲間と共同し、お互いにアルバイトを融通し合い、助け合いました。悩みや問題があれば、家族のように率直に話し合いました。仲間がデモで逮捕されたら、他の仲間が支え、家族にも心配させないように措置を取りました。

現思研仲間は、コンミュンというか家族共同体のようにお互いの考え方と人格で団結した仲間です。後に私が、アラブで活動を始めた当初、ブントや赤軍派の理論、いわば借り物の論理でアラブ・パレスチナの解放組織と交流しました。しかし、それが通用せず、ポケットから出すべき、そういう借り物が無くなった時、私は自前の戦い方として「現思研方式」で戦っている自分を発見しました。仲間を第一にして、敵に対峙し、実践の総括の中から政治を掴み、それを理論へと一般化させるやり方です。でも現思研は「政治組織」として、きちんとしたものを持っていない、「何でも自発性」のサークル主義的な欠陥がありました。

考え方が近いとか気の合う者がお互いに魅かれて集まり、共に戦ったのですが、「ルーズ」でした。でも倫理的規律は、自発的に皆持っていたし、ボランティア・アソシエーションであり、形態もない家族のような組織でした。今から捉えると「組織」としての規則、例えば会則も無かったし、会費もありませんでした。それが私の欠陥でもあったと、アラブに行ってから自覚しました。組織し合う人間の人格、思想のみならず、「組織」として形態を作る重要性を学びました。その時「ああ、自分が現思研でそうした民主的な組織機構形態を作っていけてたら、後に赤軍派にバラバラに加わり分かれて行くことは決してなかったし、そうしなかったら…」と深く反省したものです。

現思研当時は、何か新しい事を始めるとか、社学同からの要請があれば、会議で決定する機関が無くても、個々が自分の判断で参加していました。私たち先輩の決断が、下級生たちにどんな影響を与えていたかも、当時は無自覚でした。当然のように皆行動は、共にする事になったのですが、それは後に、赤軍派へと向かった私自身の反省があります。自分がどう生き闘うかが関心の中心でした。その上で当時は、一緒に戦う楽しい仲間たちがいて、その下級生たちを助ける事が、私の一つの生甲斐だったのだと思います。アルバイトで稼ぎ、食べれない仲間がいたら助けるのは嬉しかったし、要請があれば、社学同にカンパをしたり、「活動にはお金が必要」と、一番気にかけて活動していました。それでも、こうした現思研の在り方は、ベ平連的な「運動体」ではあっても、「組織」とは言い難い欠陥があったと思います。

一人一人のメンバーの5年、10年先の人生を、どう生きて行くのか、どう社会的基盤を作るのか、事業を起し兵站力を強化しようというような考えも欠けていました。戦う一致はあり、みんな自分の人生を考えつつ共に戦い、いわゆる「組織的保障」は無く、また誰もそんな無いものねだりもありませんでした。「心情的結束」「自発的団結」の強さという、精神的なエネルギーの仲間たちでした。

後にそれが赤軍派の「7・6事件」後、様々な理由で崩れ、バラバラになってしまう時代へと転じていったのですが、以降は、その負債や責任を個々が背負いながら、苦勞しつつ各々自立して生活の場を作っていたのだと思います。

私は海外を活動の場として、30年も経って日本に戻り逮捕されました。

昔の現思研の仲間は、穏やかな市井の人として生きていたのですが「窮鳥ふところに入る」の思いで助けられないわけにはいかないと、また現思研以外の当時の大学時代の友人たちも含めて私の公判、獄中の生活に対して財政的、精神的に支援してくれました。旧友はありがたいとしみじみ思います。

現思研の67年・68年の活動はいわば全盛時代で、学生運動の盛んな時代と重なっています。私が、まだ卒業論文作業に意欲的な頃に、パリの五月革命の戦いがニュースになりました。「すごい！労働者と学生が一体になって蜂起している！」と新聞、テレビのニュースから学生会館の仲間たちは湧きたっています。「パリのカルチュエタンの機動隊との攻防は凄いな。あれは学生街だぞ！御茶ノ水街・神田街でも戦えるじゃないか？」と大いに話題になりました。米国でも欧州でも、私たちと同世代の学生たちが戦いに立ち上がり、米国では、黒人の代表的な組織ブラック・パンサーは武装闘争もやっているというのです。5月10日のパリの革命的状況は、ベトナム反戦の戦い途上にある世界の人々に、希望のように正義実現の烽火のように見えました。

日本にも1月には、米国の歌手、ジョーン・バエズが来日公演し、米政府を批判し、ベトナム人民連帯を訴えていました。ベ平連は、フォークソングを歌いながらデモ行進したり、新宿西口広場でも、フォーク集会を開き、ヒッピー風の若者たちは、新宿駅中央の芝生に寝ころがったり、徹夜で人生を語り、ジャズ、芸術、演劇を論じ合っています。状況劇場は、花園神社で公演し、更に明治大学や京都大学など、各大学でも公演したりして、自由を生きる文化が広がって行きました。学生運動が、そういう文化に影響を与え、逆にそうした文化が、学生運動や大学にラディカルな自由の戦いの創造性を育てていました。私も、一度明治大学の演劇部のヒッピー仲間に誘われて好奇心で経験してみたいと、新宿駅前の芝生に一日夜寝ころんで哲学やサルトル、ボーボワールを語り合う輪の中に入って見た事があります。でもそうした開放感より、戦いの解放感の方がずっと素晴らしいと一回で止めました。

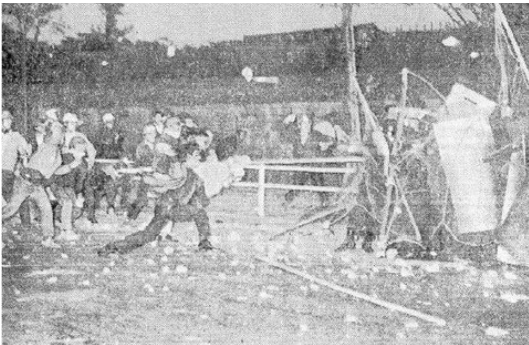
日本にも、パリの五月革命と呼応する、若者たちの文化や土壌が当時はありました。しかし、警察は「風紀悪化」などを口実に、若者たちの芝生立ち入りを禁止し、また土曜日、西口地下広場で定例化していたフォーク集会も禁止しました。また、この頃はイデオロギー論争が盛んで、特に原理研＝統一教会とは全国各地の大学で論争がありました。明治大学内では原理研は基盤も拠点もないので、御茶の水駅前に黒板を携え、ML主義批判や「統一理論」の演説を行っていました。見かけると、現思研や社会学同屋間部やML派など駅前に駆けつけ論破し、相手は糾弾に何時間でも沈黙したりしていましたが、そのうち諦めたのか来なくなりました。

米国では、マルチン・ルーサー・キング牧師が68年4月4日に暗殺され、以降米全土で暗殺に抗議したブラックパンサーの反乱は広がって行きました。当時米国では、一週間の間に各地の反乱で死者38人、負傷者3550人、逮捕者15250人を出した時代です。黒人に対する差別、ベトナム反戦運動で米国は、更にマヒ状況となっていました。

米国の運動から、日本にも4・26国際反戦統一行動が呼びかけられました。それに呼応するばか

りか、27日、28日と反戦沖縄闘争へと連続する戦いが、全学連の中で提起されています。米国からもこの4・26統一行動に向けて、日本の学生、市民宛てにメッセージも届きました。全米黒人反戦反徴兵連盟(NBWADU)、全米非暴力調整委員会(SNCC)などが「キング牧師の死を乗り越えて進もう」「4・26国際統一行動には、全米百万のデモ、16の都市でストライキを行う」と宣言しました。

10・8羽田闘争からエンタープライズ寄港阻止闘争、成田三里塚闘争、王子野戦病院反対闘争と、高揚していた学生運動は、「70年安保粉碎の大衆的出発点として、4・26を戦う」として、学校でのストライキと街頭行動を全学連が呼びかけました。各大学が、全学連の呼びかけに応え、明治大学社学同の和泉校舎、駿河台校舎や医科歯科大学などで「政治ストライキ」を行う事になりました。



この統一行動のデモでは、ブントは「国際主義」を掲げて防衛庁に向けて大量動員を呼びかけました。明治大学だけで400人の隊列を組みました。続いて4・27と4・28闘争では、新入生を迎え明治大学、中央大学で1000人近くの動員を持って、首都圏での戦いを主導しました。しかし、警察側は、明治大学、中央大学のデモ対策として、御茶ノ水駅を中心に機動隊第二機、第四機の先鋭を配置し、十数台のトラック、装甲車でデモ参加者の隊列を挟み、身体捜検を強制したり、進行を阻んだのです。それで皆は三々五々隊列を組まずに銀座方面へとゲリラ的に向かいました。私たち現思研も赤旗を持って、御茶ノ水駅と反対に地下鉄のある九段方向に歩き出したのですが、振り返ると後ろに知らない学生たちが、私たち20人たらずの後ろに数十人も続いていたのでびっくりしました。戦いたい、どこの旗の下でも良いからと、戦いたい人は参加します。

ベ平連によって、市民参加の裾野が広がったおかげで、人々が多く参加したのが68年です。もちろん、日本社会全体から捉えた時には、権力支配機構はびくともしておらず、また学生運動に於いて、多数の参加を得たとしても、当時の社会構成からいけば大学生層はプチブル上・中層的な少数でしかありません。それでも、社会的影響力が大きかったのは、政府野党と全学連が共闘し(党派が全学連の枠内で調整し)、また国際的に反戦闘争があなどれない潮流であったからです。全学連は、しかし全体から見ると街頭戦の高揚、各大学での全共闘運動の登場の中で、よりラディカルな戦術を持って指導しようとする戦術左派の位置以上では無かったと言えます。当時は、全体の「部分」であった自分たちの位置を直視しきれていませんでした。

この時期67年10・8以降は、また党派の競合とは別個の戦いも成熟していきます。一方に党派の戦い方、もう一方にベ平連的な戦い方の中から、より現実的な大学の直面する問題に立ち向かう潮流として全共闘運動が全国的に広がりつつありました。この全共闘運動は、65年の慶應や早稲田、明治などの学費闘争や大学自治を求める全共闘方式の闘いを継承し日大、東大など全国へと広がっていきます。

この時期67年10・8以降は、また党派の競合とは別個の戦いも成熟していきます。一方に党派の戦い方、もう一方にベ平連的な戦い方の中から、より現実的な大学の直面する問題に立ち向かう潮流として全共闘運動が全国的に広がりつつありました。この全共闘運動は、65年の慶應や早稲田、明治などの学費闘争や大学自治を求める全共闘方式の闘いを継承し日大、東大など全国へと広がっていきます。

第2章 国際連帯する学生運動

4. 初めての御茶ノ水・神田カルチュラタン闘争へ 1968年6月

67～68年のベトナム反戦を求める闘いが米政府を追い詰め、米国内でも学生・市民の反戦運動が広がっていました。また、欧州でも反戦闘争と労働運動・学生運動が結びつき、革命をもとめる新左翼潮流の活動が汎欧州レベルに広がっていきました。このころのこうした海外の動きは、日本の新聞の国際面でも大きなニュースとなって私たちの興味を引いていたのです。毛沢東の言葉を借りれば、「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求める」60年代を体現し、ことに資本主義国においては、その闘いの質の同時性を表現していました。これまでのソ連型の共産主義・社会主義にとってかわる闘いが各地で討論となり各国共産党批判となっていました。資本主義にとってかわる社会主義計画経済は、資本主義を揚棄する道に進んでいるのか？否。プロレタリアートの独裁とは、プロレタリアートが例外なく社会成員を解放する能力を持つこと、つまり人間解放が故ではなかったのか？それが党独裁の官僚機構へと変質しているのではないのか？チェコスロバキアではドプチェク第一書記のもとで改革が始まり、ソ連との矛盾があきらかになっていました。ソ連中心の国際共産主義運動は「平和共存」の名で各国の階級関係の現状固定をのぞみ、人民の闘いに連帯する国際主義を失っているのではないのか？などなど。当時の欧米の新左翼運動や人種差別に反対する運動は、ラジカルな変革を求めています。5月にパリでは、学生運動と労働運動が結びついた「5月革命」と呼ばれる闘いが始まろうとしていました。

私たち社学同・現思研は神田・御茶ノ水の大学同士の助け合いの「闘いの季節」の中にいました。現思研の67年68年の活動は、いわば全盛時代で、学生運動の盛んな時代と重なります。私が、まだ卒論作業に意欲的なころにパリの5月革命の闘いがニュースになりました。「すごい！労働者と学生が一体になって蜂起している！」と新聞、テレビのニュースから学館の仲間たちは沸き立っています。「パリのカルチュラタンの機動隊との攻防はすごいな。あれは学生街だぞ！御茶ノ水街・神田街でも戦えるんじゃないか?!」と大いに話題になりました。

6月には、7日全学連統一行動、6月15日共産主義者同盟の政治集会や6月21日全学連集会在街頭行動としても続きます。東京の社学同の中心として明大も「2・2協定」をのりこえて再び力を増し、中大や医科歯科大、専修大と共にラジカルに活動していたころです。私たちの仲間ばかりか、いろいろな友人たちが御茶ノ水から神田一帯のカルチュラタン闘争を、いつかやろうと言い出しました。明大が地理的にも重要な場所にあります。御茶ノ水駅から明大前通りの駿河台下まで解放区にできるからです。

パリの5月、カルチュラタン闘争から1ヶ月もたたない頃です。6月のある日、当時社学同の委員長だった早大の村田さんが現思研に来ました。早大の村田さんと医科歯科大の山下さんが、私の社学同加盟の時の推薦人でした。「おいカルチュラタンやらんか?!パリのカルチュラタンみたいな。やれるのは、やっぱり明治だろ。中大で全学連の社学同集会をやって呼応させるから」と。全学連統一行動の中で、当時ブントはアスパック(アジア太平洋閣僚会議)反対闘争を、日米によるアジア政治経済支配として重視していて、中核派とは違う党派性として主張していました。「4・26の国際統一行動は、機動隊に御茶ノ水駅で封じ込められたから、今度はゲリラ的に闘って、解放区を作ろうぜ」と村田さんは気軽に言います。

「でも、とっかかりがないと……。どうやってカルチェラタンのような解放区が出来るかな」みんな



語り合いました。「やったら何とかなるって」といつものブントの官僚的な説得ですが、実は現思研のみんなもやりたいのです。昼間部に頼まず、夜間部に頼んできたのは、昼間部は中大全学連社学同系集会に参加動員のためだったかもしれません。

とにかくみんなでワイワイ話し合っ、「やってみよう」ということになりました。社会的な影響や責任は問われるな……と思いつつ、新宿駅のヒッピーやフォークソングの広場まで制圧しようとするこの間の警察の強権や、日大を含めた街頭抗議も続いて、「4・26闘争のお返しとして駅前交番を占拠して赤旗を立てよう」などと、ゲリラ戦術になると、みんな次々とアイデアが浮かびます。二部の学生が授業の始まる直前の5時ころには、御茶ノ水駅から明大前通りは、昼間の学生あわせて歩道をはみ出すほどの人でいっぱいになります。その時を狙おうという

ことにしました。それに、私たちの多くは、仕事をもって勤めていて、昼間から参加できる人は少ないのです。中大で行われる全学連社学同の決起集会も夕方には呼応できるし、5時半の授業開始前に闘いを始めることにしました。

(8号館)

明大前通りとマロニエ通りの角に立つ8号館は学生会館の旧館で、各学部自治会室、生協事務室、それにサークル部室が入っていて、ちょうど、明大前通り側に小さなドアがあります。この8号館のドアの内側に5時ごろ集合することになりました。それまでに、このドアの近くに長椅子と長机をできるだけ多く集めて積んでおくことにし、昼間部の仲間も手伝ってくれることになりました。学館旧館(8号館)の明大前通りに面した小さなドアは、すぐ歩道から車道に続いているので、5時になったら一斉にそのドアから机と椅子を車の通行を止めるために車道に並べて、バリケードにしようということになりました。この明大前通りも車の往来はひっきりなしです。それには、たくさんの椅子と机がいるな……などと話していました。

6月21日、初のカルチェラタン闘争が始まりました。この日、現思研や居合わせた社学同の仲間や政治的には関係ない友人たちも、午後のうちに、教室から長椅子と長机を持ち出して、学館旧館ドアの内側にきれいに積み上げました。入り口は狭いけど奥行があり、いくつも積むことはでき、通路も確保しているので、出入りの邪魔にはなりません。「正門のバリケード封鎖もこんなもんだった。これくらいで大丈夫だろう」と話しながら準備を終えました。

5時ごろ、現思研の仲間ははりきっていたけれど、職場からまだ戻ってこれない人もいました。どうしようか。入学して間もない法学部のKくんが、「決めたとおりにやりましょう」と主張したので、彼を見直して、そうだね、そうしよう、と、そこにいた10人くらいの者たちで2人1組になって、まず長机を運べば道路に5つの机を横に並べられるというので、じゃあ、始めようと決断しました。Kくんらが、まず、少し場違いな感じて恥ずかしそうに長机を道路に運びだして、明大前通りの真ん中に

置きました。途端に激しいクラクションが鳴りわたりました。一人が赤旗を横にして、工事現場のスト



トップのような合図をして笛を吹き、車を止めようとしてきました。怒った車の運転手は徐行し、クラクション鳴らしながら次の机が運ばれる同じころ、最初の机に前進して接触し、机を倒しました。本当にアッという間でした。ピーッと笛と共に、あちこちから学生たちが道路に飛び出してきて運転手の車を囲み、もたもたしている私たちの机を奪うと、さっさとバリケードを作り始めたのです。そして赤旗に誘導されて車は中華料理「味一番」のある狭い通りへ迂回し通行するよう

学生たちが采配しています。

中大中庭で、社学同のアスパック粉碎・東大闘争支援の全学連集会を行っていた1,000人近い



全学連部隊がタイミングに合わせて行動を開始したらしい。中大では午後から、全学連副委員長の中大の久保井さんや、同志社大の藤本さん、明大学生会中執委員長米田さん、東大全共闘、160日ものストライキ中の医科歯科大など、全学連の社学同系の部隊が、独自の集会を開いていました。機関紙「戦旗」によるとヘルメット部隊1,000人、集会3,000人とのことです(当日の毎日新聞では500人とのこと)。それによると、集会を終えて4隊に分かれてジグザグデ

モで街に繰り出したのです。それにあわせて、私たちのバリケードが解放区がはじまったのです。あたりを見まわすと、「待ってました！」とばかり、学生たちや勤め帰りの人らしい人々も、バリケードを補強して、どんどんその机・椅子を担いで御茶ノ水の駅の方へと移動して解放区の陣地を押し上げて広げています。ふりかえると、駿河台下では、正門よりずっと向こう側にむかって交差点のところまで机を運んでいる人もいます。工事用の看板なども集めてきて、たちまち御茶ノ水駅から駿河台下まで、またたく間に解放区が出来上がってしまいました。車の通らない「歩行者天国」の道路をジグザグデモがあちこち繰り出しています。さっそく立看に「解放区」・「反安保反戦の砦 神田カルチェラタン戦闘中」など、御茶ノ水駅近くの通りの真ん中に立てました。あたりは万を超える人々が道路でデモしたり、踊ったり楽しんでいました。当時の「戦旗」には、こんな風に当日のことを記しています。



(6・21全学連駿河台で2万余のバリケード集会)

(70年の新局面切り拓くASPAC(アスパック)粉碎第二波機動隊を圧倒)

全学連集会は中大中庭で1,000人のヘルメット、3,000人の大集会として行われた。2時45



分、久保井司会で開始、藤本基調報告、東大時計台占拠で全学ストを喚起した東大全学闘争委員長、160日スト中の医科歯科大、熊本大の原島委員長、明大中執からの決意表明。4時半に4隊に分かれて中大を出発。神田駿河台一帯をジグザグデモし、一梯団が医科歯科への支援デモを敢行する最中、その三梯団はバリケードを駿河台通りの街頭に進出させる。パリのラテン区に比すべき学生の街神田一帯は、まさに反戦闘争の砦として出現する。5時半、機動隊は御茶ノ水駅、駿河台下の両方向から全学連の部隊を挟み撃ちしようと攻めてくる。激しい投石の雨を降らすが、機動隊は

バリケードをトビで破壊して迫ってくる。一進一退、数千の学生・市民・労働者もバラバラと投石。機動隊後退。再びバリケードが出現し、御茶ノ水駅まで押し返す。機動隊はいったん、御茶ノ水橋を渡り、順天堂大横まで総退却。この時、医科歯科大5階の学生・研修医が占拠している医学部長室辺からスピーカーでバリケード戦に結集し、連帯の呼びかけ。機動隊は態勢を立て直し聖橋口から御茶ノ水橋に配置し、横と正面からバリケードの破壊。『突如』出現した街頭バリケードがASPAC、70年安保粉碎の新たな戦術であることを理解して、万余にふくれた大衆は『機動隊帰れ!』のシュプレヒコール」と興奮気味に記録しています。

実際、当日は、みな、新しい闘い方に大興奮でした。いったん、バリケードで解放区ができると、あちこちからうっぶん晴らしの野次馬含めて、万余の学生たちがバリケードと投石で陣地を広げます。御茶ノ水駅前交番も避難し、無人となったのです。すかさず明大の仲間が赤旗をその交番に掲げました。広々とした明大前通りにフランスデモで道いっぱい手をつないでワルシャワ労働歌や国際学連の歌を歌いながら行進しては機動隊へと投石。今ではあの一帯の歩道はアスファルトで固め

られてしまいましたが、当時はレンガや正方形の敷石で歩道がおしゃれだったのです。この敷石をみんなで掘り起こしては、車道で力いっぱい落として割り、礫(つぶて)にして抵抗しました。ポケットいっぱいにつぶてを抱えては、最前線から機動隊へ投石を繰り返しました。機動隊もたちごっこを止めて遠巻きにし始めたので、その間、赤ヘルメットの大衆集会、歌やジグザグデモが夜まで続きました。8時半すぎには、社会学部隊は撤収したのですが、野次馬や一般の人たちは、機動隊との攻防に普段のうっぶん晴らしもあってか、ずっと闘っていました。夜学授業が終了する10時にも、学生会館内には勝利の戦術に「やった！ やった！」と喜ぶ人々でいっぱいでした。

これ以降、カルテラタン闘争のスタイルは、何度も御茶ノ水駅のこの明大前通りから駿河台下までを「解放区」として戦う戦術を繰り返しました。今からは考えられない「騒乱」ですが、当時の私たちは街頭戦の新しい闘い方を提示する一翼を担ったことで、現思研としては達成感で意気揚々でした。今から見れば無謀の誇りを免れない行為といわれるでしょうが、当時はこういう楽しい開放感と、一つの戦術の小さな勝利感と、人々との連帯感が、学生運動の拡大をつくりだしていったと思います。東京における社会学部の拠点は、この地域、明大、中大、医科歯科大、専修大、東大、慈恵医大など、御茶ノ水と神田にありました。その分、社会学部仲間には何かあるたびに、中大と明大の学館に集まって語り合ったものです。

68年は、このように、反戦闘争が社会的にも日常化していたので、佐世保の住民や、王子野戦病院に反対する住民、三里塚の農民と共同し、国会の社会党、共産党などの野党勢力の力もあって、正義感を持って闘いを続けえたのだと思います。公正・正義を求める闘い、その一員として参加できることが喜びであり、闘争は楽しいと実感していた時代です。全面的に肯定しえない点もありますが、当時は非暴力直接行動の中で、様々な野党勢力と共闘しながら戦おうとする、謙虚さがありました。

しかし問題は、その後、私たち社会学部や三派系勢力が「図に乗って」いき、佐世保や王子、三里塚など、住民の支援と連帯に支えられて闘いえたことを、自分たちの力と自惚れて、運動の急進化へとまっしぐらに進んだことです。党派による戦術の急進化の競合は、後の分裂や運動の否定面を広げていきました。その苦い後の教訓とともに、68年の朗らかな闘いを思い返します。

5.三派全学連の分裂—反帝全学連へ

冷静に社会全体から捉えれば「大学生」は、当時一部の比較的余裕のある世帯の者か、向学心の強い苦学生で、就学率は今のようになかったとは言えません。

その分、学生運動がラディカルに問題提起し、街頭で激しく戦っても革命のような「社会全体を揺るがす力」があった訳ではありません。

しかし時代は、反戦・平和を強く求めている、自民党政権の政策には反対する市民も少なくありませんでした。社会党、共産党、公明党も安保反対・ベトナム反戦を掲げていて、国会でも野党の力は強かったのです。そして社・共・公を支える労働者、学生の中には、ラディカルな学生たちの戦いに共感する者たちも、この68年には多くいました。

ベ平連、全学連と三里塚闘争でも学生たちのラディカルな戦いは、社会的に孤立していた訳ではありませんでした。

でも10・8羽田闘争を経た三派全学連は「我々こそが、権力に対峙してきた」という自負と共に、自己評価が高く、他勢力を批判する事で自らの立場を固めるような風潮であり、傲慢でした。個々は

どうあれ、「組織」の立場になるととても柔軟性はありません。こうした在り方が、「一国一党」のボルシェヴィキの主張したコミンテルンの加盟条件の教条からか、「唯一性」神話に拘り他党派を認めず、自らの党の「無謬性」を主張する競争に、党派闘争を落とし込めて行きました。後知恵と言われるかもしれませんが、当時の私たちの運動は、人の認識能力は可変であり、誤りを犯す事を前提とするような開かれた思考を取らず、「正しさ」と自己正当化の論理を繰り返す、日本型マルクス・レーニン主義の悪習があったと言えるのではないのでしょうか。

日本共産党も例外では無く、当時はその「唯一の党」の「正しさ」によって、反対派を排除して来た歴史の中心を、むしろ成していました。「党」を名乗る他の集団は認めず、排除するのは戦前からの共産党の負の側面ですが、それは戦前の国際共産主義運動の基本的考え方でした。

それを引き継いだ三派全学連も日本共産党批判ばかりか、三派内での権力闘争—正しさを主張し合い、運動、人事面での優位性争い—が絶えなかったと思います。

ラディカルな戦い方、動員人数、理論、全てにおいて話し合い、同志的な切磋琢磨よりもヘゲモニー争いは、暴力で決着をつけようとする、およそ「指導される人民」から見たら、理解しえないやり方につながって行きました。

こうした暴力を取り入れたヘゲモニー争いは、結局分裂に結果します。ブントは中核派に対して、中核派はブントに対して対抗意識が支配していたと思います。

68年7月に第19回全学連大会が予定されました。中核派は、7月14日からの大会を主張していましたが、反中核派の社学同らはその前に全学連中執会議を求めており、秋山委員長の罷免を要求していました。その理由は、6月に中核派が拠点としていた東京工業大学、東洋大学(自治会)で民青系に敗れ執行部を中核派は失っていました。つまり主流派中核派の実際の自治会数は減っていて、主流派たり得ない事、それを隠して会議を開かなかったというのです。

反主流派の要求する全学連中執会議を中核派は拒否しました。中核派は、7月14日には全学連の中核派の

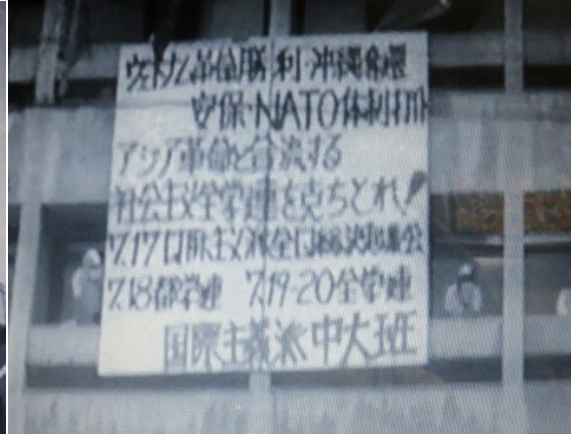
ヘゲモニーを維持する事を最優先して、妥協せず単独で全学連大会を強行する事になったようです。

当時全学連大会のために、私たちは中央大学学生会館に待機していたのですが、人事での妥協が成立せず、一方的に中核派が全学連を分裂したと聞かされました。そしてこの中核派の独走に対してブントは、7月17日に社学同第8回大会を緊急に開きました。

中央大学学館での社学同大会では、今後の社学同方針、つまり反スタ中核派と訣別して、ブントは解放派やML派、第四インターの組織と共に、反帝全学連の結成に進む事を決定しました。

こうして、中核派の大会に対抗して、社学同・社青同解放派・ML派・第四インターなどが、中核派の大会を認め無い方針で別個に「第19回全学連大会」を開催するとの事でした。





私たち現思研も、この新しい第 19 回全学連大会に参加しましたが、中央大学の講堂で行われました。この 7 月 19 日の会議に中核派が暴力的に大会破壊に来ると、防衛隊を立てて、何度も「来たぞ！」と会議を中断する騒然とした中で、大会が行われました。

私たちに、まったく理解出来なかったのですが、この「反中核派連合」で今度は揉め始めました。全学連大会前の都学連大会から、社学同と解放派・ML派で揉めていたようです。



私たちは、中央大学の講堂から対立に対応すべく行動するよう指示されました。相手は中核派と聞いていたのに、今度は反社学同で解放派とML派が野合して襲ってくるというのです。それで、数十メートル離れた中央大学学生会館に社学同だけ引き揚げる事になりました。「何なんだ？ どうして解放派やML派と争わないとブントや全学連が成り立たないのか、さっぱりわからん」と、現思研は皆呆れて「今後はこういうゲバルト戦には、我々は参加しないことにしよう」と決めました。明治大学に引き上げる者もいました。今でも当時の事情は、良く判りません。人事をめぐる争いや手続き上の問題での対立が收拾がつかなくなっていったのでしょうか。

私たちは、意味も判らず、明治大学に戻ろうとしましたが、とにかく中央大学学生会館に集まってくれというので、学生会館に入りました。

当初は、中核派に対する防衛についていたはずで、今度は解放派・ML派と対決になったというので、中央大学学生会館に入ると、またすぐ防衛体制が取られました。

既に私たちが中央大学の講堂から学生会館に移動する後方から「ブント粉碎！」と叫ぶジグザグデモが近づいて来ましたが、これは中核派では無く、解放派だというのです。会場を出てみると、

青色のヘルメットが見えました。それで何故か「引き揚げろ！」という緊急指示がどこからか来て、デモの隊列を組みながら、私たちも中央大学学生会館へ引き揚げました。

これは7月19日だったと思います。緊張し、バタバタしている一方で、昼から食べていない缶詰状態にいたので、みんなお腹を空かせていました。全学連書記局の人や藤本敏夫さんは、自分たちの食糧の調達をして来て欲しいと言うのです。解放派やML派が攻めて来るというのに、のんびり食事しているのか？しかも、自分たちの分は、調達しても他の大勢の人たちの食事はどうするのか？その内、「ワッセイ、ワッセイ」というデモの響きと「ブント粉碎！」と叫びながら、学生会館入口の所で激しい衝突になりました。



解放派は、早稲田大学学費闘争の時の議長だった剣道の達人という大口昭彦さんを先頭に、ML派は新左翼で一番強いと噂されていた畠山(嘉克)(東海大学)さんを先頭に樫や桑の棒や竹竿で襲いかかって来ました。中央大学学生会館はまだ新しいのに、たちまち入口のガラスは叩かれて割れ、ヒビが入ってしまいました。



襲撃隊が来ると、同志社大学や中央大学、明治大学のゲバルトに慣れた者たちが迎え撃つのですが、私たちががっかりしたのは、みんなに「突っ込め！」と檄を飛ばしている高原浩之さんと藤本敏夫さんは、後から叫んでいた事です。

私や遠山さんも、安全な後方に逃れつつ評論しているに過ぎないですが、「文句が出る筈ね、解放派もML派もリーダーが先頭で突っ込んで来るのに、こちらのブントのリーダーたちは全然ダメ。後から進め進めじゃ、やる気しないわねえ」などと言っていました。

私たちも当事者意識に欠けて無責任なのです。

久保井(拓三)さんら中央大学ブントは、先頭にいるのが見えました。動員されて前方で防衛していた何人かの現思研の仲間も、「ブントはどうなってんだ」と不満を述べていました。本当にゲバルトを止めるのに身体を張らず、ゲバルト指示にも身体を張らないのですから。

その後何度かの電話交渉でやっと襲撃が終わったらしく、夜遅くまで続いた襲撃は一旦止み、書記局の人に催促されて、私たち数人の男女は、食事調達に行くことにしました。もう夜中で、調達出来るのは、神保町のいつも行く中華料理店で焼きソバを箱に詰めてもらう事です。何十食分か詰めてもらい戻って来て、それを皆で分け合って食べたのを思い出します。私たちは夜更け、一旦明治大学に戻りましたが、翌日の交渉で解放派もML派も、第19回全学連大会をやるかと合意したらしいのですが、結局ボイコットされてしまいました。その結果、7月21日、ブントだけで第19回全学連大会を開催する事にしたようです。こうして、ブントだけの「反帝全学連」結成の為に第19回全学連大会が21日と22日にわたって開かれました。私自身は、熱心なブント路線の信奉者でも無かったせいも、当時の内容の事は、あまり覚えていません。

「戦旗」によると「21日午後10時40分170代議員中、101名が出席して第19回全学連大会が行われた。途中緊急事態が発生し、大会防衛を強化し午前1時20分に再開。委員長藤本敏夫、副委員長久保井拓三、書記次長に村田恒有(医科歯科大学)らが執行部となった。閉会に際して、ブントの松本礼二が挨拶した」と記録しています。

こうして68年7月の間に、「中核派全学連」と「反帝全学連」に分裂していった訳です。もともと路線的には「反スタ戦略」の中核派とは、上手くいくはずが無かったとしても、大衆機関である以上、暴力を排した統一戦線を構築する戦略的な組織方針を持ち得ない、双方の未熟な指導が原因としてあったと思います。

当時「内ゲバは逃げるが勝ち」だと思ったものです。争いの当事者以外の非当事者をどう味方に引き付けるか政治戦でこそ、非暴力的に党派闘争を示して欲しかったものです。

この分裂で、「反帝プロレタリア国際主義」を中心に据えようとするブント・社学同の路線・反帝戦略は、これまでのような中核派との「消耗な」論争やゲバルト戦に制約されずに進む事になりました。しかし、戦術のラディカルな街頭闘争スタイルは、中核派もブントも、三派全学連時代同様、むしろそれ以上に競合しあって、運動的突出に価値を置く戦い方に、組織力量を傾けていくことになっていきます。

No552 重信房子 「1960年代と私」第二部第8回（1968年）

第2章 国際連帯する学生運動

6. ブントの国際反戦集会 — 1968年8月3日

当時の私に「新しい変革の時代」を知覚させたのは、67年の「10・8闘争」であり、生涯を教育の場で社会活動を続けていくことを考えさせました。そして、また、そうした考えに、より明確に世界、国際的な闘いの必然性を自覚させたのは、68年の8月3日に行われた「国際反戦集会」です。

世界各地で闘っている仲間が集い、語り合い、世界の一翼として私たちの闘いがあるのだと、海外参加者らと共にインターナショナルを歌いながら強く刻まれ、感動したのです。この「8・3国際反戦集会」は、三派全学連の分裂を早くから予測していたであろうブント指導部によって、情勢を切り拓く大切な節目だったに違いありません。

68年の春ころ、専修大学の前沢さんから「今度、我々ブントの力で、時代のオピニオンリーダーたる一般誌を出すので、協力してくれないか」と、突然誘われました。5月頃にも「フランスのカルチュラタンの闘いに示されるように、学生・労働者は政治闘争ばかりではなく、いまでは、文化・芸

術含め、変革のための総合誌が問われている。8月の国際反戦集会の前には、その創刊号を出すつもりで準備している。君は、文芸サークルで編集長もやっていたので、よっちゃん(松本礼二ブント前議長)と話して、君に加わってもらいたいと思ってさ。考えといてくれないか」と言われました。確か、学館の現思研の部屋に訪ねてきたのです。



その本のタイトルが、すでに『情況』と決まっていたのかどうかは思い出せません。「無理です。ちょうど卒論執筆を計画しているところだし、文学雑誌と、ブントのイニシアチブの本では、まるっきり違うし、関わりたくても無理です」と即答しました。松本さんとも会い、誘われましたが、左翼雑誌の編集には興味が湧きませんでした。そのころ京大のブントの小俣さん中心に、明大ですでに8・3集会のための様々な準備が始まっていました。

68年、「8・3国際反戦集会」は、中央大学の講堂で行われました。この国際会議は、「国際反戦会議日本実行委員会」として6団体(共産主義者同盟、社会主義労働者同盟、社会主義労働者同盟ML派、社会主義青年同盟解放派、社会主義青年同盟国際主義派、第四インター日本支部)このうちのML派や解放派は、7月に小競り合いの末、ブントの反帝全学連が結成されていたので、その後のいきさつを詳しくはわかりませんが、共同していました。日本実行委員会は機能し、東京の「8・3集会」ばかりか、他のいくつかの都市でも行っています。

8月4日には、国際反戦関西集会も共産同関西地方委員会、日本共産党解放戦線(上田等さんら)、社青同国際主義派、第四インター、解放派、ML派、毛沢東思想学院など、広い共同行動の中で大阪厚生年金会館に約1,000名を集めて開催されています。また、海外からの参加者らは、ヒロシマ8・6の原水禁集会や、ベ平連の京都ティーチイン集会にも参加しています。

来日したのは、まずSWP(米国の社会主義労働者党)委員長のブレッド・ハルテットさん。彼は7月28日羽田空港に到着した折、日本の通関当局より「原水禁、ベ平連への参加はかまわないが、8月国際反戦集会への参加は認められない。参加の場合には、強制退去を命ずる」と、入国時にその条件付の書類に署名させられました。この事実は、8・3国際反戦集会の中大講堂の席上、ハルデットさん自身が暴露し、抗議しました。それほど、三派系のラジカルな闘いと、米国のラジカルな運動の接触に、公安関係者は神経質になって、妨害を企てたのです。他の参加団体は、米国からはSNCC(米国・学生非暴力調整委員会)、前委員長のカーマイケルは、当時日本でもよく知られていました。ブラック・パンサー党、当時黒人の間に絶大な人気があり、黒人の権利を闘いによって勝ちとっていた団体です。OLAS(ラテン米人民連帯機構)、この組織は、67年7月にキューバを中心に創設され、チェ・ゲバラが当初名誉総裁で、ハバナに本部があります。SDS(米国・民主社会学生同盟)、SNCCが黒人中心の組織なのに対し、SDSは白人組織で、反戦反徴兵、ベトナム反戦闘争を中心に学生パワーを発揮し、カリフォルニア・バークレー校が拠点で、本部は、シカゴのイリノイ大学といわれていました。以上は米国からの参加団体です。仏からはJCR(仏・革命的共産主義青年同盟)、1966年4月に創設されています。JCRは50年代のアルジェリア解放闘争支援、キューバ革命支援を行い、65年大統領選時に、仏共産党の共産主義学生同

盟を除名されたメンバーの他、トロッキストのメンバーを含む組織で、5月パリ革命の先頭で闘った組織です。その結果、ドゴール政権によって非合法化されたため、ブリュッセルに本部を置き、地下活動を続けていると、この会場で代表の女性が発言していました。

ドイツからはSDS(西独・社会主義学生同盟)、西ドイツの社会民主党の学生組織ですが、ドイツ社民の大連立に反対し、中央に従わず、ベルリンで1万5千人のベトナム反戦集会を開いたといいます。北大西洋条約機構(NATO)の粉碎を訴えています。理論的には、マルクーゼ、ローザルクセンブルグ、ルカーチの影響が強いといわれていて、委員長のドチュケは銃撃被害に遭っています。



以上のような海外からの参加団体を加え、実行委団体や学生、市民参加のもと、8月3日、東京集会が開催されました。この東京集会は、中央大学講堂で2時10分に開会宣言され、日本実行委員会委員長松本礼二さんが開会の挨拶と経過報告を行いました。その後、海外からの参加団体の紹介があり、この時、SWPの代表のハルテットさんから、すでに述べた国外追放の制約を受けながら参加したことが語られると、拍手は講堂を揺るがすほどでした。



その後、仏代表の女性が、パリ5月革命がいかに闘われてきたか、今も非合法化でいかに闘っているか、5月に労働者の一千万人ゼネストがいかに行われたか語ったのが、私には強い印象として目に焼き付いています。同世代のふっくらとした体型の女性が、舌鋒鋭く、ゼスチャーも交えて語る時、通訳がもどかしいくらい共感しつつ、他の誰よりも印象深かったのです。集会には、日本の闘う団体も招かれていて、戸村一作三里塚反対同盟委員長が、連帯をこめて演説したのを覚えています。また、ML派の畠山さん、解放派の大口さん、ブント議長の佐伯さん(佐野茂樹)ら、6団体トップの人々が、それぞれ自分たちの政策を表明していました。



その後、SNCC、SDS、SWP、JCRなどが参加し、「NATO・日米安保粉碎共同闘争」を呼びかけ、全国各地で反戦集会を行っています。そして、国際連帯の絆を、新しいインターナショナルの形成として呼びかけました。

この時のブントの呼びかけた「8・3集会論文」は、プロレタリア国際主義を掲げるブントの新しい旗印となりました。「8・3論文」と呼ばれるもので、「世界プロレタリア統一戦線・世界赤軍・世界党建設の第一歩を—8・3国際反帝反戦集会への我々の主張」というタイトルの論文です。第一章は「現代過渡期世界と世界革命の展望」というもので、これを塩見孝也さん、のちの赤軍派議長が執筆しました。第二章は「70年安保・NATO粉碎の戦略的意義」で、のちにブント議長となる仏(さらぎ)徳二さんが執筆し、第三章は「8月国際反戦集会と世界党建設への道」で、旭凡太郎(のちの共産同神奈川左派)によって執筆されました。これは、8月5日の機関紙「戦旗」に発表され、この8・3論文を、2つのスローガンにまとめました。



「帝国主義の侵略・反革命と対決し、国際階級危機を世界革命へ！」「プロレタリア国際主義のもと、全世界人民の実力武装闘争で70年安保・NATOを粉碎せよ」と。

8・3国際反戦集会に結集した組織と共に、新しいインターナショナルの潮流形成をブントは目指していました。そして、第一に69年には、NATO・70年安保粉碎を共に闘う。第二に、日米安保・沖縄・ベトナム闘争を、環太平洋諸国の武装闘争・ストライキ・デモで闘う。第三に佐藤訪米を、羽田・ワシントンで共同して阻止する。第四に、来る10・8、また10・21を国際共同行動で闘う。第五に、国際共産主義インターナショナルへ向けて、協議機関設立の準備、国際学連の再建を目指す、とする方針を主張しました。国際社会に触れ、国際的に各地で闘う主体と直接に出会い、この出会いに国際主義のロマンを抱いたのは、私ばかりではなかったでしょう。ブントの指導部から一般メンバーまで、ブントのプロレタリア国際主義が、世界の闘争主体とスクラムを組んで闘っていくという、誇りの実感を強くしたのです。

最後に各国語で一つの歌、インターナショナルを歌いながら、感激した私は胸にこみあげるもの



がありました。この8・3集会のために、現思研の仲間たちもいろいろな実務を手伝ってきました。英文タイピストのSさんは、集会まで徹夜の作業を続けたりしました。

現思研の仲間たちが、私も含めて、ブント・社学同に対して、自覚や愛着を持ったのは、この集会の影響が強かったと思います。

国際反戦集会は、分裂して生まれたばかりの反帝全学連にとっても有利に作用していました。国際的な各

国闘争主体との出会いは、日本を代表して、ブントらが実践的に国際主義を実体化する条件をつくりました。この国際反戦会議の決定として、新しいインターナショナル創設の協議機関設立や、来年69年8月の再会を約し、闘いの連帯の継続の方法も語り合いました。

しかし、ブント自身は激動の68年の中で、69年内部論争を先鋭化させ、この晴れやかな国際反戦集会を境にして、矛盾と分岐を拡大させてしまうのです。1年後の69年に米国からのSNCC、ブラックパンサーの訪日に彼らの受け入れの矛盾は哀しい現実となるのですが、それは、「7・6事件」の後だったからです。

7.全国全共闘の波

全国に、全共闘運動、学園闘争の波が広がっていったのは、いくつもの要因がありました。

第一に、日本の資本主義の戦後の成長政策によって、経済的、社会的に歪みが出来、再編成が問われていた事です。インフレや企業の海外進出など、これまでと違った社会、経済的必要が、教育の場に立ち現れていました。大学は産業に見合った教育を求められ、マスプロ教育に向かいました。大学は学究よりも経営論理を優先し、60年代は学費値上げ、学生会館や寮の管理の強化、カリキュラムの改編などが行われるようになると、大学における「学問の自由」「自治」の侵害、教育の危機に敏感に反応した学生、教職員の中から、それに反対する意志と行動が育ちました。第二は、こうした変化の時代の中で、各大学において民主的手続きに則って、学生大会でストライキ権を確立して、自治し自衛する学費値上げ反対や学生会館の管理運営権を巡って戦ってきました。しかし、多くの大学で、大学当局による機動隊導入などの強権的やり方もあって、それに抗議しながら運動は、ラディカルに成らざるを得ない環境がありました。

戦後民主主義の中で、「全員加盟」による形式的民主主義の自治会を「ポツダム民主主義」として質的に否定しつつ、より主体的な参加方法であり、直接民主主義の原初的な意志表示として、自治会と相対的別個の闘争機関の設置が求められるようになりました。いわゆる「全共闘方式」です。この闘い方は、再建された65年12月の全学連大会でも闘争機関を設置して闘うことを方針化し、早大、明大の「学費闘争」でも闘われています。

第三には、国際的な反戦運動の広がりが高揚の中で、日本でも戦い方に変化が生まれた事です。その戦いの変化の一つは、67年10・8羽田闘争によって飛躍した街頭行動の実力闘争化、ラディカル化であり、これは党派間の競合もあって、先鋭化して行きました。もう一つの戦い方の変化

は、ベ平連運動に示されました。これは、作家の小田実ら当時の人々の唱えた戦い方で「我々」では無く「私」から出発し、自分たちの自主的な参加で自分たちのやり方で好きにベトナム反戦と平和を訴えたスタイルです。フォークソングや文化・芸術的な広がりも、ラディカルな学生たちと連動しつつ意志表示されて行きました。

学内の問題を解決するために、各大学で闘争機関(共闘会議や闘争委員会)が設置されて行きます。大学、高校で自発的に戦う学生は、党派やベ平連運動を踏まえつつラディカルでかつ自発的な学内の課題を戦い抜く活動スタイルを全共闘運動として作り上げて行きました。それは、瞬間に全国の学園闘争のスタイルとなって、68年から69年、もっとも高揚して戦われました。

68年の東京大学での処分撤回闘争、日本大学での巨額の使途不明金への糾弾など、とくに全国に、「全共闘方式」の戦いが広がって行きます。

大学で少数派グループであっても、自治会の多数決原理による「ポツダム自治会」の代行主義を脱した戦いが生まれて行きました。

これらを「全共闘運動」と総称して呼ぶようになります。直接民主主義にもっとも近い形で、自発的な戦いの場として積極的に位置づけられたのです。学生の大衆運動を集約する闘争委員会の主張が大学当局によって不当に弾圧される分、学生の支持は広がり続けます。

68年5月27日に結成された日本大学全共闘は、大衆団交を掲げてストライキ戦を戦い、東京大学では、医学部全闘委、医学連による6月15日から17日の安田講堂占拠に対し、大学当局は機動隊を17日導入して戦いを終わらせようとした事で、逆に全共闘運動が広がります。最高学府と言われる東京大学と、日本一のマンモス大学である保守の牙城日本大学の首都圏の戦いが、全国の全共闘と呼応して広がりました。



9月4日から6日、日大全共闘は、経済学部校舎へのバリケード破壊・機動隊乱入と激しく戦っています。9月4日、強制執行で経済・法学・本部のバリケードが破壊され、132人が逮捕されると、2,000余名の学生が抗議集会を開き、ただちにバリケードを再構築しました。翌日には早朝機動隊が再度破壊しましたが、再度5,000名が抗議デモを開始し、7,000名で再びバリケード構築と、生産工学部もストに突入します。9月6日には法・経4度目の占拠・バリケード構築と激しい闘いが続きます。日大・東大を軸に全国の学園闘争は「闘争委員会」「共闘会議」等を結成して連帯しつつ、自分たちの学校の闘争課題も掲げて戦います。

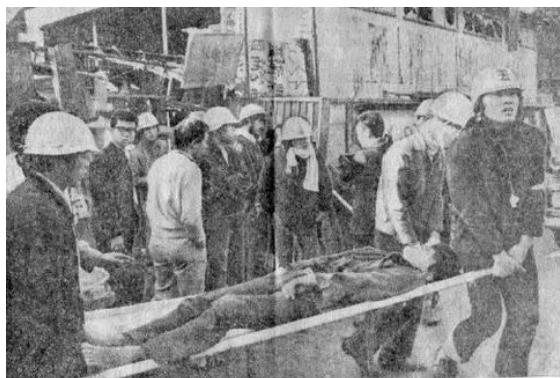
9月30日には日大全共闘は、両国講堂で大衆団交を行う事を古田会頭ら大学当局に約束させました。当時の状況は、日大闘争ドキュメントの中で次のように記されています『古田は大衆団交

に出て来い』の声は、両国講堂を揺り動かし、全共闘の断固たる決意の前に、3時30分、古田会頭を始め理事、学部長20名が姿を見せた。全共闘は、抗議集会を続行し、度重なる弾圧と分断工作に抗議した。(中略)この日スト突入後百十三日目にして、古田理事会は、10万学生の前に姿を現し、自己批判し、自治権確立の諸政策を確約したが、それは日大闘争の新しい序幕であった」(『叛逆のバリエード—日大闘争の記録』三一書房1969年)

まさにその通りでした。両国講堂には4万人を超える学生が抗議に詰めかけていました。

官憲と一体となった日本大学は、一方で右翼・ヤクザ・暴力団を雇って、学生の抗議行動に対する破壊工作を行い、他方で法の悪用によって闘争指導部を非合法化し、運動潰しに乗り出して行きます。ことに、日本大学に関しては、時の佐藤首相までが10月1日に「日大の大衆団交は認められない。政治問題として対策を講ずる」と発言すると、翌10月2日、日大当局は「9月30日の確約破棄」を宣言しました。

最早、各個別の学園闘争は、政局として日本の政治情勢の反動化の分水嶺をなす事態を示したのです。この大学・政府一体の露骨な弾圧は、10月4日、日大全共闘秋田明大議長以下8名に逮捕状を出したのです。



そして、11月8日になると日本大学の江古田に右翼「関東軍」が殴り込みをかけ、激しい死闘が続きました。日大芸闘委(日本大学芸術学部闘争委員会)は反撃し、6時間の激闘の末に、暴力団を撃退したのは、当時の学生運動の中で語り草となっていました。

佐藤政権の強権的な姿勢は、全国の大学当局を勢いづけましたが、日大のようなあそこまで、教育の場にヤクザや右翼暴力団を使った知性の欠片も無い暴力は、他にそう多く無かったように思います。

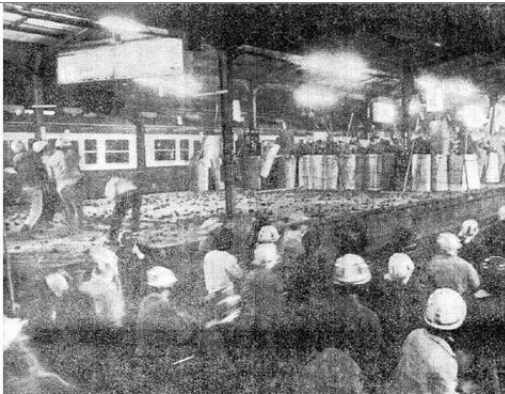
しかし、又戦いの攻防が激しくなると、日本共産党・民青系の勢力は「大学の正常化」を掲げ、当局と一体になって全共闘運動に対決しました。

この東大、日大闘争の激しい攻防の68年には、6月の神田御茶ノ水のカルチェラタン闘争以降、神田、御茶ノ水一帯に、度々解放広場の空間を出現させました。東京医科歯科大学も160日を超えるストライキを決行中であり、日大、東大、明治大学、中央大学、専修大学その他、御茶ノ水、神田の学生たちが闘争の度に「カルチェラタン闘争—解放区」を作り出しました。

全共闘運動が、報道などで全国に知られるようになると、都内、全国の高校でも高校全共闘の戦いが広がりました。そして、高校生が大学に見学応援に参加したり、大学生が高校生を助けたりしました。こうした高揚は又、各党派が更にラディカルに戦う方向へと影響を与えたと思います。

68年10.21の国際反戦デーは、各党派が自らの政治主張に則して実力デモの体制を取りました。

中核派・ML派・第四インターなどは、新宿駅を占拠して大勢の群衆と共に、深夜まで機動隊と渡

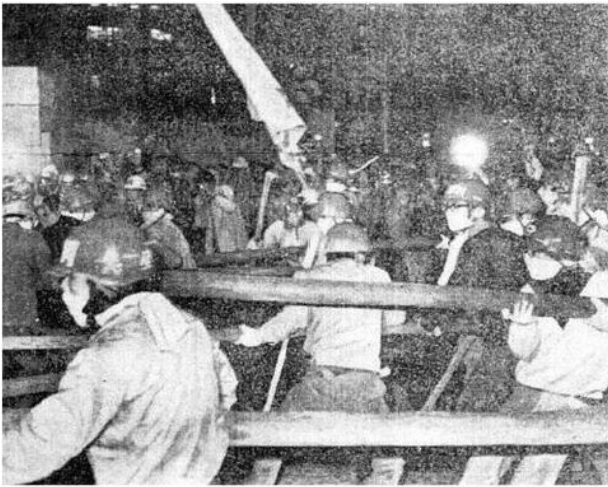


り合っていました。新宿の商店街では、駅周辺の敷石をアスファルトにして欲しいと陳情していたように、正方形の敷石を掘り起こして割り、投石の武器としていました。同じ頃、社青同解放派は、国会突入を目指し、ブント・社会学同は、防衛庁突入闘争を戦いました。

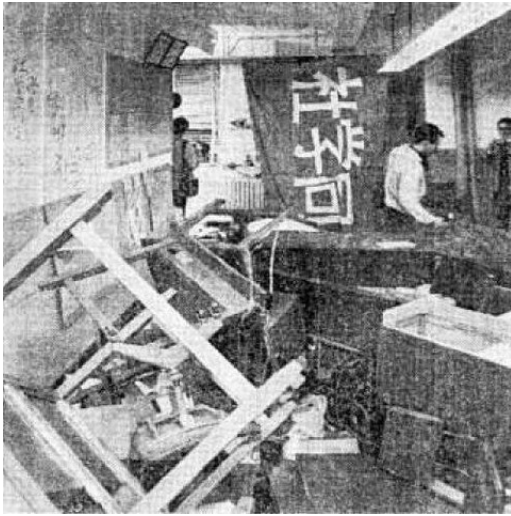
10.21 国際反戦デーは、私たちと同輩の仲間たち、早稲田大学の花園紀男さんや中央大学の前田祐一さんらの指揮で、突撃隊として防衛庁に突入すると知らされました。この闘争で火炎瓶を投げるかどうか、前日まで検討

され、結局使わないことになりました。代わりに、直径30センチ長さ10メートルの丸太棒20本を用意して突撃・突入を図ることになりました。

10.21 の計画は、大学を出る所から規制されないよう三々五々、六本木の防衛庁の集合地点に集まり、そこでデモの先頭に丸太部隊を配置して、正門を打ち破って 10.21 闘争を戦うと意気込んでいました。新宿、国会、防衛庁と、戦いを分散して機動隊の力を分散させる戦術かと思っただけですが、そうでは無く、ブントによると中央権力闘争を位置づけるブント・社会学同は防衛庁を選び、新宿闘争は、「自然発生性への拝跪」なのだと、中核派批判をぶっていました。



前田さんによると、最精鋭部隊を率いて御茶ノ水聖橋口から正面突破で国電に乗って信濃町で下車、明治公園間から乃木坂を経て防衛庁前正門まで何事もなく到着。別ルート of 部隊も着いて、一斉に正門鉄扉に丸太棒を担いで体当たり。庁内から高圧の放水と、攻防を1時間以上繰り返し、花園さんが正門をのりこえて庁内に入り、数人が続きました。そして、バリケードを築きインターナショナルを歌ったのですが、敵が押っ取り刀で駆けつけるには、時間が掛かったとの話でした。



10.21 当日には、私たち現思研も指示されたように、三々五々、六本木のどこかに向かう事にしました。旗を巻いて、九段方面から地下鉄に向かったのですが、振り返ると巻いた旗を持つ私たちの後に、明治大学の学生がぞろぞろ付いて来て、50人以上になってしまいました。現思研の仲間が付いて、小人数に分けて、六本木へと急ぎました。

メトロの六本木に近い出口は封鎖されていて、遠まわりして地上に出ました。「やってる、やってる」先頭の丸太部隊は、突入した後だろうか、私たちは、大通りを蹴散らされながら、何度も防衛庁へと接近を試みしました。夕方

には反戦労働者部隊も増え、青山通りで攻防をくり返しつつ、阻止線を突破出来ず、結局押し戻され、どこかの公園に集まりました。

「今ごろ新宿では大騒乱が始まるぞ、行こう」と、多くは戦い足らず、新宿へ回ると言います。私たちは、学生会館に戻る事にしましたが、その日の新宿は多くの野次馬的群衆も含めて大騒乱だったと、現思研の仲間も明け方歩いて帰って来ました。このように、当時の私たち学生運動の戦い方は、如何に攻撃目標に接近して戦果を上げるかという戦い方、いわば政治プロパガンダとしての実力闘争です。

8.3 国際反戦集会で語った世界革命や日本革命を具体的にどうするか？議会を議会主義と一方的に否定し、全力を街頭戦に賭けるだけでいいのか？革命の実現についてブントの先輩たちに聞くと、ロシア革命やボルシェヴィキ綱領を語り、一国綱領の時では無いと言うけれど、現在の日本政府の法の支配による延命を反転させる戦いが街頭戦のみでいいのか？と疑問はいつもありました。

この頃、社会党員を父に持つ現思研の真面目な下級生の仲間が、社会学同集会の後で「これって、人民のためになる戦いなのか？選挙に行く事もナンセンスなのかな」と私に問いかけて来ました。私はぐっと詰まってしまいました。

「『人民のため』なんて口幅たたくて言えない・・・『つもり』は世の中を良く変えたいと戦いの道へ入り、今もそれを出来る最善を尽くすしかない。だから選挙に行ったっていいのよ」と答えながら、どぎまぎしていました。

戦いと社会を結びきれない、教師になって戦うまでは、こうした戦い方しかないのか・・・。教師になったらどうな風に戦えるのか？尊敬していた『教育原理』を教えてくれた三木教授が、「教師になったら文部省の方を向いて教えるな、組合の方を向いて教えるな。生徒の方を見て教えろ」と、事ある毎に学生に説いていたのを思い出したものです。

この68年10・21は1000人を超える逮捕者を出しました。山崎博昭さんの虐殺から一周年の羽田闘争も200名弱が逮捕され、11月7日の沖縄闘争も500人弱の逮捕者が記録されています。権力は、党派ばかりか日大、東大を始めとする大学闘争のノンセクトの指導者たちにも、逮捕状によって非合法化し、運動を破壊しようと企てていました。

68年11月22日は、全共闘運動が全国の学園闘争に希望のようにその存在を刻印した日です。10・21闘争の「新宿騒乱」に見られたように高揚した反戦政治街頭行動を背景に「東大・日大闘争勝利全国学生総決起集会」が、東大の安田講堂前で開かれたのです。



当時、全国から党派をも含む2万人もの学生たちが集結しました。

正面に時計台の安田講堂、高く青い秋の空、色づいた銀杏の並木、そこはむんむんする程の熱気でした。各党派のカラフルなヘルメット、赤、白、青などです。それに後方から見ると、ヘルメット以外に真っ黒なヘルメットの無い頭と暗色のジャンパーやコートの上衣を着た壮観な学生たちの後姿の群れ。この日、弾圧の始まった日大闘争への支援と、11月1日ついに辞任した大河内東大総長に代わって加藤一郎総長代行就任によって東大闘争がこれから更に厳しい戦いに立ち向かうという決意を示す総決起集会でした。

10・21には、騒乱罪が適用され、既に日大全共闘議長に対する逮捕状も出ていました。

迫りくる権力の妥協を許さない弾圧を覚悟し、決戦を戦い抜く「造反有理」が宣言された日でもあります。既に占拠闘争を戦っていた東大も又決戦を迎えようとしていました。

秋田明大議長と共に、全共闘運動を牽引した東大全共闘の山本義隆代表は、後の69年9月5日の「全国全共闘連合結成大会」に向けた発言で全共闘について次のように述べています。

山本義隆代表自身は、この全国全共闘連合結成大会のために日比谷公園に入ろうとしていました。しかし、機動隊は公園の1ヶ所を除いて封鎖し学生たちは機動隊の人垣の列の間をヘルメット脱がされて歩かされています。この日、明治大学全共闘の隊列の中において見破られ、山本代表は逮捕されてしまいました。そのため、当日は山本代表の代理が基調報告しました。



「10・8以降の実力闘争の質は、東大―日大―教育大を先頭とする学園闘争に継承され、その限界も克服されて行く。ここに於いて、最も特筆すべきは『党派軍団』と『ポツダム自治会』の矛盾を大衆運動としての“全共闘運動”と言う形で止揚し、同時に大衆運動の次元で『帝国主義』大学の批判を通じて自己の社会的存在様式を全面的に対象化し得る契機を掴み取ったことである(中略)これまで闘争を進展せしめ得たのは、世論調査的多数派が普遍的意志を僭称する全員加盟制の形式民主主義に無前提的に捉われることのない(闘争委員会―全共闘)による闘争のヘゲモニーが体现されていったからに他ならない(中略)全共闘は、学園内において運動の党派的分断を克服し、大衆運動と討論を通じた党派闘争という正しい党派関係を復元し、同時に『自治会内左翼反対派』としての位置を離れ、左派の実体的ヘゲモニーを確立し、学生層の特殊階層的利害に拝跪することなく闘争を運動的にもイデオロギー的にも領導していった」と、全共闘運動を評価しています。

その考えは、当時高揚の68年を経た69年東大安田講堂攻防を超え、9月5日山本議長の逮捕状逮捕直前の評価であり、党派よりもより戦略的に現状を見ていたと言えます。私は、それを理解しつつも、当時批判され「ポツダム自治会」と揶揄された「民主主義」を大切にしたいと思ったものです。全学生に責任を負う、枷こそ大切にしたいし、大学の自治は自主管理を目指しつつも、枷を捨てては党派の介入など「暴走」してしまう危険もあると思ったためです。

私が明治大学で活動していた時代には、学費闘争のために66年12月1日の学生大会決議に則って作った闘争機関「全二部共闘会議」がありました。私たち反日共系はいわばポツダム自治会の学苑会の「主流派」を形成していたために、党派勢力が反対派的な位置から大衆運動的に自治会介入する必要はありませんでした。むしろ自治会と別個に学費値上げという中心課題の闘争機関を「全二部共闘会議」として持ち闘うことによって、自発的な闘争参加者が中心を担えたのです。同時に自治会活動に制約させずに闘うことができ、また、自治会自身を防衛する有効な方式であったといえます。

こうした全共闘運動は、しかし権力の非合法化策動と機動隊導入などの弾圧と戦いながら敗れざるを得ない力関係の中で、ラディカルに戦い抜かれました。ラディカルに戦えば戦う程、孤立を余儀なくされ、大学当局は厳しい退学を含む処分を科し、戦いのイニシアティブを取った者たちほど自己犠牲的に責任を突き付けられて行く時代になって行きます。

No557 重信房子「1960年代と私」第二部第9回 2021年11月

第2章 国際連帯する学生運動

8.現思研の仲間、遠山さんのこと

67年の春から、私を含む数人の社会学同メンバーが作った現代思想研究会(現思研)は、「社会学同や、社会学同シンパの会」と、他の党派の人々から認知されていたし、私たちもそれを肯定して出発してきました。活動の中心は、自治会、研究部活動に参加したり、イニシアティブを持つ者もいましたが、学外では社会学同の集会やデモに参加して来ました。67年には初の新生を勧誘し、その新生たちが、68年には活動の柱になっていました。

ここで、連合赤軍事件で犠牲となった現思研の仲間、遠山美枝子さん(1946年8月21日生)については、特にふれておきたいと思います。

遠山美枝子さんは、既に述べたように、66年12月に私が学苑会中執に入っていたので、研連執行部の欠員を補うべく「法学研究会」(法研)から研連執行部に推薦されて立候補して来た時から意気投合していました。当初は、法学部は民青系が学部自治会を掌握していたので、民青のシンパかも知れないと警戒する人もいました。私が研連執行部として遠山さんと面接して立候補の意図を探る事になりました。

66年の12月のある日のことです。法研の幹事長と一緒に学生会館3階の研連事務局室にグレーのオーバーを着た小柄で真面目そうな髪の短い女性が入って来ました。それが、私と遠山さんとの初対面です。何故研連執行部に立候補したのか、幹事長が説明しました。「いつも研連執行部から誰かやる奴はいないか、と言われていたので、法研のメンバーに尋ねたら、やっても良いと本人が言うから頼んだ」と言う主旨と真面目さは、折り紙つきだと推薦理由を説明しました。遠山さん



からは、「就職しているので、あまり時間は取れないと思いますが、せっかくだから大学に入ったのですから、色んな事をやってみたいのです」という話をされました。礼儀正しい感じの良い人で、私の職場のOL仲間のような印象を受けました。幹事長は紹介だけして席を立ち、私と遠山さんで話をする事になりました。私はすぐ彼女をとていい友達になれそうだと思います。

私が「会社は何処ですか？」と聴くと「キンビールです」と答えたので「あらキンビールなら、私の高校時代の友人F君も入社したけど知ってる？」と言うと「え?! Fさんなら同じ課です!」と言うので、たちまち粹を取っ払ったように話が弾みました。F君のキンビールのエピソードに笑い、私がキッコーマンに勤めていた事や、職場の話を語り合いました。

当時は製造会社は、三井系と三菱系に交流が分かれていたようで、年に一度か二度三井系社員の会社を超えた交流があつて、キッコーマンとキンビールは、同じ三井系グループに属していました。

そんな話をしながら、会社からどのように夜間大学を目指したのか、私も職場で大学に入れる道があると知り、家の負担にならないように、自分の貯金で大学に入った事を告げました。

遠山さんも話してくれました。キンビールの労働組合委員長だった父親が事故で、子供3人と妻を残して死んでしまった事、父親の友人たちの勧めで母親はキンビールに勤めている事、そんなコネもあつて遠山さんもキンビールに入社した事、姉は大学の昼間部に学んでいるので財政的にも家計が大変なので、自分は働きながら夜間部に通うことにした事、などを話してくれました。自分の力で、大学生活を賄おうとする姿勢が私と同じでしたし、遠山さん自身は進歩的な人で、誠実でまた、気が合いそうだと思います。

年は私より一つ下で、入学年は66年です。ずっと、法学を勉強し、弁護士は難しいかも知れないけど、そういう方面にチャレンジしたいと話していました。

この一回目の話し合いで、すぐ研連の仕事を引き受けてもらいました。

66年12月から67年には、ちょうど学費闘争もクライマックスを迎えて、連日の団交やストライキ中の泊まり込み、会議など多忙な中、仕事も会議もこなしながら、遠山さんは横浜の自宅から通う

しっかり者でした。アルバイトや遠距離通学の大変さもお互い同じでした。

67年の現思研創設にも一緒に参加し、68年になると遠山さんも、さすがに正社員の義務は果たし切れないと、キリンビールを辞めてしまう事になりました。

奨学金を私も受けていましたので、奨学金や生活協同組合の理事になるよう勧めました。よく、理事手当 6000 円だったかを2人で受け取りに行きました。

当時は、手当や給料は、銀行振込み方式では無く、現金で支給されていました。

御茶ノ水駅の並びの山水園と言ったか、朝鮮料理店が夜 12 時近くまで開いていて、時々、皆でワイワイと話しながら夜食を食べていました。

当時現思研の仲間たちは、10人位で深夜大学に泊まって、立て看板やビラ作りをした後に、山水園に食事に行ったりしました。そこでは、いつものように大っぴらに、デモやカルチェラタンの闘いなども商店街の人と話す事もありました。

大学周辺のそういう店主たちは学生に寛大で、仕事を紹介してくれた事もあったし、警察の捜索が入りそうという時には、「重要書類」のカバンを預かってくれる事もありました。

「オレは町内会の防犯担当だよ」と笑いながら助けてくれたものです。

山水園に、夜遅く行くと二階でよく見かけるベレー帽を被り、一人で食事をしながら私たちのうるさい話をニコニコ笑って聴いている人がいました。その人が、オーナーだとある時知りました。このオーナーが私に「新宿で、スナックカウンターのバーを開くので会計係をやってくれないか」と声を掛けて来ました。新宿の末広亭の数メートル先のビルの地下に、新規開店した「ロス・アマンテス」という広いスナックバーで、楕円形のカウンターの中に女性15人から20人くらいが立ってサービスし、客はカウンター外側の椅子に座って飲むという、新しい大衆バーという作りです。

その会計レジを頼まれました。客はカウンター越しに話をするのです。好奇心で私はOKして働き始めました。様々なサラリーマンや学生、商売人が飲みに来ます。当時としては高額では無く、目新しい大衆的なバーでした。会計と言っても、私もカウンターの中に入って接客しましたが、アルバイトとして悪く無いので、遠山さんも誘いました。でもこういう職業は、遠山さんには疲れるようでした。酔客にも真面目に応えようと、対応するからです。「いなす」というのが出来ないので、「難しいわ」と言うので、二人共辞めることにしました。

このバーのアルバイトの女性たちも、ほとんど学生アルバイトでした。その後、私の友人の伯母が銀座でバーをやっているのでアルバイトに誘われ、私の方は卒業論文ゼミや活動の融通がきく時に通い始めました。アルバイト料が良かったので、遠山さんも誘った事があり、バーに遊びに来ました。でも、友人の伯母は、遠山さんには勧めませんでした。「この子には、そんなことムリよ」と、断られてしまったのです。友人からも、遠山さんと私は、正反対の性格では？と言われたこともあります。遠山さんは真面目で固そうだし、私は何でも楽しんじゃうし、柔らかいと言う事でした。

でも今振り返って見ると、66年12月頃の出会ってから、ずっと肉親のように彼女とは過ごしました。姉妹のように互いに気を使う事も無く、お互いの前では素のままに振舞いました。

学生会館に泊まった時には、現思研の集団で近所の銭湯に入りに行き、私と遠山さんは女湯、男性たちは終わる頃、口笛でインターナショナルを吹いて知らせ、みんな一緒に戻ったものです。

横浜の彼女の家にも泊まりに行き、お母様も一緒に話し、枺酒の飲み方を教わったりしたものです。(お母さまは京塚昌子によく似た「肝っ玉かあさん」で、娘たちと一緒によく笑う楽しい人でした。

遠山さんが亡くなった後、3月、「美枝子は死に、貴女は生きている」と、やりきれない辛さをベイルートにいた私に手紙を送ってきました。私は、遠山さんはお母さんを幸せにする夢を求めていたことを分かってあげて下さい、と返信をしました。「奇しくも納骨の日に貴女の手紙が届いたので、一緒に葬送します」とお母さまからお便りを頂きました。でもその後は、こちらもリッダ闘争で国内と通信不可となり、ご無沙汰したままになってしまいました。）

68年後半か69年になると電車に乗って帰らなくても良いように、大学から歩いて通える所に二人で部屋を借りて暮らしました。そういう仲でした。あまりに何時も一緒に居たので、逆に集会やデモで遠山さんがどうしていたか、思いたすのが難しい位です。私自身の行動と同一になってしまうためです。

67年から68年は、私たち現思研の最も楽しい活動の時代です。サルトル、ポーポワール、ルソーやブントの政治的話や学習会や集会、互いの人生相談まで多くの仲間たちと共に過ごした日々には、必ず遠山さんがいました。

でも、食事のことで、遠山さんとよく喧嘩したのを思い出します。

私は活動の忙しい時には、近所でラーメンを出前してもらって、かき込もうとするのですが、彼女は違います。

「食事に行こう、すぐそこ、美味しいから。フー（彼女は私をそう呼んでいました）は絶対私に感謝するはず」と延々と歩かされるのです。「付け出しに、美味しい塩辛が出て、天ぷらが美味しいから、すぐそこよ」と、また延々と歩いて食事を選ぶのです。

食事をめぐるこんな喧嘩は、いつもの事です。妹のいない私にとって、掛け替えのない人だったのです。ああ、アラブに呼べば良かった・・・と、特に70年代に何度も思い出す度に、そう思ったものです。また、現思研の男性たち、一人ひとりも肉親のような仲間で、一人ひとりのキャラクターを書き出したら、きりがありませんので略します。

9.現思研・社学同とML派の対立のこと

67年、68年の4月には、新入生の新しいメンバーを加えて現思研の仲間たちは、社学同東京の一つの役立つ力として、重宝されるようになっていました。ことに関西から派遣されて来た人々にとっては、明治大学学生会館に出入りし、時には寝泊まりしてる事もあり、気軽に頼める仲間と見なされていたようです。

昼間部の人々は、デモに300人の時もあれば数人しか参加しない事もありましたが、現思研は20人から30人がいつも参加していました。ブントの人たちから声を掛けられたら、カンパも協力します。

ブントの人々は、時には「少年マガジン来た？」と現思研に顔を出します。「偉そう」なリーダーたちの素顔は、私たちとあまり変わらない仲間だなと思ったものです。ブントの幹部と言っても、社会経験に於いては、正社員や契約社員として苦勞して時間をやりくりしている現思研の仲間たちの方が、大人だな～と言うのが率直な当時の評価です。

そんな私たち現思研・社学同に危機感を持ったのが、ML派の学外の指導部でした。

ML派の明治大学の仲間は、私たちと反日共で政治活動を共同しているし、学苑会中執も共同し



て構成しており、一緒の場で立て看板作業をしたり、敵対意識は私たちばかりか、彼らも持っていなかったと思います。ML派の中には、人間的に友人として語り合う仲間もいました。でも、67年の「会計不正問題」で、ML派のやり方に反発した私は財政担当を辞める際に、ML派ではなく現思研の女性に引き継いだのは、私がML派は不満だったせいでもあります。友人から、「次の学生大会で、社学同がML派を追い出すとML派が警戒しているよ」と聴きました。

私たち現思研には、いい加減さもあった分、人が気軽に集まっていたML派としては気になっていたようです。でも、私たちはML派と競う考えはありませんでした。文学部自治会のML派の拠点には、すでに解放派の影響のある者が増えていて、ML派としては学苑会委員長を始め中執の多くをML派で握っておきたいと考えていたようです。

私はML派の人が、リーダーシップを取るのに反対ではありません。友人もいたし、外人部隊の寝泊まりや急に毛沢東主義化したのは気に入りませんでした。ブントも関西上京組は泊まっていたし、中執人事はML派とブント・現思研の仲間で仲良くやって行けばいいと考えていました。私たちの仲間が、彼ら程熱心にリーダーシップを取ってやって行けるとも思えません。彼らに続けて欲しかったのです。

ある事件が起きたのは、68年学生大会の一、二か月前の、ある夜のことだったと思います。夜間の授業が終わった夜10時過ぎから現思研の仲間たちは、学生会館前広場の所で、大きな立て看板を作成していました。昼間部の社学同や文学部のML派の人たちも、解放派の人たちも学生会館前広場では、スペースを譲り合って、翌日のための立て看板を作成するのが通常の事だったので、その日も何組かが立て看板作業をしました。

夜12時か1時を過ぎ、一段落したので、私たち現思研は夜食を食べに神保町の中華料理店に皆で向かいました。零時を過ぎると御茶ノ水駅のレストランは、もう締まっています。神保町の中華料理店に行く事になります。そこはタクシーやトラックの運転手や夜間道路工事で働く人たちの便利な食堂で、値段も手頃です。学生会館からそこに行くまでに、日本共産党神田地区事務所があり、その脇をグループで通りながら、いつも食べに行っていました。食べながら置いてある新聞を読んだり、打ち合わせしたり、食べ終わると急いで、学生会館に戻ります。戻ったら、4階にある現思研の部屋か和室で、みんな横になって寝ます。

この明け方、現思研の部屋に突然の怒号と共に、殴り込みを掛けられました。

「え?! 民青か?!」と一瞬思ったのですが、現思研の部屋に5~6人の男たちが押し入って、入口近くで寝ていたA君に殴りかかっていました。いつも見かける横浜国立大学のML派のリーダーMが外人部隊を引き連れてゲバルトを掛けてきたようでした。

「何するんだ!」A君は、頭を守りつつ大声を挙げています。

私は、奥のソファから跳ね起きて、「何する！M！」と怒鳴りました。「ここは、あなたたちの大学では無い。話すなら3階の会議室でしょう。卑怯な真似は止めなさい。明治大学のML派はなぜ居ないんですか？！」と私が声を上げると、A君に対して無言でリンチを続けながらMは、「何？！重信がいるのか！いい根性してるな、お前のために、お前のために、でかいツラしやがって！」と、私が居たのは計算違だったのか、私めがけて襲い掛かって来ました。「卑怯者！どっちがデカイ面か！女に何をするんだ！」私も「女性」を武器に大声をあげ、蹴られつつ、一つしかないドアの方に逃れながら口撃。A君も「やめろ！何だ！理由を言え」「明治大学のML派らはどうしたんだ！」と大声で騒いでいます。「Mさん！」、攻撃の仲間が私に掛かり切りになって息まいているMをたしなめています。Mは、我に返ったように「いいか？！お前らがさっき我々が仕上げた立て看板をひっちゃ破いた。その報復だ！」と叫んだのには呆れました。

殴られつつA君が「何だと？！そんなの言いがかりだ！証拠をみせろ！我々はそんな卑怯な事はしない！」と叫んでいます。私はすり抜けて和室に走って、「みんな起きて！ML派が卑怯な襲撃してきた」と叫びました。Mの「よし引き上げろ！そいつを連れて行け！」と、A君を拉致して引っ張って行こうとします。

「何するんだ！」怒号と共に、引きずられて行くA君。追いかけてようとする私や和室から飛び出して来た仲間より早く、襲撃隊は4階からA君をかついで、3階へ行こうとしています。和室にいた現思研の仲間たちは、「民青じゃなく、ML派だって？！」と驚きながら続きます。

その間ほんの4、5分くらいの事でしょう。強引に連れ去る一団に、現思研の2年生たちが、3階の学苑会室前で追いつき、A君を奪い返そうともみ合いました。ML派の人々は、二部中執の学苑会室に逃げ込みました。追いかけたB君がもみ合って引っ張り込まれてしまい二人共人質にされてしまいました。

B君は、67年入学式前のデモでも仲裁に入って逮捕されたように、身を賭して正義に燃えてしまう青年です。現思研の合宿を67年夏休み、彼の故郷の新潟のK町でやった事もあります。東京生まれの私には、周り一面畑や山並みや稲穂が続く風景は初めてで、思わず「わあ～、銭湯の絵みたい！」とはしゃいで笑われてしまいました。御家族総出で歓待してくれ、使っていない一軒家に案内され、そこで3食世話になりながら、合宿を楽しみました。傍に西瓜畑があり、誰かが「お、西瓜泥棒やってみたいな」と言いながら、家に戻ると冷えた西瓜を届けてくれて、私たちを恐縮させたものです。B君の友人の土地の青年団の仲間もその時出会い、後に上京して赤軍派と一緒に活動するようになります。

そんな中心メンバーである、B君もやられてしまいました。

学苑会室の中で、A君、B君を殴る怒号が聞こえます。「内ゲバには手を出さない、逃げるが勝ち」と現思研では話してきたし、そう思っている、こうなったら仲間を力づくで、取り戻さなければ行けない！と思いました。現思研の仲間のB君のクラスメイトの仲間は「Bまで拉致された！」と殺気だっています。見渡すと、皆突入に役立ちそうな角材や壊れた椅子、木刀で、今にも攻撃しそうな戦闘体制にあります。「ちょっと待って、とにかく、外人部隊のML派を叩き出し、二人を奪還しよう。これは党派問題を仕掛けられたのだから、明治大学の問題じゃない。明治大学のML派は攻撃に一人もいなかったの。とにかくブントに救援を頼もう」。

私たちは、3階の学苑会の対面にある屋間部中執学生会を障地にして対決する事にしました。

この学生会は、いつも社学同仲間がいるのですが、夜は不在でした。騒ぎで和室に寝ていた藤本敏夫さんも学生会室に来ましたが、彼には頼りません。私は、学生会中執の電話で、すぐ中央大学に電話をして援軍を頼みました。当時は、社学同同士、中央大学での紛争にも駆けつけたりしているので、お互い助け合っています。すぐに荒岱介さん(当時は、荒君と呼んでいました)先頭に、中央大学学生会館に泊まり込んでいた仲間たちが駆けつけて来ました。



荒君は「まかすとけ! どうしたんだ?!」と言うので、Mら、明治大学ML派でない連中が、私たちがML派の立て看板を破いたと、いちやもんをつけて、殴り込みを駆けてきた事、A君とB君が、対面の学苑会室に拉致されている事、学苑会室には多分明治大学のML派もいると思うが、彼らはこうしたやり方で大学内の平和共存が壊される事をきつと恐れている事、次の学生大会で、社学同に執行部委員長ポストを要求されるとか、過半数人事を要求されると危機感を持っている事などを説明しました。

荒君は、社学同の都の代表か社学同委員長になったかなる予定の頃です。いつも現思研に来て「いいなあ、明治は。おれら亡命政権だよ」と言いながら、早稲田大学で活動基盤を作り得ていない事を自嘲的に語ったりしていました。「よ〜し、ブント・社学同が怒ったら、どんなもんか。知らせてやろうじゃないか」と荒君が言うと、みんな「異議なし!」と

あつと言う間に、荒君を先頭に意志一致。「お〜い魔女(荒君は私をこの仇名で呼ぶ)学苑会中執、ぶつ壊してもいいか?」と聞くので、「二人の仲間を取り戻すまでは、壊れるのは仕方が無い」と答えました。

荒君は、おもむろにデモで使うハンドマイクを持って演説を始めました。五、六歩しか学生会室と学苑会室は離れていず、肉声でももちろん届くのですが、「ML派の諸君! ムダな抵抗は止めなさい。社学同の学生を直ちに解放しなさい。卑怯な襲撃を自己批判しなさい、言うことを聞かないならば、我々は正義の教訓を行使する!」と荒君は怒鳴りました。

その口調は、いつも「こちら麹町署、学生諸君ムダな抵抗は止めなさい!」と警察が襲いかかる前の警告を真似たものだったので、みんなニヤリと笑いまいた。多分、現思研の仲間をリンチして怒鳴っていたであろう学苑会室内の怒号が止切れました。そして一瞬あってから「バカヤロー!」「ナンセンス!」などと返って来ました。それを聞くと、荒君とB君の親友たちが、まず飛び出してガンガンガンと、学苑会の両開きの扉を攻撃し始めました。観音開きの上の方は、天井まで20~30センチ程のガラス張りになっています。すぐにガラスは吹き飛んでしまいました。内部のML派は10人位で、人数が少ないので突破されないように学苑会室のロッカーや机で内部からバリエードを築いている音がします。自分の自治会室の扉を破壊するとは、何と情けないことになってしまったのだ・・と思いつつ、仲間を取り戻さなくては!とこちら側は焦っています。大変頑丈に作ってある分、壊れません。私たちの陣地になっている学生会中執の電話は度々鳴り、その度に私が取ると、中央大学、専修大学、医科歯科大学の社学同仲間が夜中に聞きつけたらしく、援軍に来

るというのです。でも、何メートルも無い学生会と学苑会の間フロアには、社学同の攻撃部隊がひしめいています。荒君に聞くと「攻撃部隊はもう十分だから」と言うので、私が事態の攻撃状態を電話で説明しました。「じゃあ、ドリルを持っていくか？」と言います。「う～ん、自分たちの自治会室だし、あまり壊したくないのでいいよ」と答えていると、その内誰かが金具類を探して来て、ドアに小さな穴を開けました。「もうすぐだぞ！」と、こちらは氣勢を挙げてインターナショナルを歌い、代わる代わる演説し「A君とB君を返せ！」と攻め立てました。人質を放したら、自分たちが殴り返されるとか、ML派は人質を返そうとしません。もう空は明るくなって来ました。

その内、ブントの戦旗社から電話が入りました。「どうしたのか？」と言うのです。「今、ML派から戦旗社に連絡があって、社学同が学苑会を包囲し、三里塚闘争に出発する仲間が阻止されて闘争妨害だと、抗議があった」とブントの人は言うではありませんか。

私と荒君は「とんでもない！ML派が、社学同に襲撃を掛けて、現思研の仲間が拉致されたまま、学苑会室に逃げ込んで立てこもっているんだ！」と戦旗社のリーダーたちに訴えました。

「え？！そうなの？ちょっと待って！」とガチャンと電話が切れました。荒君は「何寝とぼけてんだ！ブントは」と怒っています。

私は「Mがデモゴークで正当化したに違いない。いつもの詭弁よ」と言い、現思研の仲間も益々怒り一杯です。「もうすぐ突破出来るぞ！」との声。

生活協同組合の友人達が、下からコーラやファンタを差し入れてくれました。順番に休憩を取りながら、更にガンガンやりました。現思研の仲間たちも「自分たちの自治会室を壊すのは、本当にいやだな。明治大学の左翼同士のゲバルトはしないと決めていたのに。明治のML派はどうしてるんだらう、中にいるんだらうなあ・・・」と怒りと戸惑いです。

その内また、戦旗社から電話「ML派に自己批判させて、Aら二人を解放させるから、それで手を打ってくれないか。奴らは、ブントの闘争妨害と騒いでいて、実際今日は小さな集会でブントは動員をかけていないが、三里塚闘争の日だ。口実かも知れないが、呑んでくれないか。とにかくAらを解放させ自己批判させるから」と言うのです。

荒君が「どうする？それでいい？」と私に言うので首を横に振りました。荒君はまた、戦旗社の人と話をし「しょうがない、判ったよ、ML派の奴らちゃんと自己批判してAたちを解放するんだな」と言って、電話を切った後、「何か、全学連の貸借のいろんな事が、ML派や解放派ともあるみたいだな。とにかくML派に貸しを一つ作る事になるらしいな。もう疲れちゃったし、完全勝利じゃないか。手をうつぞ」と言います。攻撃隊指揮は荒君だし、戦旗社には「判ったよ」と納得合意をしたので、私たちも自分の感情的な対応を収めることにしました。感情的になると判断力を失ってしまいます。「内ゲバをしない」と現思研で言って来たのは、私たち自身なのです。

「わ～」と声がするので、荒君と学生会中執のドア口の方を覗くと解放されたA君とB君が、社学同仲間に抱えられるように学生会室に入って来ました。解放されたのです。

でもA君は、顔を殴られて眼は潰れ風船のように腫れあがって、血とアザのひどい顔です。B君は、唇と頬に血が流れていましたが、「僕はそれ程殴られなかったよ」と言いました。とにかく、解放されたのです。

荒君は、再びハンドマイクを手に「我々は勝利した。ML派の諸君、社学同に対する自己批判書はどうなったんだ。まだやる気なら我々も受けて立つ気はある」と演説し、みんなでインターナシヨナ

ルを歌って景気づけました。静かだった学苑会室からもインターナショナルの歌が聴こえます。それから学苑会室の扉の上のガラスが割れて無くなった空間からピュッと紙飛行機が飛んで来ました。「お！何だ、これは」ML派は「自己批判書」を紙飛行機に折って飛ばして来たのです。「何だ、これは、ちゃんと手渡して謝るべきじゃないか！ふざけやがって！」と現思研の仲間たちが怒りの声を挙げました。「どれどれ」と、荒君が紙を広げて「まあ『自己批判書』ではある。学生会館内で暴力をふるって社学同の人間に怪我をさせた事は自己批判すると、書いてある。ひどい自己批判書だけだな」と、私にその紙を渡しました。私も読んで「威張って、自己批判してやると言う内容じゃないか！」と文句を言いつつ、現思研の仲間が戻って来たのだから、ホッとした気分です。だいたい自己批判書なんて本当に変えようという心掛けより、左翼同士のやりとりでは、その場の窮地脱出の方便が多いのを知っています。

荒君は、現思研の仲間にも殴られた仲間にも確認して、これで終わりにしていいなど、念を押し皆合意しました。そこで荒君は、再びハンドマイクを取り「我々ブント・社学同は完全に勝利したぞ！ML派が再びふざけた暴力を行使したら、次はブントが黙っていない。この学生会館から叩き出す。よく覚えておくべきだ。我々は、完全に勝利した」「異議なし！」「我々は戦うぞ！」と唱和して「以上戦闘は終了する」と宣言しました。

それから10分以上たちました。20分くらいだったかもしれません。ML派は、攻撃されないか、こちらの様子を伺っていたのか、それとも学苑会のバリケードを解除していたのか、すぐには扉を開けませんでした。私たちは全員、学生会室側に立って監視していました。

明治大学ML派のK君が、そつとドアを開けてあたりを見回したかと思うと、首を引っ込めMら立てこもっていた連中がヘルメットとタオルで顔を隠してぞろぞろと10人程出てきました。

そこでMは、「我々は妨害に屈せず三里塚闘争を戦いぬくぞ！」「我々ML派は、いかなる時にも戦い抜くぞ！」とシュプレヒコールを叫びました。全員がシュプレヒコールに唱和し、小さな隊列を組み「我々ML派は戦うぞ！」「戦うぞ」「戦うぞ」と氣勢をあげて、隊列のまま、3階の階段を駆け降りて行きました。

現思研には、学苑会中執メンバーもいるので、すぐに学苑会室に入りました。あちこちに椅子や机が散乱したままです。「研連の連中が来たら大変だ。彼らは原則的で内ゲバなんて絶対許さないから」と言いながら、学苑会室と床のガラスなどを掃除を始めました。

研連執行部は、現思研の仲間もいますが、みんな真面目な教育研のSさんの委員長のもと、党派的なやり方は、排除してきました。私自身も、それを実践して来た上で、Sさんや遠山さんらに研連執行部を任せて来ました。

67年の学苑会による「投票箱不正開票事件」の時にも、研連は学苑会を厳しく批判していました。とにかく頑丈に出来ていたもので、結局ガラスくらいしか壊れなかったのでホッとしました。上の方のガラス代は何千円でしたが、のちまでそのままでした。以降も毎日通る度に、あの事件を思い出しがとがめたものです。

A君の殴られ腫れた姿は、人前には当分出られません。友人たちに何があったか説明するのものはばかれます。こちらは被害者と言っても通用するものではありません。それにML派と社学同は一緒に学苑会を運営しているのです。

「現思研は甘い。明治のML派をちゃんと批判して、外人部隊を追い出せ」と、他の解放派の友人

たちも騒ぐでしょう。

どの党派も、学生会館を根城にしているのも、民青と同じ論理で追い出すのも、どうかという考えもあります。「とにかく今後、こうした言いがかりで暴力を振うなら、我々は一切ML派と共同しない。そういうけじめはきちんと付けるべきだ」と現思研で話し、学苑会中執の社学同の仲間たちがML派と話を付ける事にしました。

その後、学生大会がありました。結局、これまでと同じ様に、社学同とML派系の組んだ中執人事となりました。財政は、私の後はずっと社学同の仲間が担当し、これまで同様の人事です。

二部の要は研連です。サークルとサークルの連合である研連執行部を握っていれば、どの学部自治会の大会や、学苑会の全学学生大会にも代議員として立候補し、共同して貰えるし、真面目な二部の学生の研究や向上に欠かせない場だからです。

研連無しには、学苑会執行部が勝手な事は出来ません。

ML派としては、きっと、この一件で内部で矛盾があったのではないかと思います。後の話になりますが、69年のブントの内部対立で、私を含め現思研の中心メンバーが赤軍派に参加し、大学内を離れた後、ML派が解放派を襲うなどで学苑会は党派矛盾で荒れたようです。70年に研連の下級生たちが、相談に来て、党派の非民主的な御都合主義を何とか解決したいとの事でした。私は、すでに赤軍派の活動で大学とは直接には関わっていませんでしたが、自分たちが民青執行部に対案を出した時の教訓を伝え、ノンセクトでも、やれば出きると思うと勧めました。

その作戦会議にも一度参加し、相談に乗り励まし対案を提出する大会には、私もオブザーバーとして出席すると約束しました。実際70年6月だったか、政治研のKさんらを中心にしてノンセクト中心の研連は、対案を提出し大会の過半数を制して、学苑会執行部を掌握する事になりました。執行部を握ると、それからが大変です。

頑張れ！と励ましに大会の当日、私が会場に入るとオブザーバー席には、ちょうど赤軍派と対立した側でリーダーシップを発揮していた荒さんも座っていて、大会のなりゆきを注視しているところでした。私が「久し振りね」と言うと「魔女、お前、何か企んだらう！」などと言っていました。

この頃、解放派も伸張し、後にノンセクトやML派を抑えて、解放派は明治大学二部も昼間部も独占するようになるのは、私がアラブで活動していた頃のようなようです。解放派が当初上手くやったのは、意図的に有能な活動家を配置したせいだと思います。

確か68年に、現思研に入りたいと脊の高い新生が来た事があります。

どうぞ、どうぞと参加を歓迎しましたが、ちょっと「粋がった活動家」スタイルの青年は、荻野君と言い、他の新生と違って活動慣れしていました。

政治の話や各党派の話をしている内に、本人も反帝高評の活動をして来たと話しました。

現思研が、ブント・社学同系と知って加入戦術で、まだ文学部にほんの数人しかいなかった解放派を強化するために来た事を、後に本人は告白して現思研を離れました。

彼曰く、現思研は間口は広すぎて、その割りに皆社学同のゴリだし、自分はやっぱり学部から強化すると率直に話してくれました。「気取り過ぎ」「格好つけ」と私は、彼をからかいましたが、「いい奴」でした。

それから何十年も経って、私が帰国し2000年に逮捕された後、警視庁の取り調べ室でのことです。刑事としては話の糸口にしようと、明大学生だった荻野君の話を持ち出したのでしょう。荻野君が、

解放派のリーダーとなり、解放派の「内ゲバ」で命を奪われたと刑事が話すのを聴き、彼が死んでいたのを知りました。また、あの時暴力を仕掛けてきたML派の外人部隊のMは、のちに僧侶となり、連合赤軍の死者たちの弔いに尽力し、すでに亡くなられたと知りました。みな当時の過ちを自らの問題としてとらえ返したのだと思います。Mもそうだったことを、私自身の反省と共に思い返し感じるものがありました。

そんな風に現思研は、山あり谷ありの、どちらかと言えば「社会学同好会」と揶揄されるような、家族的、義理人情のコンミュン共同体だったと言えます。

ところが、私のような先輩が、様々な条件からルビコン川を渡るように赤軍派に突き進んだ事で、多くの仲間も、当然のように当初は、赤軍派に加わり、みんな消費されるように様々な岐路に放り出されつつ、各々が活動したり、止めたり自らの道を進みました。

私は現実の赤軍派に 70 年に見切りをつけ、71 年初頭にはアラブへと出発し、田中さんは、それ以前に「よど号」に参加して平壤(ピョンヤン)に行き、遠山さんは連合赤軍で殺されました。その他何人もの仲間たちが、苦渋の選択を強いられ「自己責任」のように、自らの人生を切り開いて生きていきました。

社会学同・現思研やその周辺にいたかつての友人たちに、私自身の在り方—最後は誰の面倒も見ず、海外に発ち、何の責任も取らなかった事、遠山さんに厳しい道を結果として選ばせた事を含めて、心から謝罪します。

と同時に、そうした条件を越えて、30 年を経て「窮鳥」として私を暖かく支えてくれている旧友たちに感謝しています。

本当に、ありがとうございます。

その上、「自分の人生は、現思研の仲間同士の在り方が、お、今も拠って立つ自分の思想的出発点になった」と、かつての現思研仲間のTさんのように、今も当時の大切な人間の在り方の学びの場として、心に刻んでいる仲間を見ると、私も感謝と勇気一杯で、いい人生を過ごして来たと言ひしめるのです。

そして今も、この流れを汲む明治大学時代のML派も含む旧友たちは、私の裁判などの救援を「土曜会」として継続してくれました。公判後には、特に 3.11 以降「土曜会」としての社会政治活動を続けている事を嬉しく誇りにしています。

もちろん、昔の党派的な活動やあり方を否定し、かつての全共闘運動の原則的な自発性を継承して、平和的な社会の変化を求めているようです。

No561 重信房子「1960年代と私」第二部第10回

2021年1月

第2章 国際連帯する学生運動

10. 69年東大闘争

68年ベトナム人民の民族解放闘争に呼応し、ベトナム反戦闘争は国際的に各地で激しく闘われていました。パリには北ベトナム政府・南ベトナム解放戦線代表らが、海外本部を置いて政治解決を求め、アメリカ政府の侵略を糾弾して対峙していました。

アメリカ本土でも欧州でも、米軍のベトナム侵略反対行動が、ベトナム本土の解放の戦いと連帯して広がり続けました。

後に、海兵隊出身でアメリカ国防総省の分析官ダニエル・エルズバーグが「嘘で戦争は勝てな

い」と、国の過ちを正そうと、アメリカ国防総省の最高機密文書(通称ペンタゴンペーパー)7000 ページをメディアを通じて暴露し、ニクソン政権の政策を転換に追い込むのは71年3月の事です。

この68年・69年は、まさにアメリカの公式発表の嘘の陰で、虐殺・拷問・出鱈目な侵略戦争が幅を利かせていた時です。世界はベトナム反戦運動の広がりの中で各国各地の様々な戦後秩序の行き詰まり、再編成が始まっていました。

日本でも68年は大衆的な反戦運動、東大・日大を頂点とする学生運動が、全共闘運動として、もっとも高揚した年です。

大学では、各地で全共闘の闘いが生まれ、党派もまた、自らの指導権を確保しようと競合が激しくなっていました。

68年7月、ブントは三派全学連から分裂した反帝全学連結成へと進みました。そして、8月には「国際反戦集会」を主導して「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の旗を掲げるブント・社学同は、独自の歩みを始めました。防衛庁突入闘争もそうした中で、戦われました。社会全体から見れば、少数の学生層のそのまた一部に過ぎないのですが、私も含めて当時は、「正義」「使命感」に駆られていました。

戦う事が、解放感に充ち、自己解放が「同志」と結び合って、新しい変革に結びついていると言う充実感がありました。戦いに参加した動機は各々違ってても、街頭行動で知らない者同士がスクラムを組み、連帯し合える空気が溢れていました。

今後の人生への影響に悩み葛藤しつつ、覚悟して運動に関わった人がいるかも知れないし、気軽に友人に誘われて加わった人もいたかも知れません。偶然の出会いが、運動の中で化学反応を起こし、逮捕や党派闘争といった喜ばしくない事件を背負いながらも、なお闘い続けたのは、使命感や希望と言った楽天的な未来がどこかに繋がっていたからだと思います。

こうした反戦闘争、全共闘運動のピークとして、69年1月の東京大学安田講堂の攻防戦があります。

東大闘争は、既にこれまで戦って来た医学部学生が68年、医局長を缶詰にしたとして、17名の不当処分を下された事で、大学全体の問題となりました。処分撤回を求め「七項目の要求」として、大学の在り方を問い「大学の自治」の幻想を暴露し、学生としての自己の特権的位置を「自己否定」しつつ戦います。

自分たちの実存を問い、資本主義的価値としての「学問の自由」や「自治」を否定しつつ、普遍的で根源的な労働者階級が求める人間解放の闘いとして、自己をも復権させる方向性を目指していたのだと思います。東大全共闘のリーダーであった、山本義隆さんはこんな風に語っていました。「ぼくたちは、王子や三里塚の闘争に参加した。しかしデモから帰ると平和な研究室があり、研究出来るというのは、たまらない欺瞞である。研究室と街頭の亀裂は、両者を往復して埋められない。では研究をはやめるべきか。それは矛盾の止揚ではなく、矛盾からの逃亡ではないか。徹底した批判的原理に基づいて自己の日常的存在を検証し、普遍的な認識に立ち帰る努力をすること。そうして得られた認識に従って社会に寄与し、労働者階級に敵対している自己を否定し、そこから社会変革を実践する。抽象的にしか語れないが、結論らしいものはこうしかない」(『攻撃的知性の復権』69年・朝日ジャーナル～『知性の叛乱—東大解体まで』前衛社収録 69年)と語り、「自己否定」の観点に立って社会参加を果たす事を方向づけています。

良心に基づく、ストイックとも言えるこうした思索を、全共闘運動の哲学としつつ、このラディカルな知性を持って、東大当局を告発して行きます。東大全共闘側の処分撤回を含む大学改革要求に対し、大学側は拒否し、国家権力と一体に機動隊導入(68年、東大医学部全闘委・医学連の安田講堂占拠にも、6月17日当局は機動隊を導入)した為に、学生側と東大当局は、非和協的な戦いが続きました。11月大河内一男総長の辞任に伴い、総長代行となった加藤一郎氏は、69年に入ると1月14日「機動隊を導入しても入試を実行する」と宣言し、学生の要求を再び拒否しました。

日本共産党・民青系勢力は、一部教授会と共同して、ストライキの解除を目指しました。

1月に入ると、東大大学全共闘の戦いに連帯し、学生たちは全国から東京・本郷の東京大学校内に結集し、ストライキを支援しました。1月9日には、「東大闘争勝利・全国全都総決起集会」が開催されました。この集会で、民青系の全学連勢力と全共闘(三派系も含む)の間で大きな衝突が起きました。東大全共闘を支えつつ戦ったのは良くも悪くも党派です。そのための東大支援体制は、党派別の参加という形が取られていました。

当時三派全学連は、すでに分裂して中核派の全学連と反帝全学連に分かれています。その分、東大闘争連帯行動でも、明治大学でも大学割でなく、「社会学同」や「ML派」など、各党派として参加する形となっていました。

党派的な勢力が、自治会を把握している全国各地の大学は、明治大学同様、全共闘運動という形ではなく、各党派の「決死隊」として戦闘部隊を結成して、東大決戦に加わったようです。もちろん、党派ではなく、個人として東大闘争に連帯し、東大全共闘に呼応、参加する学生もいました。その一方で東大全共闘と共同しながら党派同士のヘゲモニー争いが続いていました。特に民青系、革マル系、三派系で対立し、三派系の中でも更に中核派・ブント系・ML派などが競合し合って、東大防衛隊勢が取られて行きました。

東大安田講堂の攻防戦に社会学同の行動隊長として参加した米田隆介さんは、「私が69年東大安



田講堂に入った時、明治大学には全共闘はなかった。私の意識としては、明大の中執委員長としてではなく、社会学同の一員として入った。東大闘争は、全共闘運動という意識は全然なくて、三派系全学連の宣伝合戦、70年安保に向けて、自分たちの勢力をどれだけ増やしていくかというのが、主題の戦いであった」と、当時を回想しています。

東大入試阻止、処分撤回と大学改革を求める東大全共闘に連帯し、党派は各々の70年安保闘争に向けた戦いの前哨戦としても、戦術的に徹底してラディカルな政治宣伝戦として東大闘争を位置づけていたのです。

米田さんは、東大闘争のブント・社会学同の関わりを次のように語っています(2015年3月「明大土曜会」でのスピーチ)「69年1月16日、ブント政治局から社会学同の指導部、委員長の荒岱介、ブントの学対部長の高原浩之に『機動隊の導入が近いと、革マル派から連絡が入った。彼らは法文3号館から出ると言っている。社会学同も安田講堂から出る』と言ったらしい。



高原さんが『出ろってなんや。学生は皆死ぬ気でやっとなるや。敵前逃亡しろと言うのか?!』と言うと『政治局の決定に従えないなら、すべてお前らの責任だ』と、大喧嘩になった。対外的には社学同だけでやる。ブントの政治局の許可を得ない。社学同の勝手な判断でやったという形になった。

当時の社学同の委員長は荒さん、ブント学対がのちの赤軍派の高原さん。北海道から(のちに東大教授で小泉首相のブレーンの一人となった)山内昌之さん、中央大学の久保井拓三さん、明治大学の昼間部はトップが池原さん。明治大学は学費闘争後、上の世代がいなくなったので、当時30人くらい。池

原さんは 68 年 10 月逮捕され、社学同キャップになった両川(敏雄)君も 11 月に逮捕された。私(米田)は中執委員長だったが、やる人間がどんどんいなくなる中で、しょうがないから行くか・・・ということで安田講堂に入った。

1 月 18・19 日に到る過程は、1 月 15 日の安田講堂前で行われた『東大闘争勝利・労学総決起集会』に向けて、ブントは同志社大学中心に関西からも200名くらい動員して集まった。

当初は全員籠城という意気込みだったが、結局指導部レベルでは荒、高原、山内、久保井、村田も全部入らず、米田が入れと言うことで入った。関西も100人くらいは人選して、半分帰した。関西50人東京50人で、100人位が入ることになった」と述べています。

ブント仏(さらぎ)指導部は、逮捕者を減らす方針を持ちつつ、実力闘争を戦う学生たちの要求を受け、社学同としての戦いの決断を認めたようです。

東京大学の何処を占拠して対峙するかでも、各党派の競合があり、結局、安田講堂に向かって左がML派が担当する工学部列品館、その隣が中核派の法学研究室、その奥が革マル派が守るはずだった法文2号館。ブントは、68 年 6.15 で医学連が安田講堂を占拠した実績を訴えて、東大全共闘の防衛隊長今井 澄さん(後の日本社会党参議院議員)に話して、安田講堂に入り込んだとの事です。社学同隊長として安田講堂に入った、米田さんの話によると、1 月 18 日から機動隊は導入され、すぐに午前 7 時 30 分には、青医連が立て籠もっていた医学部図書館の封鎖が解除されて22人が逮捕されたとの事です。

立て籠もった部隊への支援で外から、8時過ぎには正門の警備の手薄な所を縫って 300 余名のデモ隊が安田講堂まで連帯をアピールし、銀杏並木を一周して機動隊に押し出されました。

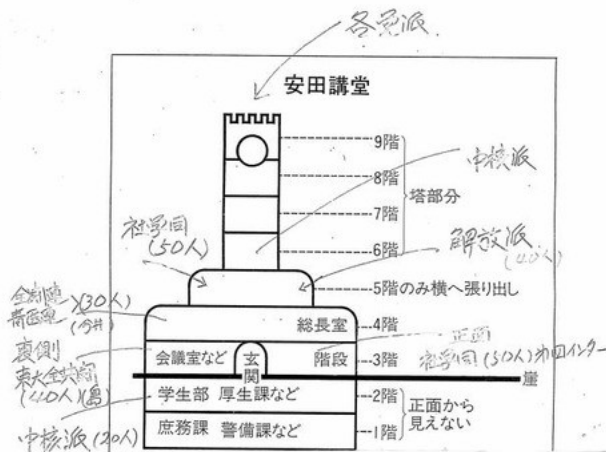
こうした行動は、立て籠もり組には、「悲壮感はあったが、やる気になった」と米田さんは語っています。

革マル派も、法文2号館にいて12名が逮捕され、列品館では明治大学二部ML派中心に、火炎放射器と火炎瓶で抵抗戦を戦い、安田講堂から見ても凄い攻防で、38名がそこで逮捕されたそうです。中核派は、法学研究室で徹底抗戦し、屋上でもゲバ棒で機動隊と最後まで渡り合い、そこに第四インター系の人たちもいて、合計 167 名が逮捕されています。

機動隊の 18 日の占拠解除の攻撃は、この攻防戦が最後になったようです。

真冬の中、機動隊は放水で蹴散らすように攻撃していましたが、5時すぎには放水も終わっています。この18日、安田講堂は中心的攻防とならず、安田講堂の正面玄関は3階になっており、裏側から機動隊が1階に入って来たが、この日は引き上げて行きました。

1月19日は、安田講堂に対する総攻撃が放水と共に、朝から本格化しました。屋上には、各党派の旗を守る人材が配置され、ブントは上原さんが担当して最後までブントの旗を振り、一番最後の逮捕となって「共産同」の旗が落下して行きます。



安田講堂内には、6階に中核派、5階に社学同の関東部隊の50名が左側に、解放派の40余名が右側、4階には東大全共闘の全闘連と青医連グループが30人位、3階の後側には東大全共闘40人位、3階正面には関西の社学同が50名と第四インターのグループがいました。

1階には誰も居ず、1階から入った機動隊が階段を上って来るのを阻止する2階に中核派がいて、攻防を繰り広げていました。バリケードの隙間から火炎瓶を投げて抵抗しています。



社学同は、3階から火炎瓶をどんどん投げて、侵入を阻止するため、機動隊側はそれをかい潜る、鳥かご状の防御具に隠れて侵入を試みるが、一升瓶の火炎瓶の学生の抵抗になかなか正面からは入れなかったと米田さんの話です。

機動隊は、それでも後ろの1階からは、少しずつバリケードの机などを除き、火炎瓶を消火器で消しつつ迫ってきます。「2日間も真冬に放水を間断なく浴び、びしょ濡れで体力も消耗し、特に3階の社学同関西部隊はメタメタにやられた。この時点で、東大

の防衛隊長の今井さんからは『抵抗するな』という指令が出た。午後2時位には、実質的に抵抗は終わった。4階まではちゃんとした階段はあるが5階から上は、人が一人くらいしか通れない階段なので、そこでバリケードを作って抵抗すれば、1日でも2日でも持ったと思うが、下の部隊が降服しているので上階の部隊も止めようという事で、抵抗は終わった。



機動隊は、外側に仮設の階段を作って5階に入
って来た。5階では抵抗せず、インターを歌いなが
ら逮捕された。逮捕されたのは5時頃だった。僕た
ちの部隊は、殴る蹴るの暴行は受けなかった。と
言うのは、新聞社も従軍記者みたいな形で来てい
たので、手で殴る事が出来ず足で蹴ったりしてい
た。とにかく、凄く寒かった。放水の効果があつた
という事。とくに私たちの部隊は、5階のバルコニ
ーに出て、火炎瓶とか敷石を投げる役割だったの

で、出れば必ず上のヘリコプターから放水を浴びる。水の中に催涙液のような薬品が入っていて、私も2か月くらい足首に火傷したような炎症があつた。逮捕されたのが682名。起訴されたのが474名。起訴され無かつたのは、未成年の人だと思う。

大学別では、東京大学が一番多くて83名、次は広島大学で29名、東北大学14名、芝浦工業14名、京都大学13名、山形大学9名、九州大学6名、全国82大学から参戦した」と、米田さんは当時を述べています。

当時、安田講堂は、東大全共闘が占拠して以来「解放講堂」と呼び、そこには、学生たちの間で有名な「解放放送局」と言われた「時計台放送」がありました。東大の責任者として代表して安田講堂に立て籠もった今井澄さん(後の参議院議員)は、あの1月19日、最後の放送を行っています。



東大全共闘機関紙「進撃」は、次のように記していま
す。

「『われわれの戦いは勝利だった。全国の学生・市民・労働者のみなさん、われわれの戦いは決して終わったのではなく、われわれに代わって戦う同志諸君が再び解放講堂から時計台放送を行う日まで、この放送を中止します』—そして、同志たちは澄みきった声で高らかにインターを合唱し、機動隊の暴力に屈せず、最後まで戦う決意のシュプレヒコールをしたあとで、うずくまるように肩を抱き合って逮捕されたのだった」と。

私たちは、1月に入ってから毎日のように東大本郷構内へと、連帯のために参加しました。

正門には「造反有理」という字が掲げられ、東大全共闘の闘争委、青医連、全闘連に加えて、各党派を主張した立て看板が、あちこちに置かれ、安田講堂前は集会広場として連日の抗議とデモが行われていました。

解放区の構内には、近々の大学の全共闘や党派で活況を呈し、党派間のもめ事を東大全共闘の山本さん、今井さん中心に捌いていて、東大全共闘の自立した精神とそのヘゲモニーは、全体を統制していました。

「東大の戦いに私たちは、如何に呼応連帯して戦うか、東大で戦っている仲間以上の動員と解放区闘争によって、東大安田講堂の攻防戦を支援する」

これが周辺大学が自発的に考えた方針です。社会学部の委員長荒さんは、中央大学と明治大学を行ったり来たりしながら、みんなと意志一致し、機動隊の東大への導入が行われたら、すぐ反撃する準備を整えて行きました。

当時の全共闘運動に対して、ブントは「コンミュンの団結」として評価し、安田講堂攻防戦を「帝国主義的再編に対する戦いを全人民的政治闘争へと転化させ、同時に「バリケード戦」「解放区」を全人民化するもの」として、1月18日の安田講堂攻防戦に呼応して神田、御茶ノ水地区バリケード市街戦・カルチュエタン闘争の総力戦で支える戦いを方針化していました。

1月18日早朝8時過ぎに機動隊が動き出したと、明治大学学生会館にいた私たちにも連絡が入りました。学生会館前広場では、赤ヘルメットと角棒を持った数十人が集会を開き、9時過ぎには中央大学の仲間と合流して、約50人のデモの隊列を組みながら御茶ノ水駅前交番へ向かい急襲。広報掲示ガラスや窓を破壊し始めると、すぐに100名以上に膨れ上がり、これを合図に御茶の水・神田カルチュエタン闘争が始まりました。

東大本郷包囲の機動隊は、指令を受けて次々と駆けつけ、御茶ノ水駅や、明大の旧学生会館前



の「中華味一番」の方から路地に部隊を配置しようとしませんが、どんどん膨れ上がった学生や市民に、明治大学前通りばかりか、背後の中央大学からのデモや投石のために、挟み打ちとなり慌てて、機動隊は聖橋の方に退去せざるを得ませんでした。

「機動隊は帰れ！」のシュプレヒコールやデモ、更に数百人に増えた赤ヘルメット部隊は、再び御



茶ノ水駅前交番を制圧し、近くの日本大学などからも駆けつけて、学生は1000名を越し、小川町交差点下から一帯を「解放区」としました。そして、「本郷キャンパスに向けて突撃しよう！」と、本郷側に退却した機動隊に、投石、バリケード対峙します。機動隊側は、順天堂大学、医科歯科大学前にずらりと陣を取り、また駿河台下からも催涙弾を発射し激しい攻防が続きました。



2時過ぎには、(国鉄)総武線・中央線も電車がストップする事態になっています。激しい陣取りの攻防が続き、学生が催涙弾に退却した隙を狙って、明治大学に不法乱入した機動隊は、旧館の学生会館を荒して行きます。明治大学新聞で、その時の機動隊の暴挙を次のように記しています。

「18日午後3時30分ごろ。機動隊50人が本学旧学館に乱入、本紙本部を始めサークル室のド

アを軒並み蹴破り、物品を荒すなどの乱暴を働いた。機動隊は(新館にある)学生会、学苑会室まで侵入したが、学生のゲバ棒・投石の抵抗にあって退却、その折3人が逃げそこなって学生に捕まり殴られた」「また、午後6時学生に“逮捕”された私服警官を取り戻しに、第四機動隊100人が、再度本学中庭に侵入、ガス弾を連射し、1・2階を制圧『帰れ、帰れ』の大合唱の中を、私服を取り戻し引きあげた」と記しています。

この日は、東大闘争に連帯し、夜10時過ぎには、東大本郷の休戦に合わせて学生部隊は、二部の授業の終了頃に引き上げていました。でも、数千人の市民たちが、祭のように解放区を楽しんでいました。

党派と共闘している東大全共闘の山本義隆代表は、18日夜9時過ぎに神田の日大理工学部で記者会見し「安田講堂の防衛と本郷キャンパス奪還のため、19日にも18日以上に大規模なデモを行う」と表明しました。

19日は早朝からの、安田講堂攻防戦が始まりました。「今日が最後となるだろう」と荒さんは話していました。朝から中央大学で「東大闘争勝利・東大奪還集会」が開かれ、前日を超える反日共系の全学連各派と反戦青年委員会などの労働者らも加わり2000余名の集会が開かれました。東大の山本義隆代表や日大全共闘、中大全中闘や、各党派が演説し、再び昼前から駿河台下から御茶ノ水駅まで十数カ所のバリケードを築いて解放区を拡大しつつ、「東大本郷キャンパス奪還闘争」へと御茶ノ水橋を越えて進みました。主力部隊は、本郷二丁目交差点で、3500人の機動隊と衝突し、投石し本富士湯島交番を破壊し、催涙弾の攻防で一時後退しつつ、学生たちは順天堂大学、医科歯科大学前のバリケードを強化して、防戦しました。機動隊も解放区を破壊する威力は無く、市民、学生たちが歩行者天国のように、明治大学前通りに群集となって集まり、本郷への進撃を支援します。

明治大学前通りの店も開いていて、いつも学生に協力的な店主がテレビが見えるよう道路向きにしてくれたので、安田講堂の攻防も夕方6時前には、終わつたらしい事が判りました。それでも、みんな意気盛んに1万人を超える学生、市民、野次馬も含めて戦い続けます。

社学同などは、10時頃には闘争終了宣言して、各大学に戻りました。その頃から、東大安田講堂落城で、一段落した機動隊が攻勢に転じたため、群集は再び戦闘に入り深夜までこの攻防は続きながら、東大闘争は、この日全て一旦解除され制圧されてしまいました。

東大闘争では「大量逮捕」という大きな被害を被りながらも主張を通じて、その原則に沿って戦った事で、全共闘運動は更なる全国の大学の闘争へと波及して行きます。

東大当局は翌20日、69年の東京大学の入学試験実施を断念しました。そして、入試の中止決定と共に、警視庁は山本義隆全共闘代表の逮捕状を請求し発布したのです。

この69年、東大安田講堂落城と東大入試中止、山本義隆代表への逮捕状の出された日、米国ではニクソンが大統領に就任し、世界の反戦闘争は更に広がり続けて行きました。

東大当局の入試中止決定を踏まえて、2月21日「東大闘争勝利・労学市民連帯集会」が行われ、逮捕状の出ている山本義隆代表が、権力の監視を潜って参加し厳しい包囲の中、戦い続ける意志を鮮明にしつつ進んで行きます。

この日、山本代表が壇上に姿を現すと会場を揺るがす拍手、咆哮が続きました。

1.1.新しい経験と 4・28 闘争

東大闘争後、私は政経学部で学士入学する事に決めていました。69年には、3月に文学部史学科は卒業してしまうのですが、ストライキ中で論文提出を自ら放棄した教職過程に関わる単位を取得するつもりでした。学士入学で政治学を学びつつ、教職の単位も取ろうと思ったためです。

69年教育実習の三木教授の指示を受けて、私は他の明治大学生二人と共に、中野区の中学校に派遣されました。

この時私は、中学三年生の「三権分立」を教える社会科担当の「教生」となりました。教生は、毎日が素晴らしい日々です。

生徒のために私は、毎回、「試験に出そうなところ」を纏めたレジュメを夜、学生会館で作業しては生徒に配り、授業は時間の始まりには、もっぱら「天声人語」などの新聞の一面下のコメントや「社説」を学生に読ませ、感想を聞きました。そして他の生徒がまた感想を述べて討論するというやり方を重視していました。

「三権分立」と民主主義の関係、歴史的にどう始まり、今の日本ではどうなっているのか？などを語りました。

私の教生としての教育実習の期間に、学生会館に機動隊が乱入して、準備した生徒用のプリントが破損され使えないことがありました。また、この翌日の「天声人語」を担当した中学生が「学生の暴力は、幼稚園児にも劣る」と言うような事が書かれていたとして「幼稚園児にも劣る大学生と言うのは考えられない。意味があってやっていると思う」と発言し、そこで討論もやりました。

その記憶から、私は、私の教育実習をやったのは「東大闘争の時」と記憶していたので、そのように『日本赤軍私史』（河出書房新社 2009年）にも書いていたものですが、当時の中学生と一緒に撮った写真が見つかり、春の服装なので、もしかしたら4・28闘争前後の記憶違いかも知れないと思ひ直しています。

いずれにしても、私は社会科の先生には不足している自分の能力を政経学部で学び直そうと思っていました。また、この時の教育実習について三木教授へのレポート提出は、ストライキ中で提出しない事にしました。三木教授から「教育実習をやったのにレポートを提出しないと、単位は落第『不可』となります」と赤字のペン書きの手紙で警告が来ました。

私は「私の自らの信念に基づいてストライキに参加したものです。それを自分だけ取りやめて、単位を得る考えはありません。単位不可でも結構です」と記し、但し「教育実習」がどんなに素晴らしい経験であったか、子供たちが新しい教生を困らせようといういろいろ工夫する妨害に対峙して乗り越える楽しさ、それが生徒と逆に結びつく事になったことや、三木先生の言う「文部省や組合の方を見て教えるな、生徒の方を見て教えよ」と言うのが、とても良く実感出来たなど、機会を与えてくれたお礼と共に、単位は再挑戦する旨の手紙を送りました。

ところが、これが三木先生らしいのですが「君の手紙を読みました。君は教育実習合格です。君のような人が教師になるべきなのです。住所を見たら、君の家は私の〇〇駅に近いじゃないか。遊びに来なさい」と、今度は赤インクでは無く、青インクのお便りを頂きました。

でもそのころ私は、丁度「党活動」に初めてコミットし出したのです。三木先生とはお会いして話したかったまま、それっきり失礼してしまいました。

でも教育実習は、それでも私にとっては、やっと希望の先生に近づいた一歩でした。生徒たちの

思いを、先生がどう受け止めるか、受け止めようとしないうか、いろいろ短い間に学びました。初めて教室に入る前に、担任の先生から要注意の生徒を何人か名簿から知らされました。でも付き合ってみると、彼らはつまらない御仕着せに不満を發する正直な中学生たちで、ちっとも「問題児」ではありませんでした。また生徒らちは手ぐすね引いて教生を待っています。とくに女性なら泣かせたり、男性なら立ち往生させるのを、生徒たちは楽しんでます。

そんな悪戯は、教生期間の初めのころ教生を値踏みするように起こします。私も中学時代は、みんなでそんな悪戯をしたので良く判ります。私の場合は、2日目位に始まりました。「先生！ここん所が、読めないのので教えてくださいか？」と、一番後ろの席の生徒が手を上げ、教科書を指差しながら求めます。私はニンマリして「OK、君が先生の所にいらっしやい！教えてあげるから」と言うと、みんなニヤニヤし彼も困った様子。

「いらっしやい！先生はね、このクラスのスパイのネットワークがあるの」と言うと「本当？！」「嘘！」と大笑い。「大丈夫、嘘よ。先生もね、あなたたちより一つ若い中学2年の時に、教生の先生にやった歓迎の悪戯だから判るのよ！」と言うと、みんなゲラゲラしながら「オイ！教壇まで行けよ！」と一番後ろの男の子を促します。彼はシブシブ、ニヤニヤと前に進んで来ます。「みんな！彼のために拍手！」と、冷やかします。もう、彼の学生服の左右は真白です。生徒たちは、机の通路側側面を、白墨で真白に塗って、少し通路を狭くして置くのです。そして、教生を教壇から後ろまで歩かせて、スカートやズボンを実白にさせて「わ～い！」と楽しむのです。こんな他愛もない、楽しい悪戯です。

またある日、一緒の期間に教生をやっていた青山学院大学の英語の教生が、本当に泣かされたようです。泣かされていると隣の教室からご注進が来たので、私は乗り込んで行こうとして、担任の生徒に「先生やりすぎ」と笑われ止められました。

昔と違って授業後の校庭はロックアウトされて屯することは出来ず、近所の公園で生徒たちにも話をせがまれ十数人で語り合っていたら、見回りの先生にバッタリ。翌日の職員会議で注意されました。時間が足りず、生徒の相談に乗っていると切りがないのです。今の先生たちも生徒の方を向いてしっかりやろうとしたら、多忙すぎて出来ないでしょう。

最後の授業には、「私が大統領または首相になったら」と作文を書いてもらいました。とても良い眼で、教育の在り方を記している者が多かったです。「必ず文集にするから待っててね」と約束したのに、それを果たせませんでした。活動にのめり込み、すぐに「7・6 事件」になって以来、何も出来なくなり、何度も何とかそれだけは・・・と思いつつ、果たせませんでした。本当に申し訳ないことをしました。

最初に私が69年11月に逮捕された時には、生徒が大学に連絡して、差し入れを申し出てくれたりしました。

教生経験は、「教師になりたい」と言う、私の願いの良い側面だけを増大させました。

69年3月に文学部を卒業する頃には、仲間たちの救援ばかりか大学にも活動が忙しかったし、また友人の歌手を手伝って「付き人」的な事をやったり、暇を見つけて、友人の伯母の銀座のバーのアルバイトにと忙しい頃でした。

4月には、現思研に新入生の新しい人材が参加してきます。

そんな中で、教育実習を日々やっていたの前後のことです。3月頃には友人に付き添って、京都

の祇園会館の公演に京都に行きました。公演の合間の空き時間を使って、丁度バリケードストライキ中の京都大学に連帯行動をやってみようと考えました。当時、荒木一郎が出演料を取って大学で歌ったというので、連帯は自ら代償を得ずボランティアとして始める事だと、二人の歌手と私の三人で、京都大学のバリケードの中に入り、ギターを弾きながらキャンパスで歌い始めました。人々が集まり、雨が降り出したので、全共闘の学生の誘導で西部講堂だったと思いますが建物に入って、そこで自然発生的にみんなと歌で交流しました。学生たちに私たちがリクエストし「ワルシヤワ労働歌」を歌ってもらったり、何だか知らないけれど盛り上がりました。

二人の歌手の横にいる私にも「歌手じゃないの？歌って」と言われて、思わず私は「4.28 沖縄闘争、霞が関で会いましょう」と言いました。わっと盛り上がり、最後インターナショナルを肩を組んで歌いました。

その内数人は、宿泊している宿屋にも来て、みんなで好き勝手にしゃべりました。京都大学バリケードの連帯です。人と人が出会い、そこで感性を確かめ合い、何かを創るそんな時代でした。そんな風に私も、時には楽しんでいました。また、(雑誌)『女学生の友』に、交換日記などの話をアルバイトで書いたり好きなように生きていました。そしてゆっくり教職の資格を取って小学校か中学校の先生になりたいと思っていました。父は私が教師になると言って大学に進んだあと「房子が教師の居ない離島の先生になったらいいな。父さんは毎日釣りを楽しんで一緒に行くことにしよう」などと珍しく一度だけ、そんな事を言っていました。

69年3月頃か4月か、前ブント議長だった佐野茂樹さんから、「東大闘争を質的に超える戦いの準備のために、4・28 闘争に向けて、ブントの軍事委員会の書記局を手伝ってくれないか」と要請を受けました。学生会館4階の現思研の部屋にいつも気軽に、彼は出入りしていましたが、その調子で私も引き受けました。

私はブントや社学同に加わっていても、心情的な関わりで、私の頭は観念的な理論を受け付けられないし、何が出来る訳でもありません。でも東大闘争で、多くのメンバーが逮捕されて人材不足なので声が掛かったのだろうと、出来る事はやろうと思いました。

佐野さんは、新橋に「劇団青天井」という事務所を借り、そこを拠点にして、4・28 闘争、銀座・新橋へのデモや実力闘争の準備に入りました。そこに、仏徳二さん、松本礼二さんも出入りして、4・28 闘争の戦術をめぐる、何度も討議していました。情勢論、ロシア革命の戦術、10月革命の話など論争しつつ、「だからやろう」と言う佐野さんと、「だから止めるべきだ」と言う松本さん、仏さんは「う～ん」と考えつつ迷っているようでした。既に佐野さんの指示で「試作品」が作られ、その性能についても議論され、結局断固反対の松本さんに仏さんが同調して、「試作品」は廃棄される事になりました。

それと共に、大衆的実力闘争の最大化に向けた準備が始まりました。

「霞が関占拠」を公表していましたが、どう戦うかはゲリラ戦で決めるとしていました。

どこに角棒を保管するか、投石をどうするか、などなど。

私は、ナップザックを大量に買う様に指示され、秋葉原だったか、御徒町だったかの問屋街で、大いに買い叩いて、安く大量にナップザックを買って意気揚揚でした。

当時の私は、初めて学園闘争を超えて「党活動」に貢献する事に好奇心が一杯でした。

警察側は、東大入学試験も中止になり、学生たちがこれまで4・28は「最大の安保の前哨戦」とし

て「最大の沖縄闘争」を呼びかけており、大学で政治ストライキを次々と実行しているので、危機感を募らせていました。そして、ついに破防法(破壊活動防止法)の適用を決定しました。

この4・28闘争に向かって、新宿での騒乱を教訓に、東京駅や新橋など、金網や様々な防御態勢を取っています。霞が関には警備が1万人以上と言われていました。実際には、学生の宿泊をさせないように大学当局に呼びかけていました。

そして、4・28闘争前日に、中核派のリーダー革共同の本多延嘉書記長を逮捕しました。

「24日に2000人の学生労働者にむかって『沖縄デーの当日は、首都制圧し霞が関一帯占拠して騒乱状態を作ろう』と扇動した」という疑いという理由が新聞で公表されました。

私のアルバイトしていた銀座のバーは、社用族ではなく、社用の接待を終えた「社のトップ」がアットホームに最後に立ち寄るような小さなバーです。有名人、文化人も来る所で、国鉄の首脳陣や日本通運のトップなども来ます。国鉄の幹部も、私が活動している事は大ぴらにしていたし、ママから聞いているので、「おい、全学連」などと、いつも言ってからかかっていました。また、外務省の幹部も来ます。スイス大使は、娘が学生運動に踏み込んでいるが、どうしたら良いかと相談されたりしました。「それは人間の良心であり、とても良いことです。本人の選んだ道を支援してあげれば良いのよ」などと、私は気軽にアドバイスしていました。

この4・28闘争の前には、国鉄幹部は「オイ、全学連、君たちのリーダーに会いたい。君たちに荒らされると金がかかる。この金は税金だぞ、いくらでもカンパするから、荒す所は決めてくれと言いたいんだ」などと、本気とも冗談とも言えないような事を真面目に話しかけて来ました。

「残念でした。私はペーパーの下っ端。リーダーも知らないし、楽しくデモやっているだけよ」と言ってやりました。でも、国鉄幹部は、金網などの費用だけでも大変だ、大変だとしきりに愚痴っていました。

この4・28闘争に向けて、中核派は法政大学、社学同も全国から首都圏に学生を集め、明治大学、中央大学、医科歯科大学に泊まり込み体制を取る事になりました。4・28前日は、出撃拠点は東京医科歯科大学に決定し、付属病院の正面玄関も封鎖し、赤ヘル部隊は、27日午後800人の社学同の総決起集会を開きました。社学同の他に解放派、ML派も共同しています。

このあと、何百人が午後5時すぎ、歯学部2号館中庭の鉄棒など持ち出し、病院の玄関、1、2階ロビー、院長室なども封鎖したため、学長が夜7時過ぎ、学外者の退去命令を出しましたが、何百人の学生は退去せずに泊まり込んだと、当時の新聞にも書かれています。

この病院には約600人の患者が居たそうですが、もちろん、それらの病棟には影響を与える訳ではありません。中央大学、日本大学は、大学側のロックアウトで学生が入れず、明治大学の社学同の百余人以外の社学同の他大学生は、全て東京医科歯科大学を出撃拠点としています。大学病院内の公衆電話の番号を知っている者がいて、外からのレポや連絡を盗聴されているとしても、ましな公衆電話で受ける体制も整えました。

一方で警視庁は、まず革共同中核派を狙い打ちし、4月28日午前5時には、法政大学に捜査に入りました。東京医科歯科大学は病院のため、そういう緊急捜査は取れません。警察は、凶器準備集合、傷害、暴力行為、破防法40条容疑で、法政大学に入り角材などを押収し、また破防法容疑で、革共同政治局員で反戦青年委員会世話人の藤原慶久さんを28日朝逮捕状逮捕しています。

同じ日、この4・28 沖縄デーには社会党・総評系と日本共産党系の団体が初めて統一行動を取る事を決定し、東京代々木公園で統一中央大会が開かれています。

東京ばかりではなく、全国45都道府県318カ所に警視庁調べでも14万9千人が参加して、沖縄返還を訴えました。沖縄那覇でも、戦後最大の20万人の県民が参加して即時無条件全面的本土復帰・米軍基地の即時撤去・沖縄県民の国政参加・米国のベトナム侵略・B52常駐・原潜寄港抗議を行い、大会決議で日米安保条約破棄・米軍基地の即時撤去を訴えています。

当時、沖縄の本土復帰を求める本土側、沖縄側の人々の声は、この4・28 沖縄デーに集約されていました。4月28日は月曜日で、仕事を終えた後、東京の統一中央大会も6時夕刻から始まっています。

また、社学同を中心に集まっていた東京医科歯科大学に対して、警視庁は出動した警備1万2千人のうち、霞が関、神田を中心に機動隊、私服警官を午後から配備し、その内の数千人を御茶ノ水の東京医科歯科大学に向けました。

学生たちは、午後から行動を開始し、赤ヘルメットの約200人が、世田谷の佐藤首相私邸に押しかけて抗議行動を開始。丁度帰宅していた首相の警備陣100人が催涙弾で応戦し、駆け付けた300人の機動隊で防衛。これまでの、正規デモ陣型を転じて、学生たちは同時多発ゲリラ攻撃作戦に出たのです。

御茶ノ水での解放区、新宿・品川・渋谷などでもゲリラ戦を行います。



東京医科歯科大学の中にいた社学同や解放派が動き出すと、機動隊は催涙弾で攻撃。3階の病室を直撃したため、患者を避難させる騒ぎになりました。大学側は「ここは病院で病人がいます。注意して下さい！」とスピーカーで訴えます。

各党派の部隊は、数百人ずつ機動隊を突破して東京駅へ向かいました。「霞が関占拠」という学生の前宣伝の主張に合わせた警備の布陣の裏をかき、学生らは東京駅から逆に線路を伝わって新橋から銀座に出て、銀座カルテェラタン闘争へと戦場を広げました。

そのために、新橋にブント軍事委員会を置いていたのです。幾つもの、数百人のヘルメット部隊が晴海通りでジグザグデモを繰り返します。又、学生たちのゲリラ戦に呼応した市民や群衆が銀座・有楽町一帯で、交番や機動隊に投石し、夕方からイタチごっこの攻防ゲリラ戦と逮捕が繰り返され、新幹線や国電も止まりました。



夜 11 時過ぎになって、山手線も復活しましたが、それまでは銀座は、御茶ノ水、神田のカルテラタンのような攻防が続いていました。丁度、その真中にあった銀座のバーの私のアルバイト先の店の前を機動隊に追いかけて逃げて来た人をママは「赤ヘルメットの人、いらっしやい」と守って匿い、二つヘルメットを預かって、後に私に渡し、当日の凄い攻防を語ってくれました。私は、当日あっちこちから入る情報を集約したり、部隊のゲリラ的移動と集結、更にどちらに行くようにと言う軍事委員会の指示をレポとして伝えたりしました。中央大会に集まった 1500 人の反戦青年委員会の労働者たちも、デモに参加しつつ、連帯を示していました。

全国で、この日 1000 人を超える学生・市民が逮捕されました。被逮捕者に新入生が多いのに警察も驚いていました。権力側は、

68 年の 10・21 の新宿騒乱罪の時よりも、警備を万全に予防的な破防法適用を行いつつ、抑え込む事には失敗しました。

4 月 29 日には夜、警視庁は公安部は、革共同中核派の事務所前進社、ブントの戦旗社、ML同盟のレボルシオン社、社青同解放派の現代社や革マル派の解放社などや幹部リーダーたちの居住地で捜索を行っています。

こうして戦った者たちは大量逮捕・起訴を強いられた訳です。

4・28 沖縄闘争は「騒乱状態」を作り出しましたが、こうした戦いから、どのような展望が切り開けるのか？この戦いを巡って、4・28 闘争を「勝利」として新しいゲリラ的な実力闘争と、各地の戦いの継続を求める戦い方に疑問が提起されました。この 4・28 闘争でより急進的な「党の軍隊」による新しい武装闘争を提起して来た関西を中心とする人々は、この 4・28 闘争を「敗北」と総括しました。私自身は、初めて党の機関である軍事委員会書記局に加わり、いわば言われた事を次々とこなしていただけでしたが、この騒乱は、押さえ込まれ大量逮捕をもたらしたけれど、それ以上では無かったという思いが強かったので、当然敗北として総括し教訓とすべきと思いました。

もっとメディアを味方につけられないのか？もっと楽しめるような戦い方は出来ないのか？といった、きっとブントの幹部たちの敗北の総括と私の「敗北」は、相いれない感想だったかも知れません。

それでも、ベトナム反戦・沖縄闘争が一つになり、戦えば戦う程、広がりを持つような戦い方は、どうしたら出来るだろうと考えていました。この 4・28 闘争の総括として世界の革命と連携する世界党・世界赤軍を主張する「ブントの革命」を求める声が強まりました。党の軍事力の育成、軍事を担う「党の革命」が必要だと求める、関西の上京組の塩見孝也さんらが、強く主張し始めていたようです。

ブント・社学同は、この 4・28 闘争を経て、大いに揺れ、論争が深まって行きました。それは後に「赤軍フラク」と呼ばれる関西派を中心とする主張を巡って、ブントが分解して行く始まりとなって行きます。]

ブントは、もともと日本共産党に反対し、60年安保闘争を指導的に闘った共産主義者同盟を継承

して様々なグループが集まって出来たものです。もともと統一戦線党の内実(もっと言えば、大衆闘争機関の質)しか、持ち合わせずに来ました。権力問題に安易に結びつける政治主義的な関西派の主張にブントは混乱していきました。「権力闘争」をア prioriに運動戦や行動の急進化戦術に一面化して、進む方向に引っ張られていったと思います。

社会的な生活経験の乏しい関西の学生運動のリーダーの生活・社会実践の欠けた政治力学的構想が、より広いブントを「純化」しようとした事で、ブントの連合的多様性の良さも、また失われて行く事になります。

この後、4・28 闘争の敗北の総括を世界党・世界赤軍・前段階蜂起を実現する党の革命を引っさげて、69年5月、6月から「赤軍フラク」が活発に動き出して行きます。

私自身を振り返る時、当時の運動の中で、社会全体から俯瞰的に自分や自分たちを対象化しえない未熟なまま闘っていました。見通しよりも「今をより良く」と、心情的に運動の関わっていたと思います。4・28闘争で初めて軍事委員会書記局を手伝ったことで、党中枢の意外な貧弱さも知りました。私は大学に入る以前に正規社員として一旦会社勤めをしてきたので、その目から見ると、システムや原則の無さ、指揮系統の人脈依存、カードルたちの構想する世界と、現実の生活力の落差に驚かされました。

その一方で、真っすぐ理想に生き、そこにすべてを賭ける人々の生き方に魅力もまた感じました。もっとブントを社会から認められる存在にしたい、その一員として私も社会を変えたいと「ブント愛」も湧きました。つまりもっと闘いたかったのです。

そこに「赤軍フラク」への参加を誘われました。4・28闘争を闘った佐野さんがフラクのリーダーなのだろうと思っていたので、4・28闘争の延長のように、誘われるままに実務的協力を引き受けたりしていました。

それが、69年7月6日ブントの分裂を決定的なものとする「内ゲバ7・6事件」に遭遇します。事件を起こしたのは、赤軍フラクのリーダー塩見さんたちです。赤軍フラク活動によって、ブントから一方的に除名されると危機感を持ったことが発端です。当時のブント議長仏(さらぎ)徳二さんらに除名の考えを改めさせようと自己批判を迫り、暴力をふるいました。そしてその直後に赤軍フラクが拠点にしていた東京医科歯科大学を今度は、ブントの中大グループ(のちの叛旗・情況派の人々)に襲撃されて、塩見さんらが拉致拘留されるという事件が発生しました。

私は赤軍フラクの襲撃の場にはいませんでしたが、話を聞いて、何ということをもっともうやっつけられないと反省と共に思いました。ところが、中大グループに襲撃された時にはちょうど居合わせて、殴られ、消火器の噴射で泡だらけに打ちすえられる側にいました。さっきまでの反省はどこへやら。憤怒に変わり、このままで終わらせることは出来ない、もっとも困難な時に引くわけにはいかない、拉致された仲間を取り戻し、革命の芽を摘まれた赤軍フラクを助けねばという心情が優りました。そして、これまで考えてもいなかった「党的な活動」に一步踏み出したのです。「先生になる」それは捨てきれない夢で、赤軍フラクの活動の後には、いつか先生になろうと思い定めて、現在へと至っています。心情と好奇心の強い私は、時代の流動の中で(今から考えれば)、誤った日本における武装闘争へと活路を求める道へと進みます。反省をこめて、この1969年を捉え返しています。なお、この1969年4・28闘争以降のことは、第三部「赤軍派時代と私」の中で記すことにします。(終)